
召喚されたッ！？

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚されたツ！？

【Nコード】

N4597J

【作者名】

蒼

【あらすじ】

黒髪黒眼の少年、御薙一也はいきなり異世界に召喚され、「あなたは“救帝様”です」と告げられる。いきなりのことで混乱する、そんな少年はもとの世界に帰れるのか？ それとも違う決断をするのか――

OP・召喚されたッ！？（前書き）

さて、初めまして、蒼と申します。

この作品は作者のテンションのみで作成されています。

なので作者のテンションが低い時（主にテストとかそんな時）は更新されませんのであしからず。

では本編へどうぞ。

OP・召喚されたッ!?

「んで、ここどこだ……?」

周りを見渡して呟く。

俺はこんな神殿みたいな場所で寝起きしてるはずがない。

それを証拠に昨日もめんどくさい学校から帰って来た後に、日課である剣術の反復練習をし、

汗を流すために風呂に入り、晩飯を作って、それから至福の時間であるPCを弄ってベットで寝た筈だ。

それなのに――

「眼が覚めましたか?」

「っ!」

しまった!?

いきなり訳のわからん場所に居たせいで人の気配を探るのを忘れていた!

「私を見た瞬間に戦闘態勢に入るのはやめてください!」

「んなもん知るかッ! こっちはいきなり知らない場所に居たんだよッ!」

「それについては説明しますから警戒を解いてください」

よく相手を見てみると俺と同じかそれより下の年齢の女の子だった。

しかもかなりの美少女。髪は背中あたりまである銀のロングストレート。眼はパチツツとしていて瞳は済んだスカイブルーで十人中九人は振りむくであろうの美少女だ。

そんな子が必死に懇願してるんだから男として警戒を解かないといけないか。

「わかったわかった。警戒は解くから説明してくれるんだよね？」

「はい。まず初めに私の名前はレイラ・クライトリヒ・アルティウスです」

「レイラ…でいいのか？」

「はい」

見た目から外人さんみたいだと思ったけどやっぱり名前も外人さんだな。

まあ銀髪で日本人って言われても誰も信じないだろうけど。

「んじゃ次は俺だな。俺の名前は御薙一也。そっち風に言い変えろと、一也 御薙だな」

「一也さんですね？」

「ああ」

とりあえず自己紹介は終わったからこっちから質問すべきなんだろうか。

それとも相手の方から説明してくれるのを待つべきなんだろうか。迷うな……

「説明してもよろしいですか？」

「ん？ ああ、してくれ」

あっちから説明してくれるみたいだな。

「まずここはあなたがいた世界ではありません」

「は……………？」

こいつ今何て言った？ここはあなたがいた世界じゃない？
んな馬鹿な。

「もう一度言ってくれるか？」

「ここはあなたがいた世界ではありません」

「証拠は？」

「これでどうですか？」

そう彼女は言うのと、人差し指からポツという音とともに、ライター程度の火が灯った。

……ありえねえ。

「魔法？」

「そう、魔法です。これはあなたの世界にはなかったものの筈です。これで証拠になりませんか？」

かに証拠になるにはなるんだが……。

いきなり非現実的なことを言われると頭が混乱してくる。

これはあれか？ 最近流行りの異世界召喚物か？

「ん？」

少し混乱した頭を冷やそうともう一度周りを見渡すと見慣れた物が眼に入った。

「なんで影桜が……？」

そう言いながら愛刀である影桜を手取る。

「その武器はあなたでしたか」

「ああ。これは間違いなく俺の刀だな」

とりあえず腰に差しておく。

刀さえあればなんとかなるだろう。

「落ち着きましたか？ 大分混乱していましたが」

「何て言うか、身近な物があつたせいか少しは落ち着いたかな」

「そうですか。なら次の説明にいきます。まずこの世界は大きく分けると四つの王国に分かれます。

一つ目、商業が一番発展した王国“ジェイリス”

二つ目、魔法が一番発展した王国“グレイア”

三つ目、戦闘に特化した王国“ベルガン”

四つ目、最も平和な王国、ここ“アルティウス”

その他にも小さな国もあるんですが大きく分けるとこの四つです」
「なるほど……アルティウス？」

あれえ？ レイラの名前にアルティウスって入ってなかったか？

「はい。私はアルティウス王国の姫巫女——所謂お姫様ですね」

「マジで？」

「はい」

んじゃ俺ってやばくね？ 仮にも姫様相手に普通に喋ってるんだけど。

「ああ、言葉などは気にしないでいいですよ？ どちらかということ
そちらで話していただける方がうれしいです」

「そうか？」

「はい」

「ならそうさせてもらう」

姫様がそうでいいって言うてるんだからこれでいいだろ。多分…。

「なら次の質問。王国ということは国家体制は全て王政か？」

「はい、そうなります」

「んじゃ次は魔法について説明してもらっていいか？」

「わかりました。魔法というのは人の中にある魔力と精神力を糧に発動するものです。精神力は人間なら誰でも持っているものですが、魔力は持っている人と持っていない人がいます。これは王国毎が市民に対して一定の年齢になると検査させて数値化します」

「なんでわざわざ検査するんだ？」

「それはですね、もし自分が思っている以上の魔力を持っていたりしたら暴走したりする危険があるからです。なので王国は数値を出してそれで一定以上の魔力を持つ人には魔法学校に入ることを義務付けしています」

「なるほど」

てことは、魔力つてのは下手すると暴走するもんってことだ。

魔法つて聞くとなんでも出来そうな響きだけど、危険なものなんだな。

「魔法学校つてのは魔法を安全に使う方法を学んだりするという解釈でいいのか？」

「はい。後は魔物を討伐するための勉強もしています」

「魔物？」

魔物なんているのか？ 物騒だな。

「ええ。最近になって増えてきました。昔はそれほどでもなかったんですが……。まあ王国の危機！　っていうほどではありませんが。それでも危険には変わりませんね」

「なら魔法の種類はどんながあるんだ？」

「魔法は初級、中級、上級、精霊と別れています。」

初級は火、水、風、土

中級は氷、雷、草

上級は光、闇の九つですね」

「精霊つてのは？」

「精霊は現在——というよりも使い手がいません」

「ならなんであるってことになってるんだ？」

「御伽話の絵本とかに出てくるんですよ」

「へえ、一応どんな種類があるか聞いてもいいか？」

「いいですよ。確か時間、空間、創造、消滅の四つがありました」

「……………神の領域じゃねえか」

特に創造。これって無から有を創りだすって感じのやつだろ？

「そうですね。だから使い手はいません」

「まあ居たらいたで問題あるだろ」

「はい。次に魔法には難度が分かれています。これは

下位、中位、上位、古代の四つに分かれていて上に行くほど難しくなっていくます」

「なるほど」

基本的に元いた世界のゲームみたいな感じなわけだ。

そうなるとどのくらいが普通の魔法使いかを聞く必要があるな。

「今のところで世界一の魔法使いはどんなやつなんだ？」

「世界一ですか…？　それは多分グレイア王国の賢者　レイヴィー・

センタクス・ランバルト様でしょうね」

「その人はどのくらいの魔法が使えるんだ？」

「確か、初級と中級が全部使え、難度は古代が火と風、後は上位でした筈です」

「精霊はともかくとして上級は使えないのか？」

賢者って言うくらいだから精霊以外は全て使えるもんだと思ってたのに。

「そうですね。上級である光と闇は精霊と一緒に特別な魔法です」

「特別？」

「はい。簡単に言えば光はアルティウス王国の姫巫女——王家の女性の方しか発現しません」

「てことはレイラは光の魔法が使えるわけだ」

「そうなります」

「んじゃ闇は？」

光が王国の姫様しか発現しないとしたら闇もどっかの王国だけか？

「闇はグレイア王国の王子——こちらは王家の男性の方しか発現しません」

やっぱりそうなってくるんだな。

ふむ。だいたい聞きたいことは聞き終わったな。まあ細かいことを聞きだすと終わらなそうなんで後で聞くことにしよう。

「そついや聞き忘れていけど、ここどこ？」

「ここですか？ ここは城の召喚の間と言うところですよ」

「召喚の間……」

やっぱり俺はレイラに召喚された訳だ。なんで召喚されたかは知らないが。

そこはこの王様相手に聞きましょう。

「一応聞くけど、俺を召喚したのはレイラだよな？」

「そうですね。異世界から人間を召喚出来るのは姫巫女だけです
から」

「そっか。んじゃこの王様に会わせてくれるか？」

「いいですけど……何か用事でも？」

「ああ。とても大切な用事だ」

そう。とても大切な用事。

俺を何でこの世界に召喚したかと言うことを聞くために。

先ほどの召喚の間から出て長い廊下を歩く。ここの廊下には人が
誰一人としていない。それ以前に他の部屋さえない。

「なあレイラ。なんでここには何もないんだ？」

「さあ？」

「わかんないのかよッ！」

「この城は昔に造られた物でそういう事は文献にも載っていない
たもので……」

「そうか……」

普通って何か理由とかあるんじゃないの？

まあ気にしないけどさ。

「後どれ位で王様に会えるんだ？」

「そうですね。この廊下を抜けた先に宮殿に入る扉があります。その扉を潜り抜け、庭園の先に少し進めば王の間に行けます。今の時間ならお父様もお母様もそこにいるはずですよ」

「…その話を聞くかぎりでは中々遠そうだな」

だつて未だにこの廊下の突き当たりが見えないんだぜ？
その先つて言うんだから後何分掛かるんだよ。30分は掛かるだ
ろ。

「それなら何か話しながら歩きませんか？」

「話し？」

「はい。例えば一也さんの事とか」

「俺の事？」

いきなり俺の方に向き直しレイラは提案する。

俺の事つて何を話したらいいんだ？

特に話すような生活を送っていた訳でもないし……

「例えば、そのような武器を持っていらつしやるつて事は何か武術
をしていたんですか？」

「そうだな。俺の世界で言う剣術つて言うのをしていたな」

「剣術？」

「ああ。俺の世界の剣術つて言うのは刀を使うんだけど、この世界
には刀つてあるのか？」

「刀……ですか？ 私が知る限りではそのような武器は知りません。

……見せて貰つても？」

「ん？ いいよ」

そう言いながら俺は腰に差している影桜を抜く。

影桜の刀身は城の光を反射させながら綺麗な色を魅せていた。

刀身は闇より濃い黒光を宿し、波紋がなく、変わりに桜の葉がまるで刀身の中に入っているかのような美しい模様が刀身には見られた。

「綺麗……………」

レイラは影桜の魅力に取りつかれたような感じで見つめ続ける。

まあ仕方ないだろ。俺も爺さんに渡された時に同じ反応だったし。それにしても不思議な刀だ。どういう創り方をしたらこんな刀が創れるんだ？

「……ハッ！？」

「…大丈夫か？」

「…は、はい……／／／」

レイラは恥ずかしそうに俯く。

可愛いな。なんか小動物っぽい。

マジでお持ち帰りしたくなるやつとか出そうだな。

「ま、まあ初めてこの刀をみた奴の反応なんてそんなもんだから気にするなよ」

「そ、そうですね？」

「ああ」

そうこうしているうちにやっとこの廊下の終わりに辿り着いた。

ほんと誰だよ。こんな城創ったやつ。

出て来い、一発いいやつくれてやるから。

「それではちゃんと着いてきてくださいね？　ここまでは一本道でしたから迷いませんでしたけど、これからは曲がり道などもあるの
で」

「わかってるよ」

少し笑顔を浮かべながらレイラは扉を押す。

普通ならこんな小さな女の子が押したところで開きもしなさそうな扉だが、魔法の力か？

すつと何もないうちに扉は開いた。

「では行きます」

そう言い残しレイラ行く。

俺は少し驚いていたのでレイラが出ていくのを見届けていてから行動を開始しておた。

ちょッ！？　おいてかないで！

それにしても何か周りの視線が気になるんだが……
こっ…何だ？　まるで動物園の人気動物みたいな感じ？

「なあレイラ、何で皆俺を見てるんだ？」

「それは一也さんが“救帝者様”ですから
“救帝者様”？」

そう言いながらレイラはにこりと微笑みかける。

可愛いのは可愛いんだが……

救帝者ねえ……

随分とまあ……持ち上げるもんだ。

「“救帝者様”の説明はお父様がしてくれると思うのでもう少し待
つていてください」

「……ああ」

「？」

俺の返答が少しおかしい事に気付いたのか、レイラはおかしそう
な顔で俺を見る。

俺は、なんでもないと答え前を見る。

とりあえずは話を聞くか……

そうしているうちに庭園に着いたようだ。

「ここがこの城の庭園です。この先に王の間があります」
「へえ……」

俺は辺りを見渡す。

俺の世界にはなかった花などが所狭しと植えられている。しかし
それは美しさを損なわず、輝くような美しさを誇っていた。

「綺麗だ……」

俺は素直にそう呟きをもらす。

初めて花を見て感動したな、俺。

「そうでしょう？ この庭園はこの城で一番綺麗な場所で城で働いてる人は休憩ついでに来てここで休んだり、話しをしたりしてるんです」

「いい場所だな、ここは」

「はい！」

レイラは俺の返答に気を良くしたのか花歌を歌いながら進んでいく。

俺もそんなレイラを見ながら着いていく。そこで一つの花が目に入る。

「これは……」

「それはですね、レントラルの花と言います。この時期しか咲かない花で、色は珍しい黒色をしていますね。黒色の花はこれ以外になんですか？」

「へえ……」

レイラの説明を聞きながら俺はレントラルの花を見る。

よく見るとすぐ近くに花の説明の看板があった。

└ レントラルの花 ┘

この世界でただ一つの黒色の花もつ花。咲く時期はアイヴィーの月のみで大変珍しく、人気も高い。花からはいい匂いがし、花の蜜と花をすり潰すことにより香料が作ることが出来、これは貴族から

平民までに人気を誇るものとなっている。

花言葉 運命

「運命……か」

「どうかしましたか？」

「いや、何でもないよ。とっとと王様の所に行こう」

「そうですか？」

「ああ」

そう言いながらもレイラは俺の顔を見て訝しみながら進んでいく。
どうやら俺の言葉が少し納得出来なかったようだ。

それにしても俺の目に入った花の花言が 運命 ……か。

さては俺の 運命 はどうなることやら……

さて俺の目の前にデカイ扉があるわけだが……

「ここか？」

「はい」

俺の問いにレイラは答える。

答えた後、扉の前に立っていた衛兵に二、三言告げると衛兵は扉を開け、中に入って行った。

「もうすぐ呼ばれると思うのでお待ちください」
「あいよ」

俺は扉をジッと見ながら衛兵来るのを待つ。

数分すると衛兵が出てきて「お二人とも、お入りください」と告げてきた。

「いきましようか」

「そうだな」

レイラが先に入り俺も続いていく。

鬼が出るか蛇が出るか……

「レイラよ、よく召喚してくれた」

「はい、お父様」

開口一番にその言葉を発したのは、玉座に座るレイラの父である王様だ。横には母と思われる人物に、周りは衛兵や重要そうな人物がいた。

「して、そなたが“救帝者”でよいのかな？」

「とりあえずおっさん、“救帝者”ってのを説明してくれないか？
レイラからはあんたがしてくれるって言うからまだ聞いていないんだ」

「お前ッ！ ランゲル王に向かってその口の聞き方は何事だッ！？」

周りの衛兵や重鎮どもが顔を真っ赤にして叫んでいる。

だって俺はこの国の人間じゃないんだぞ？

それなのにどこにこのおっさんを尊敬する理由があるんだ。俺にとってこいつはどこかのおっさん以外にはありえん。

「うるさい。俺は違う世界から来たんだ。なのになんでこいつに頭を垂れなくちやいけない？」

「そ、それは……」

俺の返答に口を開く事の出来なくなった馬鹿達。

本当に大丈夫なのか、こいつら？

「よいよい、その者の言っている事は正しい。さて、“救帝者”についてだつたかな？」

「ああ、出来るだけ一回聞くだけでわかるように簡単に教えてくれ」「わかった。まず“救帝者”と言う者が現れたのは今から千年と少し前位のことだ」

えらく昔からいるんだな。

「昔は他国との戦争が酷かった。今の四大国家同士の争いがほとんどだったとはいえ、他の小国や魔物とも戦っていた。そんな時にこの国の基盤を築いた初代の王、光の女王と呼ばれるセイラ・アイグリッド・アルティウス様が召喚の術という魔法を開発した。これは異世界があるという仮定で創られた魔法で当時は半信半疑でセイラ様も創ったそうだ。まあそれでも成功し初めて異世界から違う人間を召喚したわけだ」

えゝ、何その適当な召喚の仕方は……

「その召喚された者は正義感が強く武術にも優れ、魔力も当時最強とまで呼ばれていたグレイアの魔王　ゼウス・イリシエド・グレイアとベルガンの武王　ガルカツダ・ブレイス・ベルガンの二人とも戦い引き分けたそうだ」

魔王と武王って……

武王はまだわかるんだが、魔王は駄目だろ。明らかに悪人に聞こえて仕方がない。

「そして四大国家の王達はこれ以上戦争をしても長引くだけだということばかり停戦協定と平和不可侵協定を結んだそうだ」

まあ両国の最強と引き分けたんならそうなってもおかしくないか。

「その協定を結ぶためにはその召喚された者の力なくしては結べなかったため、セイラ様は敬意を評して“救帝者”という称号を贈ったわけで、その時からこの国の国民、ひいては世界中の人間に知り渡ったというわけだ」

なるほど。言葉通りって言うわけだ。

「その事を踏まえて、この国では“救帝者”が死ぬ度にその時代の巫女が異世界から“救帝者”を召喚するようになったんだ」

わかった事にはわかったんだが……

「それは初代王女が決めたことなのか？」

「それとは？」

「“救帝者”が死ぬ度に異世界から呼び寄せるってことだ」

「いや、セイラ様は何も言っていないはずだ。その事が決まった

のは次の王である二代目王　ゼルク・リーベル・アルティウス様が決めた」

なるほどな。セイラって奴は決めたわけじゃないわけだ。

確かに召喚したはしたが、それ以降はする気がなかったわけだな。する気があるのなら自分の子供くらいには伝えるもんな。

「んじゃ次の質問だ。今は戦争とかはしていないが何の必要があったて“救帝者”とやらを呼ぶんだ？」

「歴史は知ってるのかの？」

「少しだけな」

「そうか。まあ確かに今はどことも戦争はしていない。しかし最近では魔物が出るようになった——まあこれはついでだの。一番なのはやっぱり“救帝者”がいることによってこの世界は統一されていると言っても過言ではあるまい。過去の戦争でも“救帝者”がいたことによって戦争は終結した。その“救帝者”がいなくなったらいくら不可侵条約や停戦協定を結んでいるからと言って、戦争を仕掛けてくるかも知れんからな」

……てことはだ。“救帝者”ってのは平和の象徴って言うわけだ。

「次の質問。過去の“救帝者”はその事について何か反発したか？」

「いや、特になにもしていない。まあ中には少し嫌そうな人達もいたそうだが、最後はちゃんと仕事をしてくれたらしい。まあ初代“救帝者”くらいに強い人はいなかったそうだが」

そうかそうか……

いやいやながらも無理やり仕事をさせていたわけだ……

「最後の質問だ」

「なんじゃ？」

「俺を何のために召喚した？」

俺の質問に対しておっさんはさも当然そうに、

「それはこれまでの“救帝者”のようにこの国、ひいてはこの世界を統治してもらったためじゃ」

何を当然の事を聞く、とおっさんやレイラの母にレイラ、周りの衛兵や重鎮達は俺の方を見る。

そうかいそうかい。やっぱりこっちの意見は無視で俺を勝手に呼び寄せといて、それに対する弁明もないわけだ。

……………調子に乗ってんじゃねえぞ。

「そうか。なら俺の返答は——否だ」

「「「「「なッ!?!」「」「」」

おっさん達は俺の返答に驚いているようだ。
何で驚いてんだよ。普通の反応がこれっていうのがわかってない
のかよ。

「何故じゃッ!?!」

「そうです、何故なんです!?!」

こんどはレイラまでも会話に加わって来た。
それ以前にこの場にいた全員が俺に突っかって来た。

……うるせえな。

「だいたい何で俺がそんな事をしなくちゃならない?」

「それは“救帝者”という者の仕事がそうじゃからだ!」

こいつは馬鹿なんだろうか?

「なんで俺が“救帝者”何だ?」

「それはレイラが召喚したか「こっちは勝手に召喚されたのに?」

……ら?」

おっさんの言葉に被せて発言する。

「俺は違う世界で暮らしていたのにそっちの勝手に召喚されて、拳げ句の果てには国の平和の象徴になれた？ 調子に乗ってんじゃねえぞ」

「それは「それにだ！」ッ！」

「お前達は本当に異世界の人間を召喚するという事を理解しているのか？」

「何？」

周りの人間は俺の質問の意味がわかっていないようだ。

「異世界から人間を召喚するって事は、その人間の人生が壊すってのと同義なんだぞ？ 異世界での暮らしをそっちの勝手に止めさせられてそっちの勝手に国のために働くことになるだあ？ 調子に乗るなよ！ お前ら何様だ？ 人の人生狂わせて国のために働け？ 意味がわからん。お前らは神にでもなったつもりか？ お前らがやっていることは人殺しと同じなんだよ。お前らはわかるか？ 今、俺の世界で俺の行方がわからなくなってるんだぞ？ それはどれだけの人に迷惑をかけると思ってるんだ？ だいたい俺には家族や友達だっただいたんだぞ？ それなのにそっちの都合に二度と逢えなくなるかもしれないって、どうやって責任取るつもりだ、ああ！？」

一息で言いたいことを言い周りを見渡す。

周りは俺の言葉に反論しようにも言葉が出ないようだ。

だろうな。そんな事がもし自分に振りかければあいつらだって同じ事を思う筈だし。

「なあ、おっさん。お前は責任取れるのか？ そんな命令を出して責任取れるのか？ レイラだってそうだ、お前も責任取れるのか？ 人一人の人生を狂わして責任取れるのか、ああ！？」 答えてみる

よ、なあ！？」

俺の怒りにおっさんは怯み、レイラに至っては半泣きの状態になっている。

いくらレイラが半泣きになったところで俺は言い続けるぞ？
こっちは勝手に人生狂わされてんだからな。

「そ、それは……」

「ああ！？ それはなんだよ！ 言いたいことがあるならはつきり喋れや！ だいたい“救帝者”がいないと世界が統治出来ない？
んなもん知るかッ！ 自分達の世界くらい自分達で平定しろッ！ そんな異世界の人間に力を借りなくちゃ統治出来ない世界なんて滅びろ、馬鹿ども！」

「……ッ！？」「……」

俺の言葉に周りの人間が息を飲む。

「だってそうだろ？ 異世界の人間がいなくちゃ平定出来ないんだつたらそれはお前達の世界じゃない。異世界の人間の世界として成り立つんだよ！」

「だからと言ってどうしろというんじゃ！？ 儂達だってそう出来るのならそうしたい！ しかしそれはもう無理なんじゃ。儂達が認めたところで世界が認めん！ もうそんなところまで来てしまってるんじゃ……」

おっさんは最初こそ勢いがあつたものの最後は尻すぼみとなりボソボソと聞こえる位の音量になっていた。

まだおっさんにもやる気はあつたわけだ……

それでも世界が認めないということでは仕方なくしたと、そう言いたいわけだ。

——それでも俺は……

「……おっさん」

「……なんじゃ？」

おっさんはもう何もかもに疲れ切った表情で俺を見る。

「まだやる気はあるか？」

「何？」

「だから異世界の人間に頼らずにこの世界を平定するためのやる気はあるかって聞いてるんだよ」

「……不可能「やつてもみないで不可能とか言ってるじゃねえよ！」ッ！？」

俺は叱責する。

俺はこの世で許せないものが少しだけある。

許せないって言うても俺は世界を守るとかそういう考えは持っていない。どちらかというと自分勝手だ。自分や自分と親しい人間と他人を取るなら自分と親しい人間を取る。そこに考える時間なんてものはない。何でわざわざ自分や親しい人間を天秤に掛けてまで他人を救わなくちゃならない？だから俺は自分勝手に生きる。それが周りに何と言われようと。その中で、余裕があるのなら手を差し伸べるさ。まあそれも全てに差し伸べるんじゃないかって俺が認めた人間だけだ。

このおっさんはその基準を満たした、だが足りない。
最低限を満たしただけじゃ俺は動かない。

だから叱責する。

——やる前から諦めるなど。

——気合を見せてみると。

——俺が手伝うだけの人間性を見せてみると。

「なあおっさん。やる前から諦めるなよ。諦めるんならやれること全てやってから諦めろ。あんたはまだやれることが残っている筈だぞ？」

「儂はまだ頑張れるのかの？」

おっさんは少しだけ目に生気を宿し、俺を見詰める。
そこには先ほどまでの弱弱しい誰かに頼る目じゃなく自分の意思で生きていこうとする意志が宿っていた。

「ああ。まだ大丈夫だ」

「本当かの？」

「ああ。それにあんたには頼れる人間だっているだろ？」

俺はそう言いながら部屋の中にいる人間を見渡す。

レイラを、レイラの母を、重鎮を、衛兵を。

「あんただけが頑張っても意味がない。世界を変えようと思うんなら世界が変わらなくちゃいけない。だが最初から世界を変えることなんて出来ない。そんなに簡単に出来るならもともとこういった事態にはならなかった筈だしな」

「儂——いや、“儂達”はまだ大丈夫かの？」

その言葉を聞いた周りの人間達も意志を持った目を宿し始めた。最初からこうなら俺もあんなに怒らなかつたんだけどな。俺は心の中で苦笑する。

確かに勝手に異世界に召喚された事は怒る原因にはなる。けど、その対応少しで変わった筈だ。

ただ、あちらは怠惰に過ごしてきて、他人に頼ることしか出来なくなっていたから俺はキレたんだよな。

俺だって男だし異世界には憧れはあった。

PCでそういう小説を見ていた時もそう思っていた。けどその半面やつぱり心の中ではこういった事を考えていたんだろう。

そうじゃなかったら素直におっさん達の言葉を聞いていた筈だし。

「ああ、大丈夫だ。それに――」

「――それに？」「――」

部屋の中にいる人間の声が重なる。そんな事にまた苦笑して告げる。

この世界に連れてこられてしまった以上、帰れるのか帰れないのかがわからない。

一応、探してみたりはするが、そう簡単にはいかないだろう。

だから――

「俺も少しは手伝ってやるよ。俺を最後の“救帝者”としてな」

この世は全てギブアンドテイク。最後の“救帝者”として仕事を果たし、あちらには俺が帰れるような魔法なんかを探してもらおう。それが無理なら創ってもらうとする。召喚する魔法があるなら送還する魔法だって創れる筈だ。

それまではせいぜいこの世界の思想を変えてやることにしよう。それが俺に出来る唯一の事だろうから。

OP・召喚されたッ！？（後書き）

どうでしたか？

作者は感想などを貰えるとテンションがアップします。

テンションがアップすると更新速度が上がる？のでどしどしヨロです。

1・現状把握（前書き）

やっところさブローグが終了した作者です。

最近は睡眠時間が短くなってきて昼がとても眠い……

いつまで一日一話投稿が出来るだろうか。

出来るだけ毎日投稿出来るように頑張ります。

1・現状把握

俺がキレてから十数分経っただろうか。

部屋の中にいる人間は皆、意志を宿した瞳で俺を見る。

「まず最初に言っておく。この世はギブアンドテイクで成り立っている」と

「「「「「ぎぶあんどていく??」「「「「「」

ありや、通じなかったか。

「すまん、持ちつ持たれつつて意味だ」

「「「「「なるほど」「「「「」

「俺は最後の“救帝者”として働く代償にあんたらには二つほどやつてもらいたいものがある」

「なんじゃ？ 出来るだけ意に沿うようにしてみせよう」

「一つは俺の衣食住の提供」

まあこれがなかったら人間は生きていけないからな。

「それは当然じゃな」

おっさんもさつきとは打って変わってハキハキと喋る。

「二つ目、これが難しいだろうが俺が元いた世界に帰る方法の模索または創造を頼みたい」

「帰る方法……か」

俺の言葉におっさんは難しい表情を浮かべる。

やっぱり現在ではそんな方法は確認されていなさそうだな。

「ないんなら創れ。召喚する魔法が出来たってことは送還する魔法だつて理論上では可能な筈だからな」

「うむう……。確かに理論上では可能かも知れんが……。おそらく膨大な時間が掛かるぞ？」

「別にいい、帰れるんならな。その間に俺はこっちの世界を変える手伝いをするからな。特に問題はない」

とりあえず帰れるって事を実証させなくちゃどうしようもないかな。下手するとこの世界に骨を埋めなくてはならんかも知れないし。

「そうか……。わかった、そちらの方もなんとかしてみせよう」

「ああ」

これで俺の交渉は終わり。

後々困ったことがあればその度におっさんに聞いてみよう。それなりの優遇はしてくれる筈だ。

「とりあえず俺の方はこんなもんだからこっちの世界について考えようか」

とりあえずあの後に決まった事柄をいくつか纏めておくか。

？ “救帝者” はこれが最後の召喚になると世界中に告知する

まあこれは絶対にやらなくちゃいけないことだが、一番難しいことでもある。なんせ下手したら暴動、または戦争が起こるからな。慎重に進めないと。

？平和不可侵協定を平和不可侵条約としてより強い制約として四大国家の間で取り決める

これによってもう二度と戦争をしないという風に他の国にも承諾させないとな。魔物についての事も話したりするのもいいだろう。この時に“救帝者”についての事を世界中に告知するのがいいかも。

？今まで“救帝者”で成り立ってきたこの国の考え方を変える

今までは“救帝者”が象徴になっていたが他の人物がこれを補えるようにする。今のところの俺の考えでは王と重鎮達が国の政治を取り仕切り、この国の妃、または姫巫女を象徴とすることだな。

何故かこの国の王家では女の子しか生まれないそうだし。

まあ王を決めるのは前王が指名するらしいけど……

いっそのこと王政から民主制に変えるか？ それなら象徴もいらなくなるだろうし……

これは話し合いが必要だな。

？ ？と？と？がうまくいったことでようやく始動するこの問題。この世界から“救帝者”をいなくし自分達でこの世界を平定することを民に納得させること。

他の三つをうまく取り決めたり変えたりするのは難しいかも知れないがやらなくちゃいけないことだ。そしてこの四つを全てうまく

いくことが出来れば、この世界は異世界の人間に頼らずとも自分達で世界を守っていける筈だ。

さて……ここはどこだ？

話し合いが終わった後、俺はレイラに手を引かれこの部屋へとやって来た。

この部屋に来る途中にレイラからはすごい勢いで謝られた。

「本当にすいませんでした……。私はわかっていませんでした。私達のわがままのために異世界の人の人生を狂わしてしまっているなんて……」

レイラは俯きながら話す。

その声は震えていて、今にも泣きだしてしまいそうだ。

「本当にすいません……」

たくつ、謝るなら最初からするなって言っただよ。

しかもせつかくさつき許してやってる筈なのになんで蒸し返すかな……

「なあレイラ、お前が召喚したことはもう取り返しのつかない事実なんだ」

「ッ！」

レイラは体をビクツと振るわせる。

その体を震わせるなよ。俺が何か虐めているみたいだ。

「だからこそお前は何か許しの証が欲しいんだろう？」

罪を犯した人間は大抵そうだ。

証がなければ何も出来ない。それも優しい人間ならなおさらだ。

「はい……」

「けどな？ この世界に罪を許す証なんてものはないんだ。それは自分自身の中で一生消えない傷として残る。だからな？ それを抱えて生きる。何か行動を起こせ。俺が言えるのはこのくらいだ」

そういう過ちは一生見えない傷として残る。だからこそその傷は抱えて生きなくちゃいけない。

それが人間。そしてせめてもの償いとして何か行動を起こす。

それは許しには決してならない、自己満足なんだろうけど、それでも何かをしなくちゃいけない。その人に笑ってほしいのなら。

「わ、かりました……。私はこの傷を抱えて生きていきます。だから……」

レイラは俺の手を握る。

その手は温かく、俺の体に染みわたっていった。

「あなたがもとの世界に帰れるようになるまで、私はあなたを支えます」

「そうか……。けど、それは許しにはならないぞ？」

「わかっています。これがただの自己満足だということ位は。それでも私は何かをしなくちゃいけないんだと思いますので……」

「そつか……。なら頼もうかな」
「はいっ！」

レイラは俺の手を握り続けながら微笑む。
その顔は今まで生きてきた中で一番素直な笑顔だと思った。

「んでレイラ、ここは何の部屋なんだ？」
「ここはですね、魔導室です。魔法に関連するものはだいたいこの部屋にあつて、今からここで一也さんの魔力測るんですよ」
「なるほど」

周りを見渡してみると、それっぽいものがたくさん置いてある。
中には中身が緑色の液体が入ったビーカーっぽいもの何かも置いてある。

それにしても魔法か。俺は使えるんだろうか。
おっさんの話では一応異世界から来た人間は皆魔法は使えたらしい。まあ初代より強いやつはいないらしいが。
なら俺だって魔法が使えるわけだ。
そう思うとわくわくしてくるな。魔法って男の憧れだからな！
そんなことを考えているとレイラは他の人を一人引きつれて俺の下に戻ってきた。

「ん？ あんたは？」
「こちらは私の魔法の師匠でこの国一番の魔法使い、クレウイス・アスカルド・ペリオン様です」
「ほおっほおっほお、よろしくな、坊主」
「俺の名前は坊主じゃねえよ。御薙 一也だ。そっち風で言つと一

也 御薙だ」

「なら一也と呼ばせてもらおうかの」

「ああ」

どこか捉え難い爺さんだな。なんか家の爺さんみたいだ。

「さて、一也の」

「何だ？」

「王達にいちやもん付けたという話しは本当かの？」

爺さんはおもしろそうに俺に問いかける。

「ああ、ブチギレてやったよ。ついでに説教も」

「ほおっほおっほお！ おもしろいやつじやな。王にそんな事を言える人間なんてお主くらいしかないんじゃないかの」

「そうだろうな。まあ俺はこの世界の人間じゃないから知ったことちやなかつたけど」

俺もおもしろそうに爺さんに返す。

何かこの爺さん捉え難いけどおもしろいな。

「そんな話より早く俺に魔力があるか測ってくれないか？ 早く

魔法って言うのを使ってみたい」

「そう急ぐな。もうすぐ準備が出来るからの」

爺さんはそういいながら細長い板に針がついたものを持ってきた。その先には手に付けるであろうブレスレッドみたいなものもあった。

「これは？」

「これは魔力の大きさを測るための測定器じゃ」

「ふうん。ちなみに爺さんとレイラの魔力は？」

俺は気になっていたことを問いかける。

確か現在最高の魔導師で500万位だっけ？

「儂で370万じゃったかの」

おお、ほとんどトップクラスじゃないか。

「レイラは？」

「私はまだ80万ほどしか……」

80万でどなのか……？

「まあ魔力の量というのは20歳〜30歳が一番伸びる時期じゃから大丈夫じゃろ。それからも少しずつ伸びていくしの」

「……はい」

へえ〜。普通って若い時に伸びてだんだん衰えていくものだと思っただけど、魔法の場合は反対なんだな。

「もう一つ聞くけど、レイラの年齢の一般的な魔力の量は？」

「私の学園の平均は40万〜50万です。普通のところの魔法学校なら10万もあれば優秀な方だと……」

てことは普通にレイラって優秀じゃね？

平均より上回ってるじゃん。

「ちなみにレイラの学園のトップは？」

「生徒会長で120万ほどだったかと……」

なかなか高いな。

「では一也の魔力を測ろうかの」

「ああ」

爺さんはそう言うとブレスレットみたいなものを俺の腕に填めさせた。こういうもので作ったかは知らないが俺の腕にピツタシと填まる。

不思議だ。

「俺は何かしなくちゃいけないのか？」

「別になにもせんでいいよ。ゆっくりとくつろいどいてくれ」

「わかった」

そう言うので俺は目を閉じた。
すると――

バンツ！

ビクウ！？

「な、何だ！？」

俺は目を開ける。

すると爺さんが驚いた様子でさっきの板のようなものを見つめている。

……板のようなもの？

「どうしたんだ？」

「それがのう、検査機が爆発したんじゃ」

「まあ音でだいたい予測していたけど……何で？」

俺は疑問に思う。

検査機ってそう簡単に爆発するもんなのか？

「多分じゃが……」

「どうした？」

爺さんは言い難いような顔でこっちを見る。
レイラも同じような感じでこっちを見る。

「お主の魔力の量に検査機が耐えられなかったんじゃないと思う」
「はあ？」

マジで！？

俺どれだけ魔力持ってたんだよ！

「その検査機はどの位まで測れるものなんだ？」
「これはグレイア国で作られた最新の検査機で理論上1000万ま
で測れると言われておったんじゃないが……」

軽く1000万超えかよ……

「ま、まあもしかしたら検査器が壊れていたかも知れないから他の
事をしよう！」

「……そうじゃの」

爺さんは納得出来ない顔で奥に戻って行く。

レイラはレイラでありえないものでも見たような顔をしてるし……
俺も傷つくぞ……

数分経つと爺さんは何やら水晶玉みたいな透明の玉を持ってきた。

「気を取り直してこっちは？」

「こっちは、何の魔力に適正があるかを調べるものじゃ。

火なら赤、水なら青、風なら緑、土なら茶とな」

「へえ」

こっちなら壊れる心配もないだろう。

「よし試してみるか。どうやって使うんだ？」

「ただこの玉の上に手を置くだけでよい」

「わかった」

そういうと俺は玉の上に手を置く。

そうするとまたおかしい事が起こった。

色が次々と変わる。

赤、青、緑、茶、薄青、黄、黄緑、白、黒、灰、紫、銀、金……

カラフル（笑）

「なんなんじゃこれは！？」

「なんで白や黒の色が！？」

爺さんとレイラは物凄く驚いている。
やっぱりカラフルすぎたか？

「どうしたんだよ」

「一也さん……」

「なんだ？」

「光と闇は特定の人間しか発現しないって教えましたよね？」
「ああ」

確か光がこの国の姫巫女、闇がグレイア王国の王子のみだったのか。

「それなのにあなたにも光と闇が発現しているんです」
「へっ？」

マジかよ！？

「それになんですか！ 灰やら紫、あまつさえ金と銀って私は見たことも聞いたこともありませんよ！？」
「いや、俺に言われても……」

何？ これって俺が悪いの？

「もしやすると灰、紫、銀、金は精霊魔法かも知れん」
「「えっ！？」」

どんだけ俺反則なんだよ！
まずそれって使い手がいないって聞いたんですけど！

「しかしそうとしか考えられるまい。儂達が知らない種類で4種と
言えば失われし、時間、空間、創造、消滅くらいしかないしの」
「……これも保留にするか」
「……そうじゃな」
「……ですね」

俺達三人は何とも言えない空気で部屋を片付け、部屋から出た。

1・現状把握（後書き）

感想、誤字脱字報告待ってます。

2・魔法という名の力（前書き）

早く学園での話しを書きたいと願う作者です。

そういえば今日学校で英検のテストがありました。

しかし作者は英語が苦手。てなわけで適当にマークシートを埋めてきました（笑）

そんな鬱憤を晴らすべく本編をうpします。

鬱憤とうpをかけたわけじゃないよ？w w w

2・魔法という名の力

あの意味がわからない現象を見た俺達は無言で外に出てきた。周
りを見渡すと運動場くらいの広さをした場所だった。

「ここは？」

「ここは城の兵達の錬武場です」

レイラが何かを悟ったかのような顔で教えてくれる。

「一也さんの魔法については正直『意味がわかりません』」
「ぐはっ……」

ジト目で告げるレイラ。

俺だってそう思ってるんだから言わなくてもいいじゃないか。

「なので一回魔法を使ってみようというのが私と師匠の見解です」
「なるほど……」

確かに一理あるな。

わからないのなら試してみる……か。

それは良い考えかも。

「んじゃさっそくやってみるか。なんだかんだで俺も使ってみたか
つたし」

「クスクス」

「おまつ、笑わなくなっただけいいだろ……」

俺が子供のようににはしゃいでいるとレイラに笑われた。少し視線

をずらすと爺さんまでもが顔に笑みを浮かべていた。

恥ずかしい……

「……すいません。さっきはあれほどお父様達に怒っていた人が魔法一つでここまで変わるものかと思って……」

そついいながら俺の微笑みかける。

「僕はいいことだと思うぞ？ 子供は笑顔が一番じゃからな」

爺さんに至っては子供扱いされた。

俺だって魔法って聞いたら心が揺れ動く。何度も言うが魔法っていうのは男の憧れだからな。

けど俺を子供扱いすんじゃないやねえよ。俺はもう17歳だぞ？ 高校2年生なんだぞ？

「チッ、もういいよ。んで魔法の使い方は？」

「えつとですね、まず魔法に必要な力が何だったか覚えていますか？」

「確か魔力と精神力だったか？」

「そうですね。一也さんの場合、精神力は問題ないと思います」
「まあな」

これでも剣術何かをやっていると自然に精神を鍛える修行だったってあったし？ まああの馬鹿爺さんの修行は現代人がやるようなもんじやなかったけど……

そのせいで人外クラスの身体能力が手に入ってしまったたしな……

「問題は魔力です……」

「だな……」

検査器がぶっ壊れるほどの俺の魔力。

それははたして魔力の量が多いせいなのか検査器が壊れていたのかはわからない。

「なので一番早いのは試してみることですね」

「ああ。けどレイラ、話しが最初に戻ってるぞ？」

「あう……／＼／」

顔を真っ赤にして俯くレイラ。

肌の色が白いので赤くなっているのがバレバレである。
かわいいなあ。

「そ、それでは魔法の使い方を説明しますっ！／＼／」

「よろしく頼むな」

てか爺さん空気だな。どこにいるんだ？

俺は辺りを見渡すといつのまにか爺さんはいなくなっていた。

ふむ、近くにはいないな……

俺は気を集中させ周りにいる生物の反応を捉える。しかし俺の周
りから数百メートルの範囲に人の反応はレイラだけだった。

まあ気にしないで大丈夫だろ。後でひょっこり帰ってきそうだし。

それよりも……

俺はレイラの話しを聞きながら平行思考マルチタスクを駆使して考えを纏める。

何故か気の量、密度ともに上がってる？ これはどういうことだ

？もしかしてあれか？

異世界に來ると重力の関係で身体能力が大幅に上がるという現象
か？

いや、でも待て。もしかしたら身体能力は上がっているかも知れない。けどそれは気には関係な……あるのか？

気ってのはもともと身体の中で構成される目には見えない物質なわけだ。これはヨーロッパで呼ばれるエーテルと同一のものである。

気の総量を増やそうと思ったら一般的に（気って言うっている時点で一般からは遠く離れているかも知れないが）長い時間少量ずつ気を身体の中で作りだすことだ。これによって気の通り道“気道”と呼ばれる見えない管がだんだん大きくなっていくわけだ。まあこの方法で量を増やそうと思ったらかなり時間がかかる。

もう一つの方法はかなりの荒業で身体が作りだせる気を限界まで作りだす。これによって“気道”に負担をかけて大きくするものだ。しかしこれは荒業。しかも大変危険なもので下手すると死ぬかもしれないというおまけ付きだ。

密度を上げようと思ったら、それは単に気を作りだすと時に圧縮するイメージで気を作りだすと密度が上がる。これはイメージしにくいので密度を上げることは難しい。

密度に限っては勝手に上がってもらうのを待つしか方法はない。

……まあ俺は自分で密度を調整出来るようになったけど。

まあ何が言いたいかと言えば、この世界には魔法がある。魔力ってのは気とは別の物体なんだろうけど性質は似ているっぽい。だってこの世界の空気は何か密度が濃い感じがするし。ということは俺はずっと気に近い物質を体の中に送り込んでいるわけだ。今までの世界ではそんなことは絶対になかった。人間っていうのは初めてやることは効果が高いことが多い。それは良し悪し関係なく。

それが今回はプラスに働いたんじゃないかと思う。

いきなり口から気に近いものを身体に送り込んだため、体はそれを気と判断して“気道”に通してしまっただんじゃないかと。それは

気に似ていて気ではない。

普通はそこで拒否反応を起こして“氣道”が傷ついたりするかも知れないが、今回はそれによって“氣道”が大きくなったんじゃないかというのが俺の見解だ。

適当に考えたことだから間違ってるかも知れないが、あながち間違いないような感じである。

俺が気について纏め終わると同時にレイラの説明も終わったようだ。

俺はマルチタスクでレイラの話しを聞いていたためバツチリだ。

え？　なんでマルチタスクなんてものが使えるかって？

それはな……俺の剣の師匠である爺さんは化け物みたいに強いんだ。ほんとありえないくらい。

それに勝とうと思ったなら瞬間的な判断も必要だが、複数の思考を展開して爺さんの行動を先読みしたりしなくちゃ勝てないからな。わざわざ勝つためにこのスキルを手に入れたわけだ。

……結局マルチスキルを手に入れたはいいいけど爺さんには勝てなかったが。

「わかりましたか？」

「ああ。まず魔法を使うためには魔力と精神力が必要。次に魔法を発動するための式。これは詠唱を唱えるか魔法陣を書いて、それに魔力と精神力を流せば発動する。基本的な魔法は詠唱により発動し、高度な魔法、または広域系統の魔法は魔法陣を使うことが多い。同じ魔法でも魔力と精神力の注ぎ具合によって威力も効果も増減する……であつてるか？」

「はい、完璧です」

だいたいゲームみたいな発動方式なわけだ。

しかし魔法も気と同じようで練り具合で威力が変化するのか。なら気を扱うように魔力を扱えば出来そうだな。

「それじゃさっそく魔力とはどのようなものか肌で感じ取ってもらいます」

「どうやって？」

いきなり魔力を感じろだなんて、流石の俺でも無理だぞ。

「最初は私が一也さんに魔力を流します。それで魔力を感じとってください。感じとった後、もう一度自分一人で魔力を感じとれば成功です」

「わかった」

俺の返事を聞いたレイラは「それではいきますね？」といいながら後ろに回り込んできた。

「って！ 当たってる！ 当たってるよ！ 何がと言わないが当たってるよ！」

背中当たる柔らかい二つのものに気を取られていたらレイラが起こってくる。

「一也さん！ ちゃんと集中してください！」

「う、ごめん……」

おまつ、これで集中しろってどんだけ拷問なんだよ……

そうは言っても、これを終わらせなくちゃずっとこのままの体勢か……それもいいかも。何て思いながらもちゃんと集中していく。

せっかくレイラが真面目に教えてくれているのに、俺だけこんな不健全な事を考えていたらレイラに申し訳がたたなくなってしまう。

というわけで集中するか……

そう言い聞かせて俺は集中する。瞑想するような感じで目を閉じ、自分の深層世界に潜り込むような感じで……

すると自分の体の中に今まで流れていなかったようなものがあるのを感じとれる。気に似たようなもの。しかし決定的に何か違う。

これが魔力か……

俺は魔力の流れを確認し、どのようなものが魔力なのかを体で体感する。

……ってこれは!?

俺は自分の中にある魔力にビビる。

量がありえねえ……

検査器で測ったように魔力1000万くらいは楽に越えてるな、これ……

自分の中にある魔力にビビりながらもレイラに「もう大丈夫だ」と告げ、一旦離れて貰う。

「魔力はわかりましたか？」

「わかったのはわかったんだが……」

「どうしました？」

首をコテツつと倒して思案顔のレイラ。

マジでかわいい。

「なんていうか……魔力の量がありえなかった」

「は……？」

「だから魔力が1000万超えてるのは間違いじゃないみたいなんだわ」

ポカンとしたレイラを尻目に俺は集中する。

気を集中することによって相手の気の量がだいたいわかるのなら魔力だって同じように判る筈だ。

そう思い俺はレイラの魔力の量を観察する。

…… やっぱり俺に比べたら微々たるものか。

これで確信。

俺には何故か知らんが膨大な魔力が宿ってるらしい。てことは精霊魔法の方もあながち間違いじゃないんだろう。

何故俺がこんな事になっているかはわからないが、あるのなら儲けものと楽に考えておくくらいでちょうどいいか。

それにしても俺も何かチート性能になったな。

気の量も増え、魔力も世界最高。魔法は全種使えて、身体能力も上がってる。まさにチートだわ。

「それって本当なんですか？」

「ああ。一応レイラの魔力の量も確認してみたけど、比べるのが馬鹿らしいくらいの量だった」

「そうなんですか—— って！　なんで私の魔力の量がわかるんですか！？」

何かとても驚いている。そんなに驚く事か？

「いや、集中したらわかるもんじゃないの？」

「わかりませんよっ！　他の人の魔力を見ようと思ったら宮廷魔導師クラスの技術が必要なんですよ！？」

「そんなこと言われたって……」

てか宮廷魔導師がどのくらい凄いのかわかんねえよ。

意味はわかるけど強さがわからん……

「はあ……。何か一也さんには常識に当てはめることが馬鹿らしくなってきました……」

「ちよつ、それは酷い……」

溜息をつきながら俺のほうを見るレイラ。

何か「もうどんなことが起ころうが絶対に驚かない」とかブツブツ言っていて怖いんだけど……

「とりあえず魔法を使ってみましょうか……」

「ああ。けど、何でそんなにやる気が無くなってるんだよ」

「それは……」

まあ俺のせいだってわかってるけど、そうストレートに表現されたら俺も謝らなくちゃいけないのかな、って思うからやめてください。

「はあ… もういいです。切り替えましょう」

「そうだな」

「ではまず初歩の初歩の魔法の式を教えます。これは誰もが最初に習う魔法で最も簡単な魔法です」

「どんな魔法なんだ？」

やつと魔法が使えるんだ。

俺、わくわくしてきたぞ！

「拳大の大きさの火の球を作りだす魔法です。それで式は火の精霊よ 我に宿りて その力を現わせ！ “ファイヤーボール” ！です」

そついいながら一度魔法を唱えるレイラ。
唱え終わるとレイラの手には拳大の火の球が出現した。

「そんな感じなのか……威力は？」

「なら少し遠くに着弾させますね？」

そつ言うつとレイラは手に纏っていた火の球を飛ばす。

速度はなかなかのもので地面に着弾すると小さな爆発が起きた。

「なかなかのもんなんだな」

「ええ……」

俺の言葉に恥ずかしくなったのか少し顔が赤くなる。

「詠唱も短くて便利つて言えば便利だな」

「まあ初歩の初歩ですから。ではやってみてください。コツは詠唱を唱えながら自分の魔力と精神力を練り込むような感じです」

レイラさん……そのコツはわかりにくいです。

そんな愚痴を心で零しながら詠唱する。練り込むつて気と同じよう
うでいいか。

詠唱は、確か――

「火の精霊よ 我に宿りて その力を現わせ！ “ファイヤーボール”！」

その言葉とともに俺の中から魔力と精神力が放出され火の球が現れる。

しかし俺の中から魔力と精神力は消費したのだろうか？正直消費

された感覚はない。

これは俺の魔力と精神力が半端ないほど有り余っているからなのだろうか……

そんな感じで現実逃避をしているとレイラから声がかかる。

「一也さん…… “それ” は一体何なんですか……？」

レイラの声には驚きと怯えが入り混じっている。

それもそのはず――

俺の手には何故か拳大の大きさじゃなく、1メートルほどの火球が存在しているのだから。

2・魔法という名の力（後書き）

そういえばいつのまにかP Vが一万アクセスを超えていたので何かしようと思います。

とりあえず今回は主要人物の設定でも書こうかと……

またP Vやユニークが一定数を超えたら何かをやっていききたいと思っています。

メインキャラだけ詳細に書いて、サブキャラは軽く流します。
では設定をドゾ

みなぎ
御薙 一也 かすや

年齢 17歳

身長 182cm

体重 73kg

この物語の主人公。

黒髪黒眼の少年。

顔は少し日本人にしては切れ長の眼で威圧感を与えるが自分が好意を持った相手には優しい。

かなりイケメンだが自分が世俗を離れ、爺さんと修行をしていたせいで自分の顔が普通だと思っている。そのため人からの好意に対して鈍感。

性格は基本的に冷静に物事を見るがたまにはつちやる。
嫌悪を抱く相手には冷徹な対処を取ることもしばしば。

人を斬った経験もあり、人を傷つけることに躊躇しない。しかし人を傷つけるということを理解しているためにそういう場面に出くわすまでは穏便に事を進めようと努力もちゃんとする。

能力はチート。身体、魔力ともに最高レベルで魔力に関しては未だ

に底がわからない。

特殊スキル

剣術 爺さんから習った剣術。一応免許皆伝を貰っている。
マルチタスク 平行思考のこと。これにより魔法も簡単に？

レイラ・クライトリヒ・アルティウス

年齢 17歳

身長 162cm

体重 ？

スリーサイズ なかなかの凹凸っぷり

この物語のヒロインの一人。

髪は背中あたりまである銀のロングストレート。

眼はパチツつとしていて瞳は済んだスカイブルーで十人中九人は振りむくであろうの美少女。

アルティウスの姫巫女で光の魔法を使える。魔法の資質はなかなか高く、現在でも学園ではトップクラスに位置している。

口調は丁寧だが一也に出会って常識を壊され気味。そのためたまに壊れる。

一也に好意あり？

ラングル・ベルカッタ・アルティウス

アルティウス王国の王様。

一也に叱責されるまでに、一度は異世界の人間に頼らず政治を行おうとしたが失敗。それ以来周りに流されるように政治をしていた。

しかし一也に叱責されたからは人が変わったように政務に取り組むようになった。

現在は城の住人の意識改革に取り組んでいる。

ライラ・セイル・アルティウス

本編では名前がまだ出てきていなけど、レイラの母

クレウイス・アスカルド・ペリオン

ライラの魔法の師匠でありアルティウス王国一の魔導師。

一也を孫を見るとうな感じで見守る。

一也の魔法の師匠にもなる予定（しかし予定は未定）

今のところはこんなものですね。

いつか纏めてupしたいと思います。

では次回でお会いしましょう。

3・異端の自覚、そして馬鹿を見つけた（前書き）

今日は昼に起きる予定だったのに起きたら外が真っ暗だった（笑）
疲れてんのか？

3・異端の自覚、そして馬鹿を見つけた

俺の手には直径1メートルほどの火球が渦巻いている。
なんだ、これ……？

「レイラ、これなんだと思う？」

「……一応、下位のファイヤーボールだと思うんですけど……大きいさがおかしいですね」

レイラが作りだした火球は拳大。俺の作りだした火球は1メートル。
いくらなんでもおかしくね？

「一也さん……魔法を作りだすのにどれほどの魔力と精神力を練り上げたんですか？」

「俺はそんなことしたつもりないぞ？ 適当に詠唱しただけだし……」

そんなことを言いながら、俺は火球の威力を試すために遠くの方に着弾させる。見た目だけで中身はスッカラカンとかもありえるかもしれないな。

俺はそんなことを思いながら火球を着弾させる。それと同時に鳴り響く轟音。それに伴ってこちらまで来る熱風。

……これやべえ

「ちよつ、一也さん!？」

「ごめんごめん。見た目だけの魔法かなあ？ と思ったから着弾させちゃった」

「うわぁ……」

レイラは俺の魔法が作りだした惨状を見て絶句している。
なんせレイラの火球は少しの穴が出来るくらいだったのに、俺の方は大きなクレータを作りだしていた。

俺はそんな惨状を思いながら別のことを考える。……決して現実逃避というなかれ。

詠唱したからこんなことになったんじゃない？ 魔法と言えば無詠唱だつてあるはずだ！ そっちなら威力も抑えられるはずだ。
そんなことを思い、俺は無詠唱で魔法を発動しようとする。

しかし――

どうやって発動するんだ？

詠唱つてのは言霊に魔力と精神力を練り込むことだと俺は勝手に思ってるんだけど、無詠唱となるとどうしていいかわかんねえな。
ふむ…… 適当に心の中でイメージしてそれに練り込む感じでいいか。

俺の頭の中で魔法をイメージする。

マルチタスクを使い4つの思考で魔法を組み立てていく。

1つ、魔法の詠唱を頭の中で考える。火の精霊よ 我に宿りてその力を現わせ！ “ファイヤーボール”！

2つ、魔法で作りだされる印象をイメージする。手に宿る火球

3つ、魔力を練り込む（イメージがわかねえ…… 適当でいいか）

4つ、精神力を練り込む（同じくわかんねえ…… これも適当で）

そんな適当に作った魔法の現実に具象化される。

されたはいいが、さっきより酷い現象となつて俺の手に火球は宿った。

「あの……一也さん……?」

「……何だ?」

「一也さん、詠唱してませんでしたよね……?」

「ああ」

「それじゃあなんで?」

「頭の中で組み立ててみた」

「ということは無詠唱で?」

「まあそうなるな。てか無詠唱なつてこっちの世界にあるのか?」

「はい。けどこれも宮廷魔導師クラスの技術が必要ですし、普通は詠唱した時よりも効果が落ちます」

「けどこれは——」

「「なんでさっきより大きくなってるんだ?(ですか?)」」

俺の手に宿った火球は先ほどの1メートルじゃなく“3メートル”

「はあ……」

「溜息つかなくてもいいじゃねえか」

「だって非常識すぎるでしょう? なんで下位の魔法で上位クラスの威力なんですか……非常識すぎます!」

レイラが壊れた……

しかしこの手に宿っている火球もどうしようか……適当に投げちゃえ♪

とりあえずさっきより威力が高そうなのでさっきより遠く着弾させる。

すると、やはり威力は先ほどのものより大きかったようで、先ほどのクレーターの二倍くらいの大きさのクレーターが出来あがった。

「なんで無詠唱の方が威力が大きなんだ?」

「それは魔力と精神力の練り込み具合かと……」

レイラはそういうが俺は魔力と精神力を練り込み方なんてわからないから適当にやったはずだ。なら最初と次じゃ何が違った？

………そうか！

イメージの違いか！

最初は確かにどんな魔法かを見しては貰ったが、発動の際、際立ったイメージは頭の中では組み立ててはいなかった。

けど、二度目は違う。頭の中で魔法を組み立てる際、確固たる魔法のイメージを作りあげていた。その違いか！

「なあレイラ。この世界の魔法使いは魔法を発動させる時って何かイメージする？」

「イメージですか？ そんなことはしませんよ？ 頭の中でそんな事をしていたら詠唱だって間違うかも知れませんが、魔力と精神力をちゃんと練り上げられないじゃないですか」

不思議そうに俺の問いに答えてくれるレイラ。

やっぱりイメージの差か。

ということはこの世界の魔法はイメージが明確になっていけばいくほど効果が増えていくということになるな。

「魔法の方はこれくらいでいいか。後は少しづつでいいだろ。コツもわかったし」

「そうですか？」

イメージで魔法が強くなるってことがわかっただけでも儲けものだ。

イメージで強くなるなら何かのゲームから引っ張ってくるだけで確固たるイメージが出来てしまうからな。

だが問題は精霊魔法だな……

時間、空間はイメージが付き難い。効果は簡単にイメージ出来るんだが、発動の際のイメージがわからんし、詠唱しようと思っても文献にも載っていないだろう。

創造と消滅の場合はイメージは簡単に出来そうだが、脳の許容範囲を超えそうで怖い。特に創造の方。創造って事は無から有を作りだす魔法のはず。そんな神の業とされるものを一介の人間が扱える筈がない。

どんなリスクが付くかわからないから切羽詰まった時以外は使わない方が身のためだろう。

そんな事を考えているとレイラから声が掛かった。

「一也さん、お父様が呼んでいますので王の間まで付いてきて下さい」

「呼んで？」

「はい。魔法には念話という魔法があつてそれほど遠くに離れていなければ頭の中で話し合える魔法があるんです。これは相手の魔力の質を知っていなければ使えませんけど」

「なるほど……」

なかなか便利な魔法があるもんだ。

「後で教えて貰ってもいいか？」

「はい！」

「よし。ならさっそくおっさんの用事とやらを済ませますか！」

「んで、何か用事か？」

「おお。一也か、待っていたぞ」

俺が部屋に入るとおっさんは笑いかけてくる。
その他にはレイラの母、ライラ・セイル・アルティウスと最初の時にいた財務大臣のおっさんと法務大臣のおっさんとそれと……

「えっと……あんたは誰だ？」

俺は初めて見る男に顔を傾ける。

髪は金髪のセミロングのストレート。顔は眼がキリツとしていて鼻が高い。所謂イケメンといものだ。

服装は騎士服か何かかは知らないが、いつでも実戦可能な動きやすそう、それで尚且つ綺麗な作りとなっていた。

……氣にくわねえ

そう思いながらも普通に接する。

「ラングル様、この者が来度の“救帝者”ですか？」

「ああ。まあ、“最後の”が付くがな」

にしてもおっさん、キャラが変わったな……

初めてあった時は弱弱しかったのに、数時間後にはこれかよ。

「んでおっさん、この人誰？」

「おまえッ!？」

「よいんだ。この者はこの国の騎士団副団長、ロイド・キキユード・ベオウルフだ」

「この人が副団長か……」

俺はもう一度目を向ける。

体の方はなかなかしつかりとしていて年齢では30を超えている

だろうが未だに20半ばくらいの年齢に見える。

体に纏っている威圧感や立ち振る舞いといったところを見てもなかなかのものであるということが窺える。

「それにしても団長じゃなく、副団長がいるんだ？」

「それはだな、“救帝者”が任務を放棄すると聞いて抗議に来たんだ！」と言ふことだ

ふう……うつとしいやつだな。

「団長や他の隊長格は納得したんだが、こやつだけは納得しなくてな」

「当り前でしょう！？ 何故それがその人間の義務というのにそれを放棄することに納得するんですか！？」

ああ？ 義務だと？

「それなのに王や団長は納得してしまうんですか！？ おかしいじやあり「黙れ」ッ！？」

俺はいつもは伏せている殺気を喚いている副団長とやらに向ける。それでも殺気は本気の一割しか出していないが。

「ギャーギャー喚いてんじゃねえよ。てめえは餓鬼か」

「なっ！？」

「普通は王や自分の上司が納得してんなら部下も納得するだろ」

「普通はそうかも知れないがこれだけは納得出来ん！」

「知らねえよ。大体、自分以外の人間が納得していて自分だけが納得していないところを見て自分が間違っているとは思わないのかよ」「思わん！」

ああ……こいつは糞か。何もわかっていない餓鬼か……
他の人間は一回で納得してくれているってことは少しは見る目があるやつも残っているっていうのに……

「何でそう思えないんだよ」

「それがその者の義務だからに決まっているだろ！」

義務義務って……

「勝手に義務なんか作ってんじゃないよ。こつちにとつちや迷惑なんだよ」

「なにっ!？」

「こつちは勝手に召喚されているのに義務だあ？ お前は馬鹿か？ そつちが好き勝手にやっているのに何でこつちはそれに従わなくちゃいけないんだよ？」

「それが義務「だからな」」

「こつちは義務でもなんでもないんだよ。お前が言っているのはそこらへんに歩いている人間に義務だから人生捨てろって言ってるのと同じなんだよ」

ホント何でこんな思想が植え付けられてんだよ、めんどくせえ……

「言わせておけばあ……!？」

しかも勝手に逆ギレかよ……

お前、周り見てみろよ。

皆苦笑かよ。どうせさっきの自分達を見ているような感じな心境なんだろうがな。

「ラングル王！」

「なんだ？」

「この者と決闘を申し込みたい！」

「「「「「なっ！？」」「」「」」

決闘？ 決闘ってあれか？

一対一でやる喧嘩みたいなものか？

「それは駄目だ！」

「何故ですか！？」

「当たり前「別にいいぞ？」一也！」

俺はおっさんが抗議している中、割り込んで発言する。

大体負ける気がしねえよ。

遠距離ならさっきやった魔法でもぶっ放せばいいだろうし、近接戦闘でも負ける気がしない——てか近接戦闘の方が自信があるな。この世界に来てから身体能力と気の量が上がってる時点で負ける要素がない。

「一也！」

「別にいいぞ？ けど俺が勝ったらこの件は納得しろよ？ もし俺が負けたら“救帝者”の義務っていうやつを全うしてやるよ」

「言ったな？ なら錬武場で待っているぞ！」

そう言い残すと副団長は部屋から去って行った。てか名前はなんだったけ？

「一也！」

「おっさん、さっきからそれしか言ってるねえよ」

俺は苦笑しておっさんの方を見る。

「そうだが、しかし……」

「大丈夫だって、なあレイラ？」

俺はレイラの方を見て質問する。

「確かに魔法を唱えられたら一也さんが圧勝するでしょうけど……」

レイラは何か不安なのか顔を俯かせる。

「レイラよ、一也の魔法はそれほどののか？」

「はい、お父様。正直世界一でしょう」

「……なっ！？」「……」

レイラの言葉に皆が驚く。

「先ほど錬武場で魔法の練習をしてきたんですが、下位の魔法で上位クラスの威力を放っていました」

「なんだとっ！？」

確かにでっかいクレーターを作りました、すいません。

「それは、凄いな……」

「しかも無詠唱で」

「……ぶっ！」「……」

全員が噴出した。

そんなに凄いか？ 多分イメージのことを伝えたら皆出来ると思うけど。

「一也……お前何者だ？」

「おっさんまでそんな目で見るか……」

「しかしな……。そんなことをされると誰でもこころなるぞ？」

まあ予想はしてたけどさ。

「という訳で大丈夫さ」

「けどロイドさんは近接戦闘のエキスパートですよ？」

ロイド……ああ！ 副団長か！

「大丈夫だって！ 俺にはこれがあるさ」

そう言って腰に差してある影桜を見せる。

「けど……」

「まあ安心して見てろよ。んじゃ俺は錬武場に行くが、他のやつらはどうする？」

「なら儂も見に行こうかの」

「爺さんいきなり出てくんなよ……」

いるのは知っていたけど……

他のやつらが驚いてるだろ？

「一也は驚かないのかの？」

「いるの知ってたし？」

「やるのお」

爺さんは笑いながら俺の方に向かってくる。

「他のやつらは?」

俺は周りに聞く。行くんなら皆一緒に行く方がいいだろ。

「なら皆で行くでしょう。それに重鎮は全て錬武場に呼ぶように手配しろ」

あつれえ? なんか重要人物が皆来る気配なんですけど。

「この機会に皆に言ったほうがよさそうだからな。さて、では行くかの」

何でおっさんが仕切ってたんだよ。

俺はそんな事を思いながら錬武場に向かった。この出来ごとで少しは“救帝者”の認識が変わればいいんだが……

3・異端の自覚、そして馬鹿を見つけた（後書き）

タイトル、あとがき共に大幅変更しました。

感想でそうアドバイスを貰ったので変えてみましたがどうでしょう？
何か変なところがあれば感想にでも書いてくれたら対処します。

4・決闘（前書き）

初めての戦闘描写！
何か変な感じがする……（汗

4・決闘

俺が錬武場に着いた頃には他の人達は集まっていたようだ。

「結構な人数がいるな」

俺は辺りを見渡す。数十名の人間がこの場に集まっていた。

「そうだな。一也が会ったことない人物だとすると、騎士団団長や魔導騎士団団長、副団長、魔導隊副隊長、隊長はクレウイスだから知ってるな。その他多数だな」

多すぎて把握出来ねえよ。

「君が一也君かね？」

「ん？」

声がした方向に振りむくと二人の男性と二人の女性が立っていた。一人は老齢した男性。しかしその体は限界まで鍛えたかのような肉体をしていて、その威圧感や立ち振る舞いは先ほどあった餓鬼みtainな副団長とは比べ物にならなかった。顔はどこか優しそうな雰囲気と厳しい雰囲気混じったような感じがし、目は優しそうに微笑んでいるが、いざ戦いが起こると先陣を切って戦いそうな目をしている。

髪はもう老齢のためか完全に白髪になっていて、服装がさっきの馬鹿と同じ服装である。

この人が騎士団の団長かな？

二人目の男性はどこか頼りなさそうな感じで、顔は目が垂れてい

て余計に頼りない感じがする。髪は緑色のショートで眼鏡も掛けている。

服装は青いコートのようなものを羽織っておりなかなか似合っていた。

ん、この人はわかんねえな。戦い関係じゃなさそうだけど……。

三人目は女性で、目はキリツとしていて大人っぽい雰囲気漂っている。黒縁メガネを掛けているせいか余計に知性的に見え、所謂かわいい女性じゃなくかつこいい女性という感じだ。体の発達はい余り発達していないがスレンダーといえはスレンダーという感じである。髪はダークブラウンでポニーテールのように結んでいる。この人はもろスーツのようなものを着ていた。
どっかの秘書か？

最後の女性は、先ほどの女性と比べると馬鹿になるくらい体の凹凸がはつきりしている。胸は大きいのに腰をキュツと引き締まっていた大抵の男を魅了するであろう身体だ。顔のほうは目が少しタレ目で、何故かほんわかそうに微笑んでいてどこか気が抜ける感じがする。髪はピンクの——てこれル。ズの髪型じゃね？ まるつきりぜ。魔のル。ズだよ。

読めねえ……三人の中で一番わからん。

そんな事を一瞬で考えながら返答する。

「ああ、俺が一也だけど……何か用か？」

「何、ラングル王相手に説教をかました最高で最後の“救帝者”の顔を見てみたくてのう」

白髪の爺さんは豪快に笑いながら俺に喋りかける。後ろの三人も目的は同じらしい。

「あんたらは？」

「儂か？ 儂はこの国の騎士団団長、リーク・セルバネス・ライデンじゃ」

白髪の爺さんが答える。やはり騎士団の団長だったらしい。

「僕はキリク、キリク・ルイネス・リーゼンガル。魔導隊の副隊長を務めてるよ」

緑の髪男性が答える。予想とは裏腹に魔導隊の副隊長のようだ。マジかよ……予想外だ。

「私は魔導騎士団の団長、リーネ・ボルネア・ルイスだ」
「同じく副団長、ハイン・ソルフ・ベネアです」

こちらにも予想外で魔導騎士団のトップとトップ2らしい。どうみても秘書とアイドル？にしか見えないんだけどな。

「一応知っていると思うが俺も自己紹介しておこう。
俺の名前は御薙 一也。そちら風に言つと一也 御薙だ。役職は“最後の救帝者”だな」

不敵に告げる。

そんな俺に対して4人も気を悪くしないで微笑んでいた。

「にしても言いよるのお…下手すると国民や他の国の者に殺されるぞ？」

「ほんとだよお……大丈夫なのお？」

リーク爺さんとハイネさんは心配そうに俺に尋ねる。
まあリーク爺さんの方は俺を試している感じがあるけど。

「この世界の思想なんぞ知るか。俺は俺だ。それに今回みたいに邪魔なやつが出てきたら押し通ってやるよ。口論には口論を。力には力を……これが俺の信条だ」

俺の思いを4人に告げる。

「これはこれは……」

「やるのお……」

「今までの“救帝者”とはやはり違うようだな……」
「かつこいいですねえ……」

四者四様の返事が返ってくる。
かつこいいって何か違わねえか？

「どうした？」

「いやいや、やはり王に聞いた人物像で間違いなかったと思つてのお」

「んで、合格か？」

「何？」

リーク爺さんは驚いたように俺を見る。
いや、どうみても試してる感があったじゃん。

「いやはや……これは本当になんとかしてくれるかも知れんのお」
「何が？」

「お主が言ったことじゃよ。」「“救帝者”に頼らず世界を統治すること」じゃ」

「私達だつて出来ることなら私達で世界を統治したかったさ」

「それでもこの世界の住民は許さなかったんだよね」

「“救帝者” っていうのが予想以上に根ずいていたんだよあ」

「その考えを君が壊してくれそうだからね」

ふむ…… 予想以上に“救帝者”の考えに反対の人間はいたんだな。まあ俺として権力やら強い奴の中にそういう考えが出来る奴がいるほうが助かるからいいが。

「ていうことはあんたらも手伝ってくれるのか？ この馬鹿みたいな思想をぶっ壊す事に」

俺は少しの信用を込めて問う。俺の直感が言っている。こいつらは信頼出来ると。

「無論じゃ」

「僕も出来る限りのことは手伝うよ」

「私もあ」

「私も手を貸そう。だが、まずやらなければいけないことがあるが…… 大丈夫か？」

ん？ やらなければいけないこと……… ああ！

そついや俺はここに馬鹿を静肅に來たんだつて。完全に忘れていた。

「大丈夫だつて。そついやリーク爺さんの部下だけど、ぼこぼこにしているの？」

「かまわんよ。あやつあの狂信ぶりはどうにかしないといけないと思つていたしのお。でも大丈夫なのか？ あやつはあんな考えを持つてはいるが騎士団の副団長じゃぞ？」

「大丈夫だつて。俺に勝つんならせめてあんたぐらい出来なくちゃ届かないさ」

俺は4人に笑いかけながら馬鹿がいるところに進んでいく。

「ふむ……強いのお……」

「彼がですか？」

リークの独り言に対してキリクが聞き返す。

「ああ。儂でさえ勝てないだろうなあ」

「「「なっ!?!」」」

三人は驚く。

それもそのはず、この老人、リーク・セルバネス・ライデンは戦闘最強の王国ベルカンの中でも最強に位置する帝の名を持つ、“天帝”“地帝”“海帝”の三帝の三人と同等の力を持っていると言われる。

それなのにそこに歩いていく少年には勝てないという。

「……本当ですか？」

「ああ、彼は強い。それも儂では足元にさえ届かないほどの強さじやろうな」

「そつえばあ、彼つて下位の魔法を無詠唱で上位クラスの威力を叩きだしたって言っていましたよお？」

「……………何者だ、彼は？」

4人が同時に同じ事を考える。

しかし最後に思うことは4人とも一緒のようだ。

「『『『戦つてみたいのお（ですね）（ですう）（『『『『

以外と4人はバトルマニアのようだ。

「ようやく来たか……………」

俺が錬武場の真ん中に辿り着くとロイド・キキユード・ベオウル
フ（馬鹿）が呟く。どうやら待たせ過ぎて怒っているようだ。

このくらいの時間で怒るなよ……………

「んで、ルールは？」

「それは儂が説明しよう」

おっさんが出てきて説明を開始する。

？相手を殺してはいけない。（死なない程度のダメージなら可。例
えば腕を斬り飛ばすことくらいなら大丈夫）

？武器、魔法ともに何を使用しても可。

？勝負の決着は、審判の号令（この場合はラングル王）が参ったと
言うかの二つ。

「わかったか？」

「俺はいいぞ？」

「私も大丈夫です」

「なら始めるとしよう……双方とも立ち位置へ！」

おっさんの合図で俺と馬鹿は立ち位置に着く。

「おい馬鹿、わかってるよな？」

「私は馬鹿ではないッ！ 私が勝てばお前は“救帝者”の義務を全うする。私がもし、万が一！ 負けてしまったら二度とこのことは追及しないということだろう？ わかっているさ」

嫌みつたらしく言う。

一瞬で決着つけてやろうか……

「一也さんっ！」

「ん〜？」

他の連中がいるところからレイラが声を掛ける。

「が、頑張ってください！」

「……ああ！」

顔を赤めながら応援してくれるレイラ。

んじゃまあ馬鹿を成敗しますかね。目には目を。歯には歯を。力には力だからな？

「さて、んじゃ馬鹿の成敗並びに“救帝者”なんてものは必要ないっていうことを、とりあえずここにいるやつら伝えるか」

「そんなことを言えるのは今だけだ！」

俺の言葉に憤慨する馬鹿が一名。

ああ、うるせえ……

そんなことを思いながらおっさんの決闘の合図を聞いた。

「では……始めえッ！」

「はぁッ！」

おっさんの合図と共にロイド（馬鹿）が仕掛けてくる。

こいつには様子見とかそういう考えはないのか？

俺はロイド（馬鹿）の騎士剣が上段から繰り出されるのを最小限の動きだけで避ける。上段から繰り出された一撃を避けられるのを確認したロイド（馬鹿）は手首を返し切り上げてくる。

俺はまたそれを最小限の動きで避ける。

正直話にならない。

まだ二回しか斬撃を放ってはいないが、正直これ以上は変わらないだろう。昔から化け物みたいな人間を相手にしてきた俺にとってこの程度に斬撃は止まって見える。

それから三撃、四撃と続いていくが俺は全てを避け続ける。

「どうした！ 避けてばかりじゃ勝てないぞ！」

ロイド（馬鹿）は俺が攻撃出来ないと思いこんで嘲笑を浮かべる。こいつはどこまで馬鹿なんだろうか……

大体最小限の動きで避けられている時点で自分との力の差を理解

出来ないのだろうか。

そんな事を思いながら俺は避け続ける。

二十撃くらい放っただろうか。ロイド（馬鹿）も息が少しきれてきたようだ。

感情的になりすぎだろ……

こんなんじゃ体力が持つはずがないだろうか。

「クソッ！ いい加減当たれッ！」

「誰がそんな温い斬撃に当たるか」

イラつき始めた馬鹿の斬撃は一段と雑になってくる。ただ我武者羅に剣を振り回しているにすぎなくなってきた。そんな斬撃に当たるはずもない。

右から来る斬撃を少し下がって避け、上から来る斬撃は体を少し捻って避ける。

「クソ、クソ、クソオオオオオオオオオッ！」

だんだんとこいつに付き合うのも疲れてきたので、一旦後ろに跳躍して距離を取る。

「ハハハッ、とうとう私に恐れをなしたかッ!？」

「お前はやっぱり馬鹿なのか？」

距離を取っただけで恐れをなしたって……どんだけだよ。

「リーク爺さん……」

「なんじゃ？」

後ろに跳躍すると、予想以上に跳躍してしまい観客のところまで

来てしまった。

気で体を強化してないのにこれかよ……
気で強化したらどるなるかは考えたくないな。

「部下の精神修行はキツチリと行ったほうがいいぞ？」

「これは……痛い所を突かれたのお」

「他のやつらもそうだけどな、戦いつてのは力とかも必要だが、一番必要なのは精神——心だ。これがなくちゃどれだけ力があっても宝の持ち腐れだし、心が壊れていたらあそこにいるロイド（馬鹿）みたいになってしまうからな」

「そうじゃな」

「これからはそういう事に対しても訓練するようにしろよ？」

最後にそう告げると俺はまた場所に帰ろうとする。が、何故かロイド（馬鹿）がこっちに近づいてくる。

「あいつツ、周りが見えてないのかよッ!？」

流石の俺も焦る。

俺の後ろにはおっさんやレイラ、所謂接近戦の心得がないやつだっている。

チッ!

俺は腰に差してある影桜を引き抜く。それと同時に後ろから息を呑む声が聞こえてくる。

「そんな細い剣で私の剛剣を防げると思っているのかあッ!？」

俺の刀を見たロイド（馬鹿）がまたもや嘲笑を浮かべる。

「——違う」

「何ッ!？」

俺はロイド（馬鹿）の剣が俺の体に到達する前に高速で後ろに回り込む。

「——これは刀だ。全てのものを斬り裂くな」

——天凱流 攻式壱之型 迅雷

相手の正面に目にも止まらぬ一閃を放ち、相手の後ろに回りこむ、爺さんが教えてくれた流派の基本の技で、これは天凱流 歩法 旋風を組み込んだ技だ。

この時の一閃はロイド（馬鹿）の騎士剣に叩きこんで、折っておいた。

旋風とは足に気を巡らせ溜め、一瞬で爆発させその時に出来る力を推進力として移動する技である。これは縮地とは違い全方向に移動出来るという利便性を持っている。そのため真っ直ぐ進むスピードは縮地に劣るが。

「——終わりだ」

俺はロイド（馬鹿）が気付いてはいなかっただろうが声を掛け、そして首筋に峰で殴打する。

……何かゴキッ、という音が聞こえたけど大丈夫だろう。多分…

…

4・決闘（後書き）

最近感想が来るようになって狂喜乱舞している作者です。
さて新しいキャラが出てきたんで紹介でもしておきましょうか。
主要キャラになるかわかりませんが……

リーク・セルバネス・ライデン

騎士団団長。

顔はどこか優しそうな雰囲気と厳しい雰囲気が混じったような感じ。
目は優しそうに微笑んでいるが、いざ戦いが起こると先陣を切って
戦いそうな目をしている。髪はもう老齡のためか完全に白髪。
戦闘最強の王国ベルカンの中でも最強に位置する帝の名を持つ三帝
の三人と同等の力を持っていると言われている。

キリク・ルイネス・リーゼンガル

魔導隊副隊長。

どこか頼りなさそうな感じで、顔は目が垂れていて余計に頼りない
感じがする。髪は緑色のショートで眼鏡も掛けている。

リーネ・ボルネア・ルイス

魔導騎士団団長。

目はキリッとしていて大人っぽい雰囲気が漂っている。黒縁メガネ
を掛けているせいか余計に知的に見え、所謂かわいい女性じゃな
くかっこいい女性という感じ。髪はダークブラウンでポニーテール

のように結んでいる。

凹凸は少なくスレンダーと言う方が聞こえはいい。

何故かスーツのようなものを着ている。似合ってはいるが。

ハイン・ソルフ・ベネア

魔導騎士団副団長。

顔のほうは目が少しタレ目で、何故かほんわかそうに微笑んでいてどこか気が抜ける感じ。体の凹凸がはつきりしている。

胸は大きいのに腰をキュツと引き締まっけていて大抵の男を魅了するであろう身体を持ち主。

髪はゼ。魔のルイズそっくり。

何故かヒロイン入りさせようか迷っているキャラ。

今回はこんなもんですかね。ロイドは書かなくていいですよ。多分もう出て来ないと思いますし（笑）

まあ改心して出してもいいですけど、それなら主人公と同年代の方が物語が作りやすいですし、親友ポジションも獲得出来るので多分こいつはこれっきりになるんでしょうねえ。

では次回でお会いしましょう。

戦闘描写はやっぱ難しいな……

5・疑問（前書き）

眠い……

ただそれだけだ

5・疑問

「勝負ありッ！ 勝者、御薙 一也ッ！」

おっさんの声が錬武場に響く。

俺はその声を聞き届けると、別段人を斬った訳ではないのだが、血振りをし納刀する。納刀した後、一応嫌な奴ではあったけども嫌な音が聞こえ心配なので安否を確認する。

…… 大丈夫か。

ロイド（馬鹿）の容体を確認し、救護係を呼ぶ。

俺は呼ぶと数人の兵士達がやってきて、ロイド《馬鹿》を運んで行った。… 雑な運び方で。

ご愁傷様。

「流石じゃな、儂でさえ最後の動きは目でしか捉えきれなかったぞい」

「かつこよかったよお」

リーグ爺さんとハインさんが俺の下にやってくる。

「やっぱり見えたか」

「まあの……だが、言いかえれば目でしか追いきれなかったんじゃないかな」

苦笑を浮かべ俺を見る。

ハインさんは何が嬉しいのかニコニコと微笑んでいる。

「一也くうん、そんなにいい腕があるなら魔導騎士団に入らないいい？」

そう言つとハイネさんは俺に抱きついてくる。
ちよつ、当たってる！ レイラより大きいのが当たってるよ！
俺がハイネさんの行動に狼狽しているとリーク爺さんも告げてる。

「何を言つておるか。一也は儂ら騎士団に入るのが通りじやろ？
さっきの試合を見ておったか？ あれほどの動きを出来るものなんてこの世界にいないぞ？」

「そつちこそ何を言つてるんですかあ。一也君は無詠唱で上位クラスの威力を出せるんですよ？ それなら断然魔導騎士じゃないですかあ」

ああそう言えばそんな事やつたなあ。

ハイネさんに抱きしめられて少し夢見心地な思いをしながら流れに身を任せちゃえ、と現実逃避をしていると横槍が入って来た。

「何してるんですかつ！」

「おぶう！？」

何故か知らないがレイラに吹き飛ばされた。その際、ハイネさんはちゃっかりと避けていた。

そこは言つてくれよ……

俺はそう心で思いながら立ちあがる。

「痛つつ……どうしたんだ、レイラ？」

「な、何でもありません！」

ええ、何でもないので俺って吹き飛ばされたの？
俺は少しいじけつつも未だに言い争いをしているリーク爺さんと

ハインさんを止める。

「二人とも、いい加減にしないのか？」

「「なら一也（君）はどっちに入るんじゃ（ですかあ）！？」」
「うおい！？」

いきなり二人に詰め寄られて焦る。

救援を求めてレイラを探すも、何時の間にかいなくなっていた。
ちよっ！？

「それなら間を儂ら魔導師隊に入らんか？」

「そうですね、それがいいですよ？」

今度は爺さんとキリクさんが混ざって来た。

あんたらもかッ！？

「さあどこに入るんじゃ？」

「もちろん私達魔導師騎士団だよな？」

何時の間にかリーネさんまでも……

神よ、我を見放したのか……

そう絶望しているところに今は天使とも思えるレイラが帰ってきてくれた。

流石レイラ！

そう思っ、この争いを諫めてくれると思っていたのに、超弩級の爆弾を落としてくれた。

「一也さんは私と学園と一緒に帰ってもらうんですよ？ だから皆さん諦めてください」

最高の笑顔と共に落としていつてくれました。

「……もう一度言ってくれ」

何か幻聴が聞こえた。

「だから私と学園に行ってもらいます」
「Why？」

つい英語で返してしまったそんな俺は悪くないはずだ。

「それについては俺が説明しよう」

急なおっさんの登場。

ホント、このおっさん段々キャラが変わってるんだけど……大丈夫なのか？

まあ男らしくなって頼りになることにはなるんだが……

「何で俺がレイラの学園に行かなくちゃいけないんだ？」

「まあ説明を聞いたらお前も納得するだろうよ」

……何かむかつく。

「んで？」

「最初の理由としてはレイラが通う学園、ルイスフェーレンバルグ学園。通称ルイス学園は何に対しても一番優秀なものが集まる学園なんだ」

「何に対しても？」

「そうだ。例えば魔法だったり格闘戦闘、政治学に商業学、その他もろもろだ」

なるほど。

言えばこの世界にいる学生の一番優秀なものが集まる場所ってことか。

「その場所で俺の存在、“最後の救帝者”ということを広めるのか。一番優秀な学生ってことは国に帰っても重要な役職や高い権力、はてはレイラも通っているということは王族までそこに通っているという訳だ。その人間達に“最後の救帝者”ということを認めさせればそれだけで目標に近づくという訳だな。そんなに優秀な者達なら自分の親とかにも進言したりするだろうし」

俺はおっさんのしてほしいことがわかったのでその事に対して納得を示す。

「理解が早くて助かる。……というより早すぎだ」

「これくらい少し考えたらわかるだろ？」

何を変な事を聞くんだ？

「それがわかるのはお主だけじゃと思うぞ」

「そうだねえ。私はわかんなかったよお？」

爺さんとハイネさんが呟く。

「その知力、やはりうちに欲しいな……」

「諦めましょうよ……」

リーネさんはどうしても俺を部隊に入れたいようだがキリクさんに止められている。

「僕は一度戦ってくれるのなら文句はないのぉ」

「は？」

リーク爺さんがずっとボケた事を言う。

戦う？ 何で？

「お主だつてわかるじゃろ？ 自分より強い者がいるなら挑みたくなるのが武人というもの」

リーク爺さんは眼を滾らせて俺を見つめる。

もはや周りにいる人達のことは完全に意識の外だ。

……強いな。力じゃなく心が。

「俺は自分より格上としかほとんど戦ったことがなかったからあまりそういう風には思えないが……」

俺はそう呟きリーク爺さんに向き直る。

「——そう言われると勝負しないといけないな」

闘気を張り巡らせる。

そうした一触即発のなか、

「やめんかッ！」

爺さんの言葉で我に返る。

「リークよ、主がそんなに興奮してどうする」

「す、すまん……」

リーク爺さんが素直に謝る。

「一也もじゃぞ？ 主の力もこの場にいる誰よりも強いんじゃないから少しは自重しろ」

「ごめん……」

俺も素直に謝る。

けど爺さんの言葉に引つかかる。

俺ってそんなに強いのか？

確かに刀を使った近接戦闘なら負ける気はないが、魔法を使われたら初心者の俺になんて簡単に倒せると思うんだがな。

「二人とも反省したな？」

「はい……」

俺とリーク爺さんは説教される。
何かシユールだ。

「そのくらいにしておけ」

「ラングル王……」

ナイスおっさん！

「それに戦いたいのなら戦わせればいいだろ？」
「何ですと？」

おい、おっさん。どういう事だ？

「とりあえず一也、レイラと共に学園に行くことには納得してくれるのか？」
「ん〜」

俺はチラッとレイラを見る。

そこには捨てられた子犬のような眼を持つ銀髪の美少女がいた。
あれは……反則だ……

「わかったよ」

「流石一也さんっ！」

「うわぁっ!？」

いきなりレイラに抱きつかれた。

何なのこの国！？ 人に抱きつくのが流行ってるの！？

「いいなあ」

「お前は年齢的に駄目だろ……」

ハインさんがまた抱きつきたいような顔で呟くとリーネさんがつつむ。

「リー！ネエ！ちゃあ〜ん？」

「ス、スマンツ！」

「許しませんよお〜！？」

あれほどニコニコ顔だったハインさんが冷たい笑みを浮かべながらリーネさんを追いかけて行った。

怖っ！ やっぱ女の人には年齢の話はタブーなのはどこの世界でも一緒なんだな……

俺は見当違いのことを考えながら辺りを見渡す。

「それで王よ、戦ってもいいというのは？」

リーク爺さんがさっきのおっさんの話しの詳細を聞く。

「あれか？ まだレイラの学園は始まらないだろ？ その間にせめてこの城下町の人間には“救帝者”の廃止を伝えたくてな。今のところ城の重鎮の位置にいるやつは納得してくれたからな」

「早いな」

まだ会って数時間でこれだけ出来るのかよ……

「まあ少し無理やり行った感はあるがな」

おいおい。

「まあそれでレイラの学園が始まると同時に一也にも学園に行ってもらおう訳だ。ああ、証明書とかはこっちで用意しておくから心配はないぞ？ それにレイラとも一緒のクラスにしてもらう」

権力大活用だね。

「んで出ていく際に城下町の住民に伝えようと思うんだが、それだけだったら絶対納得しないだろ？」

「まあそりゃな……」

そんな簡単に行くなら俺はこっちの世界に来てないだろうし。

「だからその時に一也にはリーク、リーネ、それにクレウイス翁と決闘してもらいたい」

「……本気か？」

いくら何でもそれはやり過ぎじゃないか？

今上げた三人ってこの国の最大戦力じゃないのか？

「いや、このくらいしないと住民もわからないだろう。俺達は変わらなくちゃいけないことを。このまま頼ってばかりいたらいつか俺達は崩れ去るということを……」

……まあおっさんの言う通りだな。

もし今の王家が全員暗殺なんてされたらもう“救帝者”が呼べなくなるのと同義だし。

「だから俺達はもう歩くしかないんだ。それがどれだけつらい道のりになるうとも」

「おっさん……」

「ラングル王……」

ほんと人つてのは何があるかわからないもんだ。数時間前までは弱弱しいおっさんだったのに、今ではこんな大きくなって。

……眩しいよ。

「わかったよ。俺がその役を引き受けてやるよ」

「いいのか？」

おっさんは俺を心配するが、俺もおっさんにここまで勇姿を見せられたらやるしかないだろ。

「儂も賛成だ。それに残りの二人も賛成してくれるじやろ。な？」

そう言つとさっきまでは確かにいなかったのに、俺が知りあつた城の住人が全員いた。いや、それ以上に知らない人もいる。

「その任、しかと果たしましょう」

リーネさんは臣下の礼を取る。

「久しぶりに本気が出せるのかもしれんのお」

爺さんが笑いながら、しかしどこか寧猛な笑みを浮かべながら俺を見る。

他の人達がここまでやる気を出してるんだ。俺だって本気でやらないとな。

「おっさん、レイラの学園が始まるのはいつだ？」

「今から一カ月後。ここを出発してから十日はかかるから二十日にはここを出なくてならん。だから余裕を持って十五日後に決闘を開催するが……いいか？」

俺達四人を見渡す。

俺達は一様に頷き返す。

「なら詳しいことが決まったら連絡を入れる。大体のルールは今日と同じ「待った」何だ？」

俺はおっさんの言葉に割り込みを掛ける。

……それじゃフェアじゃねえ。

「俺はリーク爺さんの時はこの刀だけ、爺さんの時は魔法、リーネさんの時は両方使う。これじゃないと正々堂々じゃないだろ？」

ニヤツと笑いながら提案する。

「大丈夫なんですか？」

レイラが心配してくれているが問題ない。

「当たり前だ……俺だぞ？」

俺は不敵に告げたのであった。

さて激動の一日がやっと終わるようだ。あれからおっさんに客間に通された。部屋は広い。てかこれどこが客間だよ。完全に王の部屋じゃんか。何で客間に天蓋付きのベットあるの？ おかしいよね？

まあそんな事を思いながらも次は夕食に呼ばれたんだ。まあ呼んでくれなかったらキレてるけどな。

それで行ったら何のって、これまた豪華。しかも美味い、拔群に王ってこんな食事をいつも食べてるのかよって少し毒づきながら尋ねると、「今日は一也さが来たんで軽い祝宴を開くことになったんですよ」とうれしそうに答えてくれた。

……何かこそばゆいな。

そんな事を思いながらおっさんやハイネさんから進められた酒を飲んだ。え？ 未成年が酒を飲むなって？

郷に入らば郷に従えって言う言葉があるだろ？ 俺はそれを実演したんだ――

はい、嘘です。もとの世界でも呑んでました。あれですよ、あっちの爺さんに無理やり吞まされたんだよ？ 決して俺から呑んだんじゃないからあしからず。

そんな祝宴は酒が入ってからおかしくなった。

まずレイラが泣きだした。どうやら泣き上戸だったらしい。それを泣きやますのを俺に任せやがったおっさんにはこの恨みをどうやって返そうか思案中だ。

けど俺は頑張ってレイラをあやして寝かしつけたんだ。凄くね？ 俺頑張ったよね？

それなのに次はハイネさんが絡んでくるんだよ。どうも絡み上戸らしかったんだけど、あの体で抱きつかれたりしたら俺も平静を保つのが難しいってことを理解してくれないかな？

大体何で俺なんだ？　俺なんて強いかもしれないけど、それだけだろうに。顔はイケメンじゃないし……　ああむかつく！

まあそんな誘惑も耐えて、正直どさくさに紛れて触ってもいいんじゃない？　とは思ったけどやめといた。何か後が怖いし。

まあそんな疲れる場所には居なくなかったから俺は他のまだ呑んでるおっさんに部屋に戻るって言って帰ってきたわけだ。

そう言えば言っていなかったけど俺専用のメイドさんが付いたんだ！

メイドさんだぜ？　男の憧れだぜ？　しかもめちゃくちや美人さんなんだぜ？

名前はアイリ・フランスさん。歳は俺より3つくらい上って感じの大人の女性。顔はどちらかというと日本人に近くて眼は綺麗な琥珀色をしていた。髪は俺と同じ漆黒のロングストレートで腰あたりまであった。

しかも体の造形美が半端ない。メイド服の上からなら少しだけ判る、大きくもないが小さくもない、所謂中間の大きさが、女性にしては高い身長に長い手足、文句のつけどころがない。こんな人にお世話してもらえるんだから男の俺としてはうれしい訳さ。

……　まあ相手にしてくれないと思うけどさ。

そっいえばアイリさんの間にもう一つ名前がないから何でなのか聞くとそれは爵位名らしい。

この世界の爵位ってのは俺の世界のほとんど同じものらしい。違うところは血統が同じ人でも同じ爵位はないそうだ。

爵位を貰うにはそれなりの地位につくか何か功労をあげると貰えるそうだ。

俺って貰えるのかな？

そんな一日の事を取りとめなくベッドに横になりながら考える。
もう外は真つ暗でもし時計があるならば深夜を回つただろう時間
だ。そんな誰もが寝静まつた時間に俺の部屋の扉が開く。

俺はベッドの中に入れておいた影桜を手に取り気配を探る。

(……相手に敵意がない?)

こんな時間に部屋に、しかも音を立てずに入ってくるのなら何か
しらの害意を持っているはずなのに、この侵入者は持っていないかっ
た。

(誰だ?)

そんな事を考えている中でも侵入者は近づいてきて、とうとう俺
のそばまでやってきた。

俺は眼を閉じて、寝ているように見せているために相手の顔が見
れない。そして少し時間が立つと、侵入者が何か俺の下半身をいじ
つて、ズボンをずらして――

ズボンをずらして?

「って何やってんですかつ!？」

「あら、起きてたんですか？　なら声をかけてくださってもよかったですじゃないですか」

侵入者は俺に付いたメイド――アイリさんだった。

「どうしたんですか、こんな時間に？　それよりズボンを返して下さい」

俺は問いながらズボンを返してもらおうと手を伸ばす。
しかしそれはアイリさんの手によって遮られる。

「返して下さいよ……それで？　何か用ですか？」
「えっ、用がなくちゃ来てはいけないんですか？」

ぐっ、普段は大人っぽいのにこう上目遣いを使われると保護欲が

……

「ま、まあ来ていいんですけど、今の時間を考えるとちよつと……」

もう真夜中と言って差し支えない時間なので、自重はしなければ
ならないと思う。

「それなら大丈夫ですよ？　ちゃんと用があつてきましたから」
「あつたんですか……それで？」

俺は疲れて溜息を吐きながら尋ねる。
「こんな人だったっけ？」

「夜伽をしに来ました」

「は？」

何か最近幻聴が聞こえるな。

「だから夜伽にきました」

「えっと……夜伽ってあの夜伽？」

「一也様がどの夜伽を想像しているのかわかりませんが一般的な夜伽だと思います」

はあ！？ 夜伽ってあれだろ？ 男と女が一緒に寝床でするあれだろ！？

なんでアイリさんが来るんだよ！？ てかまず俺が夜伽をする理由がわからんよ！

「どういうことか一から説明してくれますか？」

とりあえず話を聞く事にしよう。

そうじゃないとわかるものもわからん。

「メイドというものは仕えた主に対してそのような行動をするのは一般的ですよ？」

「いや、一般的かも知れないけど……それに貴方の主はこの国王でしょ？」

そう、この人の主は俺じゃなくおっさんの筈だ。

「いえ、あの方には契約を解雇して貰いました」
「は？」

契約を解雇？

「そうでなければ貴方様にお仕え出来ないじゃありませんか」

何を当然のことを、みたいな感じで俺の方を見られても困るんだけど……

「……何で？ はっきり言って俺は貴方に仕えてもらえるほどの人間じゃありませんよ？」

俺は少し戦闘が強いどこにでもいる一般人だ。そりゃ戦闘だけなら問題ないかも知れないけど、はっきり言ってアイリさんにそれだけで釣り合うとは思っていない。

美しい顔に、完璧な身体、それに家事能力が完璧なメイドなんて俺には釣り合わない。正直この人に釣り合う人間なんてこの世界にいるのだろうか？ それほどの人物なのだ、彼女は。

「何を言ってるんですか……」

アイリさんは嘆息する。

「それを言うなら貴方ほどの人物に釣り合うとは思わないのは私ですよ？ その美しい、神がいるのならまさにそのような綺麗で美しい造形を持ち、誰一人さえ追いつく事の出来ない高みにいる貴方に私は仕えてもいいのでしょうか？」

俺の顔が美しい？ んな馬鹿な。

「待て待て、俺の顔は普通だろ？」

「その御顔で普通なんて言われたら、この世界では誰一人として普通の域さえも届きませんよ?」

「俺、前の世界でもかつこいいなんて言われたことないんだけど」

「どうせ、その御顔があまりにも美しすぎて喋れなかったんじゃないですか?」

「どんだけだよ。」

「ま、まあ顔の事は置いておこう」

「こう何度も美しいなんて言われると恥ずかしい。」

「もし俺が貴方を雇うなんて言わなかったら貴方はどうするんですか?」

「そんなの簡単です。どこかで野たれ死ぬか誰かの慰み者とされるだけでしょう」

「ぶっ!」

「なんて平然にしかも堂々と言うんだよ。」

「だから私は貴方様に仕えたいのですが?」

「大体俺は貴方を雇えるほどのお金を持っていないんだが……」

「俺は今日来たばかりかだぞ?それなのに金があるはずがない。」

「それならギルドで稼げばいいでしょう。貴方様ほどの強さをお持ちならすぐに集まるでしょう。それに少しの間なら私自身のお金もありますし、王様に頼めばお金くらいくれるんじゃないでしょうか?」

「それもそうだろうが……」

でも……

「なら一つだけ聞いて良いか？」

「はい、なんなりと」

——なら

「何で貴方は俺に仕える気になったんですか？」

5・疑問（後書き）

うう…ストックが無くなって来た……

しかももう少しでテストだ。

どうしよう……

まあそんな鬱なことは無視して新ヒロインの登場です！

メイドさんはいいですね（´、`）

なごみます（笑）

はつきり言ってアイリさんについて書きすぎたww

いくらメイド好きでも自重しなければ（汗

アイリ・フランス

年齢 20歳くらい？

体重 ？

スリーサイズ 一也が言うには完璧らしい

顔はどちらかというと日本人に近くて眼は綺麗な琥珀色。

髪は漆黒のロングストレートで腰あたりまで。

体の造形美が半端ない。大きくもないが小さくもない、所謂中間の大きさだが、女性にしては高い身長に長い手足。

一也のメイド？

6 ・覚悟（前書き）

眠い……てか最近前書きにこれしか書いてないw

6・覚悟

俺の問いに眼を閉じるアイリさん。これを聞かないことには返答しようがない。

「……率直に言いますと、御顔や貴方様の強さはどうだっていいんです」

「ん？」

あんだけ褒めておいてどうだっていいのかよ。

「私は貴方様の生き様に心惹かれたのです。たった一人……この世界に呼ばれて誰にも頼れないという状況でさえも自分の信条を貫く貴方様に……」

眼を開け、しっかりと俺を見つめる。

その瞳には嘘をついているようなものではなかった。

「てかあの時居たの？」

全然気付かなかったんだけど……

「はい。ただ影になるところに居ましたから……。その時です。私はこの人に仕えたいと。何かしてあげたいと思ったのは。ただの自己満足と言われてもらってもかまいません。私だって自己満足だと思ってますから……。けど、それでも、私は貴方様のお力になりたいんです」

「そっか……」

全てを言いきったアイリさんは俺の返答を待つ。

ああ……

この人も強いなあ……

本当に美しい人だ……

外だけじゃなく内まで、いやもしかしたら内の方が美しいかも知れない……

「俺に仕えたらどうなるかわかりませんよ？　もしかしたら、この世界の人間に罵倒させるかも知れない。いや、罵倒だけならまだマシか……。殺させるかも知れないですよ？」

「かまいません。貴方様がその道を進むなら私は徹底的に、誰も貴方様にそんな事をさせることのないようにサポートします」

「それに、もし帰る方法が見つかったら俺は貴方を残して元の世界に帰るかも知れないですよ？」

「かまいません。勿論のこと、付いていきます」

そんな即断即決を決めれるくらいアイリさんの心は決まってるのかよ……

ならこれで最後の質問にしよう。

「俺は……貴方を不幸にしてしまうかも知れませんか？」

俺が一番これが怖い……

こんなに自分を慕ってくれる人が不幸になるのが……

この世界に来て、たくさんの良い人達に出会った。

おっさん、ライラさん、爺さん、リーク爺さん、キリクさん、リネさん、ハインさん、他の人達——それに、レイラ……

そんな人達が不幸になるのが、恐いんだ……

「——そんなことは絶対にありません」

「えっ？」

アイリさんはそんな俺に微笑みかけてくれる。
その微笑は今まで見た笑みの中で一番輝いているように見えた。

「——だって、私の不幸とは貴方様に仕えられない事。幸せは貴方様に仕えられること。罵倒？ 多いに結構です。私の人生です。貴方様に私の幸せまで決められるほど私は落ちぶれてはいませんよ？」
「——一也様」

ああ、そっか……

俺はどこかで自分が他の人間とは違うと思ってたんだろうな……

下手に魔力なんて持ったから——いや、もとの性格だった
だろうな。

どこかで俺は自分が大切と言った人を見下していたのかも知れな
い……

そうだ……

他の人の幸せなんて俺が決められるわけがないんだ……

人の幸せなんて多種多様。本当に心の底から思っていることを全
部理解出来る人間なんていないのに……

それなのに俺は傲慢にも、人の幸せを勝手に、自分勝手に決めて
しまっていた……

……これじゃあ“救帝者”に縋っている奴と同じじゃないか。

傲慢勝手に他の世界の人間に世界を統治しろと言っている人間と

同じじゃないか……

こんなじゃや人の事を言えないじゃないか……

俺は心の中で自嘲していると、ふいに抱きしめられた。

「アイ、リ……さん？」

「そう悲しまないでください。貴方様はまだ幼い。これから成長出
来るんです」

さつきよりも強く、それでいて優しく抱きしめられる。

俺はそんな心地よさに身を任せながらアイリさんの話を聞く。

「そんなことで崩れないでください……。貴方様はこの世界を変え
る人物になるんですよ？」

「俺には「出来ますよ」ッ!？」

俺の言いたい事を先読みされ、そのことを否定された。

「出来ますよ、貴方様なら……この世界で一番強い心の持ち主なんですから」

それは貴方ですよ、アイリさん……

アイリさんの信じて疑わない言葉を聞いて俺は決心する。

——絶対に“救帝者”の制度を廃止させてみよう。
自分を限りなく信じてくれる人のために。

——俺は成長しよう。
もう二度とあんな考えをしないように。

——俺は信じてみよう。
俺のことを思ってくれる大切な友たちを。

——俺は作ってみせよう。
皆の美しい笑顔を。

そのために——

「アイリさん」

「はい」

「俺に力を貸してくれますか？ 俺一人じゃどこかで崩れ落ちるかも知れない。レイラ達がいるけどいつも俺の傍にいないとは限らない。けどアイリさんは傍に居てくれますか？」

俺が口を開くと、アイリさんは、その言葉を待っていました！
と言わんばかりの笑顔に俺に告げる。

「当り前です。私はいつでも貴方様の御傍に。どんな時でも貴方様
を支えましょう」

「……そっか」

なら俺の心は決まった

「俺に仕えてくれますか？ アイリ・フランスさん」

俺は堂々と。迷わず告げた。

「はい。この時より貴方様は私のご主人様です、一也様」

「それじゃ今日はもう遅いけど一つだけいいですか？」

俺は尋ねる。

「その前にご主人様、私には敬語は必要ありません。普段の喋り方
で結構です」

「けど……」

俺はこの人にいつもの言葉で喋れるのか？

「それより、ご主人様つてのをやめてください！」
「駄目です」

ピシャツ、と言いきられる。
そんな即答しなくても……

「ご主人様以外になんて御呼びしたらいいんですか。ご主人様はご主人様です。それより敬語をやめてください」
「そっちこそご主人様つて言つのをやめてください」

く以下エンドレスく

「はあはあ……折れてくださいよ」

「はあはあ……これに関しては折れてはいけません」

くそつ、いつまでこんな不毛なやり取りを続けられ……
しょうがない、最後の手段を使うか。

「なら一つ提案です」

「提案ですか？」

首を傾げるアイリさん。

「お互いに妥協して、俺は敬語を止めます。だからアイリさんはご主人様つていうのをやめてください」

これが妥協案だ。

これが通らなかつたらどうすることも出来ない。

「……わかりました、では一也様と御呼びさせていただきます」

「様付けもやめて欲しいんだけど……まあしょうがないか」

二人ともがやっと妥協した。

これでようやく本題に入れる。

「んじゃ本題に入りま——じゃなかった、入るぞ？」

「はい」

アイリさん相手にタメ口ってのは慣れない。

「まず、俺達に今、最速で必要なのは資金だ」

これがないやアイリさんを養うことが出来ないので、金は早急に集めておきたい。

「そうですね、まあ私の方はまだ残っていますが……」

「それじゃ俺がヒモ扱いになる。おっさん相手ならまだいいがアイリさん相手は嫌だ。だからまず資金集めをしようと思うんだが……アイリさんがさっき言っていたギルドってのはどんな感じなんだ？」

まあ十中八九、俺が知っているような組織だろう。魔物狩りや薬草集め、果ては届け物と言った、所謂何でも屋だ。

「ギルドと言うのは街毎に設置されている組織のことを言います。

そこでは魔物狩りや採集といった仕事が冒険者や旅人達のために依頼が集まるようになっていきます」

「なるほど」

冒険者や旅人の資金提供といったところか。

冒険者や旅人なら魔物相手にも引けをとらないだろうし、採集な

どで森の深くなんか行っても無事に帰ってこれるだろうし。

「まあ今では腕に覚えのある人が資金集めや有名になりたいという感じで、誰でも依頼が引き受けることが出来るようになっていきますが」

「有名？」

「はい。ギルドでは下がG、それから順にF、E、D、C、B、A、S、SS、SSS、Mとランクが付けられています。これは依頼をこなしていく毎にランクが上がる仕組みになっていてAランクになれば爵位も貰えます。爵位があるとか何かと便利なので皆さんがギルドに行くように近年ではなりました」

「へえ」

「そしてSクラス以上なら城などからもたまに名指しで依頼が回され、依頼を成功させることが出来れば普段より多い報酬を貰えるので皆さんは必至にランクを上げているということです」

「Sランク以上の人はどれくらい居るんだ？」

「Sランクでいたい国に20人から30人。SSランクになると両の手だけの数で足りません。そしてSSSランクになったら片腕だけで事足りるようになります」

「ふむ……」

予想以上にSSSランクがいることにビックリだ。

普通そういう最高のランクって世界に一人とか過去の英雄くらいなんじゃないのか？

「簡単に言えば、ランクとは強さです。ランクが上がって行く毎にほとんどが魔物の討伐が依頼内容になってきますから。まあ一也様には問題ありません。すぐに最高ランクのSSSに到達するでしょう」

「そう言ってくれるのはうれしいんだけど……そっぴやSSS上に

あつたMランクってのは？」

さつきから気になっていたこのランク。

「それはM——マスターランクといい、最初の“救帝者”に送られた称号のようなもので、現代ではあまり関係ないので気にする必要はありません」
「なるほどね」

最初の“救帝者”に送られたものか。
まあ過去に戦争を終結させたんだからそれくらいは当然か。

「なら学園に行くまでは——って、アイリさんは俺が学園に行ったらどうするんだ？」

そついや学園の存在をすっぱり忘れていた。

「付いていくに決まってるじゃありませんか。私の居場所は一也様の隣ですよ？」
「っ！」

そんな微笑みながら言われたら恥ずかしい。

俺の顔って今は暗いから見えないからいいけど、明るかったら真っ赤になってるんじゃないのか？ 暗くて助かった。

「御顔が真っ赤ですよ？」
「見えてんのかよッ！」

思わずツツコんでしまった。

「あゝ、んじゃおっさんに明日伝えておかなくちゃいけないな」

「その必要は御座いません、もう伝えておきましたから」

「準備いいな、おい！」

二度目のツツコミ。

てか俺がアイリさんを雇わなかったらどうするつもりだったんだろ。

「んじゃ伝える必要もないと」

「はい」

「そうか……」

なら明日はどうするか……

まだ魔法については初心者だから明日は魔法の修行と体がどのくらい変化したかの確認でもするか。型の反復もしないといけないし、いきなり実戦てのは危ないだろう。

「んじゃ俺は明日一日鍛錬するけどアイリさんはどうする？」

「お手伝いさせていただきます」

わぁお、即答かよ。

「でも何か手伝えることある？ 別に無理しなくても羽休めだと思つてゆっくりしていてもいいと思うんだが……」

「別段その必要はございません。もともと余り疲れない体質なので」

嘘だろ。

「それに戦いの方では私は何もすることが出来ませんが、それ以外ならサポート出来るでしょう？」

「まあ…な」

「ならそれで大丈夫です」

はあ……大人っぽいと思っていたんだが、予想以上に押しが強いな。

いや、大人っぽいから押しが強いのか？

「はあ、それなら明日の朝に起こしにきてくれるか？」
「お任せください」

そう言つて俺は寝る準備をする。

やっと眠れるよ……

一日が今までで一番長く感じた日だったなあ……

「それじゃおやすみ、アイリさん」

「お休みなさいませ、一也様」

そう言い残すとアイリさんは静かに部屋から去って行つた。

「——そして、ありがとう……」

6・覚悟（後書き）

次は一也の修行風景ですかね。

てかアイリさん登場しすぎだわw

どんだけ出てくるんだ？ メインのつもりのレイラが霞んでいるよ
www

まあ気にしないんだとさ。プロット無しでネタが浮かんだら書いてるものだから偏ることだってあるさ、多分（汗

7・日常の風景（前書き）

ぎりぎり今日のうちに投稿することが出来たか……

7・日常の風景

ようやく外の暗さが明るくなり、小鳥たちの囀りが聞こえてくる時間帯。

もとの世界の時間で言えば早朝の5時くらいか。

そんな時間に自分の主の部屋に入るメイドが一人。

「一也様、起きてください」

いつもなら起きる一也なのであるが、如何せん昨日、ベットに眠りに就いたのは2時間ほど前。もはや就寝ではなく仮眠の域。しかも、昨日はいきなり召喚されたなどの心労が溜まるイベントが目白押しだったため、未だに深い眠りについていた。

「一也様、起きてください」

メイド——アイリは一也の肩をゆさゆさと揺さぶる。

アイリの顔には疲労の色はなく、2時間、いや1時間だけ寝ると疲れはなくなるようだ。流石に毎日それが続くと体が壊れるだろうが、一日くらいなら問題ない。

「はぁ……こうなったら奥の手を使っしかありませんね」

アイリは溜息をつきながら一也の顔に自分の顔を近づける。

それは傍から見るとキスをするように見えて——

「ふう」

「ひう!？」

耳に吐息を吹きかけた。

その効果は抜群で、一度吹きかけると一也は起きたようだ。

「おはようございます、一也様」

「へっ!？ ……アイリさんだったか……」

ふうっ、と溜息を吐きながら挨拶する。

「おはようございます。けど耳に息を吹きかけるのはやめてくれな
いか？ 心臓に悪い……」

「揺さぶっても眼を覚ましてくれなかったので」

クスクスと微笑みながらアイリさんは答える。

「そ、そうか……。まあ着替えるんで部屋の外で待っていてくれる
か？」

頭もやつと動いてきたので服を着替えて鍛錬に向かうとする。
しかしいつまで経ってもアイリさんは部屋から出ていかない。

「アイリさん？」

「お手伝いさせていただきます」

「いやいやいや!」

何言ってんだよ！ めちゃくちゃ焦ったぞ。

「いや、服を着替えるくらい一人で出来るから！ てか出来なかったら問題だから！」

「そう言われましても……この世界では当り前のことですよ？ メイドがご主人様の着替えを手伝うことくらい……」

そんな顔で言われても無理なものは無理なんです。

「駄目だ！ 部屋の外で待っていてくれ」

俺は無理やりアイリさんを外に押しやると一息ついた。

「はあ……アイリさんの考えがわからん……」

もう一度息を吐き、着替えを開始するのであった。

「待たせたな」

着替えをし、自分の刀である影桜を腰に差して部屋から出る。そこには少し怒っているアイリさんが待っていた。

「待つてはいませんよ。待つては」

ネチネチとさっきの行動を咎めてくるアイリさん。

「そう怒らないでくれ。俺の世界ではそんなことは一般常識じゃないから恥ずかしいんだよ」

「しかし……」

言い淀むアイリさんを見ながら一言。

「他のことはアイリさんに頼むからこれだけ勘弁してくれ」

「はあ、わかりました」

しぶしぶながら納得してくれる。

これで納得してくれなかったらどうしようかと思った。

「んじゃさっそく鍛錬に行くか。どこか誰にも見つからないで鍛錬出来る所はあるか？」

あまり人には鍛錬しているところを見られたくない。

流派のこともあるがただ俺が見られることを嫌っているだけである。

何か見られてると集中力が欠けるんだよな。まあアイリさんは仕方ないとして。

「そうですね……なら、城を出て城下町を少し抜ければ森があります。そこなら誰にも見られないかと……」

「ふむ」

森か……

木が邪魔な気もするが、どこか開けた場所もあるだろう。

「ならそこに案内してくれ」

「かしこまりました」

アイリさんの先導のもと、俺達は森へと向かった。

「ここが城下町か……」

森に辿り着くまでに横切る城下町に辿り着いた。
昨日は城から一步も外に出なかったので初めて見る。

「予想以上栄えてるな。まだ早朝だぞ？」

まだ朝日が完全に上りきってないというのに、商人であろう人達などは、皆頑張って賞品の陳列をしたりしている。

「そうですね。この城下町——ルーテンベルク城下町はこの国一番の城下町で、一番活気がある町だと思いますよ？」
「へえ……」

俺は周りを見渡す。

どんな人間の眼にもやる気が見られている。

「いいところだな」

「はい」

それ以降は口数が少なくなり、無言で歩いていく。

「こんな人達——いやこんな人達だからこそ“救帝者”に縋りたくなるのだろうか」

「一也様？」

「いや、何でもない」

俺はアイリさんが何かを聞いてくるが何でもないと答えるだけに留めた。

力のない人間は力のある人間に縋りたくなる……か。

昔聞いた言葉が頭の中を駆け巡る。

それでも俺は……

自分勝手だと思われてもいい。ただ、自分の信条を貫くだけだ……

「なかなか良い場所だな」

城下町を抜けた俺達は森へと辿り着いた。

そこから森の中へと入り、開けた場所を発見した。

「ありがとうございます」

「んじゃアイリさんは少し離れた場所でいてくれ」

そう言い残し、俺は開けた場所の真ん中に歩いていく。

手に持つものは自分の愛刀である影桜のみ。それ以外はアイリさんが管理してくれる。

「それじゃ始めるか」

Side アイリ

私は夢でも見ているのでしょうか。

確かに、ロイドさんと戦っている一也様を見ました。その時でさえ、私は常人離れた肉体をお持ちの方だと思いました。

しかし、それでさえ――

「――天凱流 攻式弑之型 烈火」

あの時でさえ、一也様は本気ではなかったのです。

流派と技の名を言った後の一也様は一段と私の想像の遥か上を行き、一也様の武器が幾重にも分身しているように見え、体は残像を残すほどの速さで移動していきます。

どうしたらあのような強さを手に入れることが出来たのでしょうか。どうしたらあのような心を手に入れることが出来たのでしょうか。

私は弱い……

一也様はそんなことを言わずに、私に向かって「アイリさんは強いさ」と言ってくれるでしょう。

それでも私は弱いんです……

嫌なことから逃げだした私は弱いんですよ、一也様……
そんな私を見て貴方はどう思うでしょう。

軽蔑？ 慰め？

それとも他の言葉を掛けてくれるんでしょうか。

それでもいつか――

いつか私も一也様の隣に立てる日が来るんでしょうか。
いつか――

＼ side out 〵

さて……

俺は息を整え影桜を抜刀する。

抜刀した後は正眼の構えで停止する。

まずはどのくらいの気の強化が出来るか調べるか……

まず力を抜き息を吸い込み空気を取り込む。吸い込んだ空気を丹田まで送り届けるように体の中に行き渡らせ、丹田に力を込め、そこから力を取りだすように力を均等に込める。

やっぱり総量、密度ともに上がってるな……

前までならこれくらいじゃあまり気が発生しなかったのに、今では軽く流したただけで前の4割くらいの気が発生している。

一度最高の量を確認するか……

そこから力を完全に解放しながら、丹田に力を込める。その時に一也から気が溢れだし、周りの眼に見えるくらいの気が発生した。前の3倍というところか……

前の世界でさえ一番多く気の量を持っていたのに、こちらに来てその3倍の量を手に入れてしまった。

まあいいんだけどな……

んじゃまあ前の最大くらいの量、密度に下げたと……

気の量を調節しながら、正眼に構えていたのを上段に構える。

一閃。

そこから下段から切り上げ、体を捻り切り払い、体を回転させ、その遠心力薙ぎ払いと続け、その速度を上げていく。

その速度は残像を残し、剣筋は数多の剣に分裂させていた。

特に問題はなし……か。

体の調子を確認してから一旦体を停止させる。

一度何かの型を練習するか？

出来るだけ他の人間に型は見せたくないのだが、一つくらいなら問題ないだろう。

今度からは一人で来るようにしよう。アイリさんには悪いが、剣の鍛錬だけはあまり見られたくないしな。

そのかわりと言っては何だが、魔法の鍛錬にはついてきてもらって手伝ってもらおうとするかな。

そんなことを考えながら正眼より少し高い位置で剣を構える。

——天凱流 攻式弑之型 烈火

烈火——相手に反撃の暇を与えないように連続して斬りかかる技だ。これは爺さんが最も得意としていた技でもあり、爺さんの烈火

は容赦なかった。烈火の如く相手に斬りかかり、連続して攻撃する。体の重心移動などが難しい技であるが、習得すればこれほど心強いものはない。

それから太陽が真上に来る少し前まで鍛錬は続いた。

「お疲れ様です」

そう声を掛けられ、タオルと水筒のようなものを渡される。

「ん、ありがとう」

俺は受け取り、タオルで汗を拭いていく。

その後、水筒のようなものを開けると冷たい水が入っていた。

「ふう……久しぶりにこんなに動いたな」

「そうなんですか？」

「ああ。前の世界じゃここまで動く必要がなかったからな」

喋りながら水を口に含む。

冷たい水が喉を通り、乾きを潤してくれる。

「それにしても流石ですね。あのような動きを出来る人物なんてこの世界にはいませんよ？」

「それ昨日リーク爺さんにも言われたな」

苦笑しながらタオルと水筒のようなものを返す。

アイリさんはそれを受け取り、カバンに仕舞った。

「それはそうです。どう見てもギルドランクで言えばSSS——い

え、Mクラスと言っても何も問題はないと思いますよ」

「そうかな？」

「そうです」

アイリさんは熱心に俺のこと称賛してくれた。

「まあギルドの方は明日にでも行くさ。昼からは魔法の練習をしなくちゃならんしな」

「ならもう城の方に戻りますか？　そろそろお昼の時間ですけど」

「そうだな。んじゃ、戻ろうか」

「はい」

二人は立ちあがり、森から去って行った。

「どこに行つてたんですか！？　心配しましたよ！」

「うわっ！？」

城に戻るといきなりレイラに詰め寄られた。

しかも首をユサユサと揺らせれて気持ち悪い。

「ちょ、は、離して」

「どこに行つてたんですか！？」

「えっと、森に行つて鍛錬をしてました!」

早く答えないと吐きそうになるのでとつと答えてしまう。

「何で私に言つてくれなかつたんですか!」

「えっと、出て行つたのが朝開けて間もない時間だつたんで寝てると思つて声をかけませんでした!」

どっちにしる付いてきたいと言つてもどうにかして断つてはいたが。

「むうゝ!」

「あまり無茶を言つてはなりませんよ、レイラ様?」

「あれ、アイリさん?」

俺が無茶ぶりされているところに荷物を仕舞つてきたであろうアイリさんが助けてくれた。

「そう無茶を言つては駄目ですよ? 一也様が困っています」

「あ…ごめんなさい」

「いや、かまわないさ」

しゅん、となるレイラを見て少し罪悪感が募る。

「そついえば何でアイリさんが? メイド長の仕事はどうしたんですか?」

メイド長?

「それなら昨日止めました。今は一也さん専属のメイドです」

「へっ？」

アイリさんの言葉を聞きレイラは眼が点になる。

「どういう事ですか？」

「言葉通りの意味ですが？」

「な、何で……？」

いきなり俺がはぶられながら二人だけで会話が進んでいく。

「それは私が一也様に仕えたいと思ったからですか？」

「そんな！」

俺は蚊帳の外に放り出されて暇になる。

昼飯でも食いに行くか。俺は二人を置いて昨日祝宴が開かれた場所に足を運んだ。

二人なら後から来るだろ……

二人を置いて来て祝宴が開かれた場所（食堂でいいのか？）に辿り着くと、おっさんと爺さんが二人で昼食を取っていた。

「おっさんと爺さんだけか？」

二人に声を掛け、調理場にいるコックにご飯を頼む。そして席に着き、二人の話に入りこむ。

「そうじゃな。して、お主は一人か？ 確かレイラが騒いでおったはずじゃが……」

「ああ、レイラなら何かアイリさんと話してるよ。それより、おっさん！ いきなりアイリさんに専属のメイドになるって言われて驚いたんだが」

俺は昨日の最後の事件であつたことをおっさんに話す。

「それなら俺も驚いたさ。なんせいきなりメイド長に『メイド長を本日をもて止めさせていただきます』何て言われたからな。まあ理由を聞いたら一也関係で了承したがな」

クツクツと笑いながら俺を見るおっさん。

「俺もアイリさんほどの人が専属で付いてくれるのはうれしいんだが、給金を払う金がない。てことで初めのうちだけくれたらいいから金をくれ。明日からギルドに行つて仕事するからそれまでに少しの資金がなかったらやっていけん」

「いいぞ？ どちらにしても学園の費用だつてこちらが用意するし、一也にはそれ以上に働いてもらわないといけないから金くらいは用意するさ」

「ふむ、なら儂が紹介状でも書こうかの。儂の紹介状があればアラソクから仕事が始められるしの」

気前よく言ってくれるおっさんと爺さん。

資金の方は当然かもしれないが紹介状の方はいいのか？

「別に問題はないじゃろ。一也ならSSSでも別段問題ないじゃろうしの」

「助かる。ならギルドに行つて仕事はしてくるか。こっちの情報や

実戦での戦闘には慣れておかなくちゃいけないし、ギルドで有名になっただけで目的達成に近くなるだろ？」

「そうだな。それでもアイリの給金は俺から払っておこう」「そうか？」

それは俺が払おうと思っていたんだが。

「給金を払うよりも何か感謝を込めて贈り物でも送ってやれ。そっちの方がアイリもうれしいだろう」

「そうなのか？」

「ああ」

「一也は女心がわかっておらんのか」

わからんなあ。

「もし余裕があるならレイラにもやってほしいがな」

「ふむ、まあ考えておこうか」

「それがいい」

そんな雑談をしていると料理が運ばれてくる。

そしていざ手をつけようとすると、

「一也さんっ！」

「今度は何だ？」

せっかく食べようと思ったのに……

「お昼の魔法の訓練は私も参加しますからね!？」

「……アイリさん？」

少しジト目でアイリさんを見る。

「すみません……」

「はぁ…まあいけど」

溜息をつきながら料理を食べる。
うまつ！

「早く食べていきましょう！」

「ちよ、ゆつくり食わせる！」

そんな昼食でした。

＼side ランゲル、クレウイス＼

「一也はもてるのお」

急かされて料理を食べさせられ、なおかつ引っ張られていった一也を見てクレウイスは呟く。

「そうだな。まあ問題はー也が鈍感だと言う事だろう」

クツクツと笑いながら酒を飲む。

昼から酒を飲むのは駄目なのだが、今日くらいはいいだろう。

「しかもあのアイリとレイラ二人一緒にとは驚きだな」
「じゃな」

アイリは城内では冷静でクールな印象を持ち、どんな人間にも平等に接していたのだが浮いた話は一つもなかった。

反対に娘のレイラは男性が苦手によく相談されることもあった。

「そんな二人を同時に攻略するとは未恐ろしいのお」

「まあ本人はそんなことには全然気づいてないだろうがな」

「ふおっふおっふお」

｝ side out ｝

7・日常の風景（後書き）

最近SAOを読んでデスゲームが書きたくなってきました（オイッ
まあ時間の会い間にでもちよくちよく書いていくかな。構成が半分
くらい出来たし。

そのわりにこの物語の構成は一つもないwww
てか作る気がなく、作者の気分で制作されているってことが問題な
のか？www

7・5 少女の想い（前書き）

何か書くことあったかな……？

そういえば、今日は学校で球技大会？がありました。
でも雨が降っていたため、体育館でドッジボール。

……なんていうかシヨボい球技大会でしたww

7・5 少女の想い

（姫とメイドの裏話）

一也が二人を置いて去って行った間も二人は言い争いを続けていた。

「どういうことですかっ！ アイリさんはお父様のメイドでは無かったのですか!?」

「だから言っているじゃありませんか。止めましたと」

いきなり一也さんの専属メイドになった言うアイリさん。

私とアイリさんの関係は姉と妹みたいなものです。私がまだ小さい時に、誰も話し相手もない時に友達になってくれたのがアイリさんでした。

その時の印象はいつも冷静で、それなのに言葉の端々からは優しさが溢れている、そんな優しいお姉さんでした。

それなのに――

「何が目的なんですか？」

いきなり一也さんの専属メイドになるって言うなんて、今までのアイリさんからは考えられません。

何か裏があるとしたか思えないんです。

「目的って……レイラ様はそんな目で私を見ていたのですか？」

それは演技ではなく、正真正銘の悲しみを浮かべた顔をしているアイリさんがいました。

「あう……ごめんなさい。そういつつもりで言っただけじゃないんですけど……」

そんな悲しそうな顔は私は見たくない。

「いえ、わかっていますよ。レイラ様が優しいことくらい」

その顔は先ほどの悲しみなどは一片たりとも写っていないくて、優しい微笑がありました。

「うう……」

「率直に申し上げますと——」

「え？」

いきなり喋り出したアイリさんに私は驚きました。

理由は話してくれないと思っていましたから。

「ただ、私は一也様に心の底から惹かれたのです。あの方の心の強さに魅せられたのです。一也様の愚直なまでの信条の通し方に。異世界であるはずなのにそんなこと関係ないとばかりに自分を押し通す心の強さに。……そして私が持ち得なかった心の強さを持っているあの方に」

最後のほうは聞こえませんでしたけど、それでもアイリさんの話はわかりました。

「そうですか……」

ただアイリさんも私と同じということですか。

「一也さんに惚れたんですね？」
「なっ!？」

みるみるうちに顔が赤くなっていくアイリさん。

普段冷静な方がこういう表情を取ると、一層綺麗に見えますね。

「レ、レ、レ、レイラ様？」

「わかりますよ。あんなに一也さんのことを思っているんですから」
「ち、違います！ 私が抱いているのは憧れであって恋などは――

――

「顔が真っ赤ですよ？」
「っう!？」

何て言うか、可愛いですね。

「私も同じですから」

「え？」

そう……

私も一也さんに恋している。

多分だけれども……

今までこんな気持ちになったことはない。

その人を見るだけで鼓動が早くなるなんて……

その人を見るだけで幸せになれるなんて……

私も初めは“救帝者様”として一也さんを見ていました。

初めてみた時は天使様が降臨なさったのかと見間違えたくらいです。それほど綺麗だったんですよ？

それでも少し話しているうちに、天使みたいなあの人にも人間味

があることに気付いたんです。

それで私の心がいつこうまであの方に惹かれたかというところ、一也さんがお父様のことを叱責した後の事です。

魔力を測りに行く廊下での出来事。私は昨日まで召喚の本当の意味を理解していませんでした。ただ異世界の救世主が私達の世界を助けてくれる、としか思っていました。

しかし、一也さんは言いました、『異世界から人間を召喚するって事は、その人間の人生が壊すってのと同義なんだぞ？』と『お前らがやっていることは人殺しと同じなんだよ。お前らはわかるか？今、俺の世界で俺の行方がわからなくなってるんだぞ？それはどれだけの人に迷惑をかけると思ってるんだ！ だいたい俺には家族や友達だっていたんだぞ？それなのにそっちの都合に二度と逢えなくなるかもしれないって、どうやって責任取るつもりだ？』と。

私はその事を理解して恐怖に襲われました。
だってどうでしょう？

今まではこの世界のためと思って勉強してきたことは、本当は一人の人生を無茶苦茶にするものだったんですから。

だから私は謝りました。すいません、と。

だけど、一也さんは言いました、『お前が召喚したことはもう取り返しのつかない事実なんだ』と『この世界に罪を許す証なんてものはないんだ。それは自分自身の中で一生消えない傷として残る。だからな？ それを抱えて生きる。何か行動を起こせ』と。

でも、そんな厳しいことを言う一也さんの顔はとても優しい顔で私を見守ってくれていました。

その時です。

ああ、私はこの人の傍にいたいと。

取り返しのつかないことをした私に、そんな優しい笑顔を向けて

くれる、優しい人の傍にいたいと思ったのは。

だからアイリさんが一也さんに恋をしているのにも気づけたんですけどね。以前の私では気付かなかったでしょう。

「それは恥ずかしいことではないと思います」

「レイラ様？」

だからアイリさんも自分の心を誤魔化さないでください。
たった一つの自分の心。それを誤魔化すなんてことは駄目です。

「恋は恥ずかしいことではないんです。私はそう思います」

まあ私の自分勝手な自論なんです。

「だから、アイリさんが自分を誤魔化すんなら一也さんは私が貰っていきますよ？」

「駄目ですっ！」

自分の心には嘘はつけない。

そんなことはアイリさんもわかっているところでしょう。

「でしょう？ だから私達は今からライバルです」

「ライバル……ですか？」

そう、恋のライバルです。

「どちらが先に一也さんの心を射止めるかの勝負です。手は抜きませんよ？」

一也さんが浮かべていたような不敵な顔でアイリさんに告げます。

似ていたでしょうか？

「……………ぶっ」

「？」

いきなり噴出したアイリさんに首をかしげます。

「やっぱり自分の心には嘘がつけないようですね……。それにしてもレイラ様も成長しましたね？ あれほど男嫌いだったというのに」

うつ……………

それは苦い思い出です。

「ま、まあ一也さんは良くも悪くも今まで見てきた男の方と違いますから」

「そうですね」

そう言い、アイリさんは目を閉じました。

そして次に目を開けると、そこには決意を宿した眼がありました。

「もう、自分の心には嘘をつきません。確かに憧れなどもありましたが、一番の思いは、私は一也様に恋心を抱いています」

「だから——」

「「今日からはライバルですっ！」」

7・5 少女の想い（後書き）

今回はお気に入り数が1000超え記念と前話でのレイラとアイリがどのような話をしていたかを書いていなかったなので、記念というこ
とで掲載しました。

どうだったでしょうか。

いつもより文字数が少なくなっているため、不満が出るかも知れま
せん。

すいません> (――) <

明日は友が泊まりに来るといので、うpが出来るか微妙なところ
です。

学校から帰ってきたら即行で執筆しようと思っています。

もしu出来なかったらすいません> (――) <

次の記念はPV数が100000かユニーク10000で行きたい
と思います。

それでは！

8 ・魔法（前書き）

何とか友達がいる中で執筆。
間に会ってよかった……

8・魔法

昼食を急かされながら食べられ、食後の休憩もなしで俺は錬武場に連れてこられた。

飯はゆっくり食べる派なのに……

「んで？ 俺は魔法の練習をしたらいいのか？」

いきなり連れてこられて要領を得ない。

昼から魔法の練習をするとは言ったが、具体的なことを決めていなかったので何をしたらいいかわからない。

「そう言うと思って……はい、これです」

レイラが手渡すのは一冊の本。

「何だこれ？」

「魔導書です」

「へえ」

これが噂に聞く魔導書かあ。

何か感慨深いものがあるな。

「これを読んで魔法の詠唱を覚えて貰います。まあ一也さんならすぐマスターしきるものばかりですけどね」

そう言いながら本を手渡す。

中身を覗いてみると訳のわからない言葉の羅列が眼に入る。

……読めねえ。

「レイラ……」

「はい？」

「読めん」

「は？」

「だから読めないんだって」

だって俺がこの世界に来たのは昨日だぞ？

何故か言語は伝わるけど、文字までは読めるわけがない。

「なら私が教えますので、後から復唱してください」

そう言い、俺の手にあつた本を取り、本を開けるアイリさん。

その様子をおもしろくなさそうに見るレイラ。

どうしたんだ？

「アイリさんは魔法に詳しくないんですから私が読むべきだと思うんですが？」

何故かアイリさんを睨みつけるレイラ。

そんな眼差しを気にすることなく、アイリさんは言い返す。

「魔導書だつて魔力のない人間が読んだらタダの本です。タダの本なら私が読んでもかまわないでしょう？ それに、発音などはレイラ様より綺麗と私は自負していますが？」

「くう〜！」

言い争いをしている二人を眺めながら、俺は空を見上げる。

……空が蒼いなあ。

そんな現実逃避もすぐに呼び戻され、騒乱に加わることになる。

「一也様はどちらの方に読んでもらいたいですか？」
「もちろん私ですよね？」

正直どつちでもいいって言うのは無しなんだろうつか。

「はあ……。ならアイリさんに魔導書を読んでもらって、レイラにその魔法を実践してもらうってのは駄目か？」

何か二人が争っているように見えるので、とりあえず役割が半々になるような構図を考えてみた。

これなら大丈夫じゃね？

「なるほど……」

「それがいいですね」

俺の提案は以外と簡単に通った。

それにさっきまでは睨みあっていたのに今では二人とも笑顔で話しをしている。

女の子ってほんと訳がわからん。

「さて、まず最初の魔法から行きます。最初はとりあえずレイラ様が使え風の下位の魔法“ウィンドカッター”でよろしいですか？」

「わかりました」

「大丈夫だ。……けどレイラって何の魔法が使えるんだ？」

確か光を使えるのは知っているけど、他は何が使えるのかは知らない。

あ、そういえば火も使えるか。

あと今、風が使えることが判明したが。

「私が扱えるのは初級が火と風と水、中級に氷、そして上級の光です」

「なるほど」

ちょうど初級、中級、上級が使えるのか。

なら、とりあえず一度上級まで使ってみて、後からレイラが扱えない種類の魔法を使ってみるか。……まあ精霊魔法はスルーするという方向で。

下手したら廃人とかになりそうで怖い。

「それじゃあ詠唱を教えます。後から続いて復唱してください。風の精霊よ その力を現し 悪しき敵を切り通せ“ウィンドカッター”です」

「ふむ……風の精霊よ その力を現し 悪しき敵を切り通せ“ウィンドカッター”」

「完璧です、流石ですー也様」

「まあこのくらいなら簡単だな」

高々一文くらいはすぐに暗記出来るさ。

これが段々長くなっていったら、まず一回じゃ無理だ。

「それじゃ次は私が実践して見せますね？」

レイラが俺達から少し離れて詠唱する。

「風の精霊よ その力を現し 悪しき敵を切り通せ！“ウィンドカッター”！」

詠唱終了と同時にレイラの手から、一迅の風が吹く。シュツ、と

いう音がして、俺とアイリさんの横を通り過ぎていく。

「こんな感じですね。何か対象物に当たるとその対象物を斬り裂きます」

「風は不可視だから一番危ないな」

俺は風の通り道とかは肌で感じる事が出来るからなんとか避け切れるか？

「そうですね。対人に放つ魔法で一番殺傷能力が高いのは風系統ですし、十分注意が必要です。でも一也さんなら大丈夫でしょ？ むやみに力を振り回したりする人じゃありませんし」

「そうですね」

「とりあえずやってみるかな」

二人からそんな評価をされていることに驚きながらも、俺は二人から離れた位置に立つ。

先ほどとは違い、俺はアイリさんとレイラがいる方向とは反対の方向に向く。

ファイヤーボールみたいなことになったら下手すると殺してしまう可能性があるしな……

初めて使った魔法は、レイラの魔法の十倍以上の威力を叩きだしている。それなのに一回も試さずに人に向けて放つなど馬鹿の行動だ。

んじゃやるか……

「風の精霊よ その力を現し 悪しき敵を切り通せ！ “ウィンドカッター”！」

やはりと言うべきか、俺の手から放たれる風は、レイラのもの

違い、突風を巻き起こしながら突き進む。たくさんの砂埃を上げながら突き進んでいくその風は、さながら台風のような。

「「「……………」」」

やっぱりこういう反応になりますよね。

「……………流石ですね、一也様」

「……………ありがとうございます」

そんな優しさが痛いです……

「つ、次は気を取り直して氷の魔法に行きましょう！」

レイラもこの空気をどうにかするべく行動を起こしてくれる。アイリさんも魔導書からその項目を必死に探してくれている。

ああ、二人の優しさが心に響く……

「あ、ありました。では先ほど同じく私に続いて詠唱してください。氷の精霊よ その凍結を以て 封じ込めよ “フリーズ”」

「氷の精霊よ その凍結を以て 封じ込めよ “フリーズ”」

これは相手を凍らせる魔法か？

「この魔法は攻撃魔法ではなく、補助魔法に分類されるものです。対象の部分を凍らし、動きを封じ込めるもので魔物などに有効です」
「なるほど」

補助系統だったか。

でもこれもうまく使えば多大なダメージを与えることが出来そう

だな。

例えば甲羅などがある防御力が高い相手でも、その部位を完全に凍らせることによってその部位を脆くして破壊するとか……

結構極悪な行動だよな、これ……

「それじゃ今回はこれを使います」

そうして取り出したのは……カカシ？

それはワラのような植物で作られた人の形状をしたもので、一応手と足が付いている。足は付いているだけで、後ろに支え棒が付いている。しかも顔はいらなはずなのに何かが描かれている。

「何だそれ？」

「これは衛兵の方々が対人戦を想定した時に使われる人形です」

アイリさんが丁寧に教えてくれるが、正直人形っていうほど愛嬌がない。てか何か不気味だ。

「これに氷の魔法を唱えます。部位は手にしましょうか……ではいきます。氷の精霊よ その凍結を以て 封じ込めよ！ “フリーズ”！」

やはりレイラの魔法は俺の魔法とは違い、綺麗に人形の片腕を凍らせる。

「こんな感じです」

「わかった」

今度はあんな威力にならないようにと思いながら詠唱する。

「氷の精霊よ その凍結を以て 封じ込めよ！ “フリーズ”！」

もうやだ……

今度はレイラが凍らしていないもう一つの片腕を凍らすつもりが、人形全体を凍らせ、一種のオブジェと化した。

「き、気にする必要はありませんよ！ 下位の魔法でこれだけ出来るなら別段難しい上位や古代の魔法を使わなくても大丈夫なんですから！」

「そうです。こんな事が出来るのは一也様だけなんですからもっと自信を持ってください」

また慰められるが正直キツイ……

魔力や精神力とかじゃなくて——いや、確かに精神に来るけども。

「さ、次は光の魔法に行きますよ！ 光の魔法は魔導書に載っていないので、私が詠唱しますね」

「……ああ」

もうテンションがガタ落ちだが、せつかく俺のために二人は頑張ってくれているのだから最後までやり通さなくては。

「まず詠唱から。光の精霊よ 我が心の力となりて 光放て “レイアロー”」

「光の精霊よ 我が心の力となりて 光放て “レイアロー”」
「完璧です。では次は実践します。光の精霊よ 我が心の力となりて 光放て！ “レイアロー”！」

レイラの手から光の矢が一本飛び出し、地面に着弾する。その威力はレイラが放った火球の三倍の威力を持っていた。

…俺が放った火球よりも断然低い威力ではあったが……

「それじゃあやってみてください」

「わかった」

俺もレイラと同じく地面に着弾させようと思ったが、先ほどから度重なる心労で心が辛いので、ストレス発散のためにさっき俺が全身を凍らせた人形に向かって魔法を放つ。

「光の精霊よ 我が心の力となりて 光放て！ “レイアロー”！」

……………今回が一番酷かった。

レイラが放った光の矢は一本だったのに対し、俺が放った光の矢は数十本くらい。しかも威力が馬鹿みたいに高く、凍った人形はこの世から跡形もなく消え去っていた。

「」「……………」

これは酷い……

「さ、他の魔法を試してみましようか」

「そ、そうですね」

なかったことにされたっ！？ 流石にそれは酷くねっ！？

今までで一番傷ついたぞ、オイ！

「次からは私は実践出来ないの、一也さんの独力で頑張ってください！ 一也さんならどんな魔法でも一回でマスター出来ます！」

「では次は水の魔法にいきましょうか」

完全になかったことになった……
別にいいけどさっ……

「ではいきます。水の精霊よ 癒しの雨となりて 降り注げ“キュアシャワー”」

「この魔法は？」

今度は回復つばい魔法だからあんなに酷い結果にはならないだろう。

「これは回復魔法の一種です。下位の魔法ですけどなかなかもので軽い怪我などは完璧に治ります。ただ骨折などの体の内側の怪我などには効果がありません」

ふむ……その魔法——この場合は水がかかる範囲が効果が現れる範囲という訳か。

「でも魔法を使うにはいいけど、効果がわからないな……」

周りに怪我をしている人もいないし、とりあえず発動するか試してみるか。

「まあ試してみよう。水の精霊よ 癒しの雨となりて 降り注げ！
“キュアシャワー”！」

出てくるのは豪雨。

辺り一面を水浸しにする水量が頭上から吐きだされる。

……普通こつこつというのって小雨くらいじゃね？　なんで豪雨なの？

「冷たいです……」

「同じく……」
「すいません……」

水浸しになった服を着替えて、俺達三人は他の魔法も試してみた。
一応は精霊と闇以外の魔法は全て発動した。

土の場合、軽い地面を揺らす魔法が大地を裂きました。
雷の場合、一条の電気進むはずなのに極太の雷が進りました。
草の場合、蔦を生むはずが何か人食い植物みたいなものが生まれました。

……酷え。

「……まあ私はそれでいいと思いますよ？　一也様の個性ですし、その威力は驚嘆に値すると思います」
「そうですね、だから元氣出してください！」
「ありがとね？　二人とも」

ほんと涙が出そうだよ……

「さて、出来るだけの魔法は試してみましたけど……」
「そうですね。闇の魔法はグレイア王国の王室にしか伝えられていないのでどうしようもありませんね……」
「そうだな……」

闇の魔法か……

ふむ……頭の中でイメージで発動出来ないかな？

「少し試してみるか……」

「一也様？」

俺は頭の中で想像する。

この世界の魔法という定義を覆す。

——詠唱？

そんなものは必要ない。

——魔力と精神力の練り込み？

そんなもの勝手に練り込まれる。

——ただ必要なのは一つ。

そう、それは——

「“シャドウボール”！」

「“なっ！？”」

——想像だけさ

8・魔法（後書き）

さて、明日も頑張ってうp出来ると良いなあ。
なんか寝過ごしそうで怖い……

9・想像（前書き）

我が生涯に多大な悔いあり！／（＾Ｏ＾）＼

9・想像

俺の手に宿る直径50cm位の闇の弾。

その色は夜の帳よりなお濃く、全てを覆い尽くす漆黒。

「な……何で……？」

「いくら何でも、これは一也様だからと言って規格外すぎるでしょう？」

二人は茫然と漆黒の弾を見て呟く。

だが、所詮魔法の詠唱なんて式でしかない。いくら難しい数学の問題でも、多大な時間と膨大な努力を掛けることで小学生で習うような算数を使うだけで解ける問題だってある。

魔法はこれと同じことが言える。

詠唱なんか知っていなくても、イメージで無理やりやってしまえば発動出来てしまう。

簡単に言えば、魔法の詠唱が数学の公式で、俺が使ったのは小学生の算数。どちらを使った方が簡単なのはかはずくに判る。どう考えても数学の公式を使う方が簡単に済む。

そちらの方が時間も手間も掛けずに済むからだ。

それでも解くことに関してはどちらでも解けるということだけ。

「まああれだ。この仕組みさえ判ってしまえば誰にだって出来るようになると思うぞ？」

俺がやっていることは簡単。

発動したい魔法を頭の中でイメージする。ただそれだけ。

魔力や精神力の練り込みなんて知らない。詠唱なんて論外。

ただ想像し、それを作りだす。簡単なことだ。

しかしそれは俺が異世界の人間だからなのかも知れない。

レイラは言っていた、『頭の中で発動する魔法を想像なんてしていたら魔力と精神力が練り込めない』と。

俺の場合は魔力と精神力は勝手に魔法に練り込まれる。俺が予測するに、この練り込み具合は俺の魔法の想像の濃さによって変化すると思う。

例えば、1mの火球をイメージするのと手のひらサイズの火球をイメージした場合、1mの火球の方が魔力と精神力の練り込みが大きくなる。逆に小さく発動したいなら小さいようにイメージすればいい。

俺の魔法は酷く異質で綻びが大きいだろう。

だから魔法の式なんて誰もが使えない綺麗なものに当てはめて魔法を使おうとすると、あのような暴走状態みたいな効果が出たのだろう。

理屈がわかってしまえば後は簡単だ。俺はこの世界の魔法とは合わない。

ならどうすればいいか？ そんなものは決まっている。

—— 全て俺の想像で魔法を作り上げればいい。

一応俺は精霊魔法が使える可能性が残っている。

その中には空間の魔法があったとされている。空間とはその場所。空間と空間は繋がっていると言われ、しかし全てが閉鎖的に閉じられていると言われている。その空間に穴を開けることはまず出来ないと言われていた。

しかし俺は現実に異世界に召喚されている。

召喚されているということは空間と空間に穴を開けることが可能であるという事だ。

ならもし伝承通り、俺が空間という魔法が扱えるのであればもとの世界に帰れる可能性も決してないということとはなくなる。

だが、これは並大抵の努力じゃ無理だろう。

まず空間と空間が繋がっているというイメージがどんなものかわからない。

俺が扱う魔法の欠点としては、曖昧な想像のまま魔法を発動してしまうとどのような作用が引き起こされるかわからないという点である。万が一失敗して、この世界を崩壊なんてさせてしまったら眼も当てられない。それ以前に俺も死んでしまう。なのでこればかりはゆっくりと進めていくしかないわけだ。

他の精霊魔法も同様のことが言える。

時間、消滅、創造——どれも神が持つと言われているという能力である。

最初に空間により、その場所を存在させ、創造により生命を作ります。そして時間という流れを作りだし、必要のなくなったものを消滅さし存在を消し去る。

これが神の仕事とされ、こうして人類は作りだされたのであると教えられた。

神が扱う能力なんて人間が扱いきれるものでじゃない。それを扱おうなんて神に喧嘩を売ると同じ行為に等しい。

そんなものを無理やり想像して使おうならば、俺は間違いなく廃人になり、世界は崩壊するだろう。

だから俺が空間などの魔法を使おうと思うのなら、
まずその魔法をどんなものを想像し、そして――

——人の身にて神の存在までに上り詰めること

「さて、この後はどうする？」

俺はこれからの指針も決まって、今日は納得のいく出来となったので満足なのだが、二人は釈然としない顔でこちらを見ている。

「どうするって……」

「そうですね……」

二人は思案して、同じタイミングで同じ事を聞いてきた。

「「一也様さんが言っていた魔法の仕組みとは（って）どういうことな
んですか？」」

「ん？ ああ、まあ仕組みって言うか俺専用と言うか……」

さつきは仕組みって言ったけど、よく考えてみたら頭の中で魔法
を鮮明に想像出来る人間なんてこの世界に俺以外にいるのか？

俺は平行思考マルチタスクの半分をリソースに割いて想像に回して、もう半分
を他のことに回しているから、戦闘の最中なんかも魔法を使いな
がら接近戦を仕掛けることが出来るけど、レイラなんか全部をリソ
ースに割いて使いものにならなくなりそうだな。

まあ一応教えてみるかな？

レイラくらいの魔力なら暴発しても俺みたいに酷いことにはなら
ないだろうし。

「まあ簡単に言ったら、魔法の詠唱をしない代わりに頭の中で発動
する魔法を鮮明に想像することだな。出来るか？」

「そんなの無理ですよ。前にも言いましたがそんなことすると魔力
と精神力が練り込みません」

「やっぱり俺以外は無理なのか……」

まあ前にも言われたことで判っていたことだが。

「そういえば一也様は魔力と精神力の練り込みはどうなさっている
んですか？ そんな想像なんてしていたら練り込めないと思うんで
すけど」

「それは私も思いました」

二人が質問をしてくるので正直に答える。

「正直意識してないな。なんか魔法を想像したらそれと同じ魔法が発動するから」

俺はさつき心の中で考えていたことの一部を話す。小さい火球と大きい火球のことだ。

それを聞いたレイラは酷く驚いて、

「もしそれが本当に出来るのだとしたら国に発表出来るかも知れませんがね」

「発表ね……」

まあ興味はないが。

そんなことを発表して馬鹿なやつらが無茶なことをして暴発なんてさせたら眼も当てられんし、あまり大きい戦力を持ちすぎたら戦争の原因になるかも知れないしな。

「んじゃこのことは誰にも口外するなよ？ 俺は大丈夫だが、他のやつらが大丈夫だという保証はどこにもないからな」

「そうですね」

「わかりました」

二人とも納得してくれたようだ。

それにしてもやる事がなくなっただな……

「暇だしギルドにでも行ってみるかな……」

やることも特に無いし、爺さんに紹介状を貰ってギルドに登録だけでも済ませておこうかな。

「そうですね。時間もあるようですしそれがいいでしょう」

アイリさんは賛成してくれた。

「レイラは何か用事はあるか？」

「えと、特に何もありませんでした」

「そっか」

なら二人には城で待つという貰おうかな。

「んじゃ少し出掛けてくるから二人は城で待つといってくれ」

「嫌です」

「そんな即答しなくても……」

何でこんなに息がピッタリなんだよ……

「私も付いていきますよ」

「もちろん私もです」

「いやいやいや……」

何故か頑なに一緒に行こうとする二人。

大体二人は目立ち過ぎるから一人で行こうと思ってるのに……
はぁ……

「レイラってギルドの人に顔を知られてる？」

「えっと、そうですね。多分というよりも絶対」

「なら駄目だ」

「ええ！？」

悲痛な声を上げる。

その横でアイリさんは何故か花咲くような笑顔。

何この差！？

「何でですかっ！？」

「目立つから。強いて言えば、まだ俺が王族の人と知り合いとは城下町の人達に知られたくないからだな。学園に行く前の日に姿を明かすからインパクトが大きいのであって、それ以前に知られていたらその分のインパクトが小さくなるからな」

「うう……」

そんな俺の言葉を聞きながら、レイラは悲しいそうな声を上げつつも納得してくれたようだ。

「それでは私が一也様の補佐として付いていきますね？」

「それも駄目だ」

「何故ですっ！？」

今度はさっきとは反対で、悲痛な声を上げたのはアイリさんで、その横でさっきまでは悲しいそうな顔をしていたのに今では花咲くような笑顔。

だから怖いって！

「明らかにメイド服は目立つからな？ 他の服を持ってるんなら連れて行ってもいいけど……」

「……………」

え？ 何その沈黙。もしかしてメイド服以外の服ないの？

「ないのか？」

「……………はい」

「……そうか。ならギルドで稼いだお金の最初の使い道は決まった

な」

「はい？」

何かおっさんや爺さんが何かプレゼントしてやれとか言っていたし、私服でもプレゼントするか。

レイラも持つてるだろうけど一応渡そう。おっさんが言ってたし。

「とりあえず今日のところは二人とも城で待っていてくれ。そんなに時間も掛かる訳でもないし」

「「はい……」」

何故か沈んだ顔をしている二人を尻目に見ながら、俺は錬武場から出ていく。

爺さんどこにいるんだろ？

「side レイラ、アイリ」

「「はあ……」」

私達は揃って溜息を吐きます。

せつかく一也様と出掛けられるチャンスでしたのに……

「そういえばアイリさん、本当に私服を持っていないんですか？」

「はい、私はこの城に来てからは毎日メイド服を着ていたので必要なかったんです」

この城に来てから随分経ちますが、私服になんて何も興味を抱

かなかったんですから。こんなことならせめて一枚くらいは買っておくべきでした。

「それにしても……」

「どうしました？」

何か考え事をしているレイラ様に尋ねてみる。

「いえ、たださっきの一也の言葉が気になったんです」

「先ほどの言葉ですか？」

何か一也様は言っていましたっけ？

「はい、小声で確かに『ならギルドで稼いだお金の最初の使い道は決まったな』と言っていました」

「『ならギルドで稼いだお金の最初の使い道は決まったな』ですか

……」

一也様のお金の使い道……

何なんでしょう？ やはり一也様のお召し物でしょうか。

一也様は昨日この世界に来たばかりで私と同じく、服というものを持っていないはずですし……

「気になりますね……」

「そうですね。まあ少ししたら教えてくれるでしょうから、今は一也様の帰りを待っていきましょう？」

「そうですね」

私達はそう言い、錬武場を後にした。私は今日の夕食でも手掛けできますか。

Side out

さて爺さんはどこにいるんだ？

俺は錬武場の扉から出て、少しした所で止まっていた。

まず爺さんがどこにいるかわからない。こんなことならレイラに念話の魔法を教えてもらっていたらよかった。

とりあえず歩くか……

少しすると庭園が見えてきた。

今は昼より少し過ぎ、夕暮れにはまだ早い時間で、ちょうど休憩している人達がちらほら居た。

誰か知り合いはいないかな、っと……

そう思いながら辺りを見渡す。するとちょうど椅子に座っているリーアさんとハイネさんが居た。

「おい。リーネさん、ハイネさん、こんにちわ」

「あら、一也じゃない」

「ホントだあ」

休憩時間でもキリッとしているリーネさんと休憩時間なのでダラケきっているハイネさんの凸凹コンビを見ると少しおかしい。

「どうしたの？ あなたも休憩しに？」

「いや、違うさ。爺さん——クレウイス爺さんを探してるんだけど、どこに居るか知らない？」

「何か用事い？」

「ああ。今からギルドに登録に行こうと思ってるんだが、爺さんが紹介状を書いてくれるって言うからな。だからそれを受け取りに行こうと思っただが、どこに居るかわからなくて困ってるんだよ」

苦笑しながら答える。そんな言葉にリーネさんも苦笑する。

ハインさんはニコニコしながらだらけている。

「そうね……今の時間なら自分の部屋に居るんじゃないかしら」

「爺さんの部屋ってどこにあるんだ？」

てか城の構造とか全然知らないし。

「まず城門の場所は判るかしら？」

「それなら」

俺は結構道を覚えるのは得意な方だ。

よっぽど入り組んだ所じゃない限り、滅多に迷わない自信がある。

「そう。なら城門を入れて右手に曲がってそこを少し進むと階段があるわ。そこを上って次は左手に曲がって進むと左右の分かれ道があるから、そこをもう一度左手に曲がった先にある一番奥の部屋がクレウイスさんの部屋よ」

「結構ややこしいな……」

城門から右↓階段↓左↓左↓突き当たり……と。

「よし、覚えた」

「早いねえ、私じゃそんな簡単に覚えられないよう？」

「そうか？ てか一応魔導騎士団の副団長だろ？ これくらい出来

なくて大丈夫なのか？」

魔法の詠唱を覚えるより簡単だと思うんだがなあ。

「ハイネは戦いに関しては天性の才能を持つてゐるからな。魔法の詠唱は私が無理やり覚えさしてゐるよ」

「苦労してゐるな……」

こんなホンワカしてゐるのに、全然そうは見えないな。

「酷いなあ」

そんなことに気を悪くしないでハイネさんはニコニコしている。懐が大きいのか天然なのかイマイチわからない。

「まあありがとう、助かった」

「このくらいは人として当然のことだよ」

「まあそうかも知れないが一応受け取ってくれ」

「そうか？　なら受け取っておくでしょう」

感謝の言葉を掛けているのに、それを受け取ってくれないのが一番困るからな。

「そうしておいてくれ。それじゃ俺はそろそろ行くとするか」

「そうか？　まあ一也ならすぐにSSSまで届くだろうさ」

「皆に言われてるよ」

苦笑しながら答える。

「じゃあねえ」

「それじゃあな」

「ああ」

俺はそんな凸凹コンビの二人と別れて、爺さんの私室へと足に向けた。

「ここが……」

リーネさんからの説明を聞き、無事迷わず辿り着く事が出来た。
とりあえずノックするか。

コンコン。

「爺さん居るか？ 俺だが」

……何かオレオレ詐欺みたいな感じがする。

「ん？ 一也かの？」

中から少しくぐもった爺さんの声が聞こえてきた。
一発で見つけられてよかった。

「ああ。中に入ってもいいか？」

「いいぞい」

「んじゃ失礼する」

俺は爺さんの了解の言葉を聞き、扉を開ける。

その部屋は俺に充てられた部屋よりも狭く、質素な感じの部屋だった。質素な感じだけで、ベットなどの家具は上質のものを使っている。その部屋にぎっしりと棚に置いてある本が目立つ。

「俺の部屋より狭くないか？　　というかあの部屋は豪華すぎると思うんだが……」

「そうじゃのう。でもお主は一応国の英雄としてこの世界に運ばれてきたのじゃからこの位の対応はしなくちゃいけないんじゃない？」

「そんなもんか？」

「そんなもんじゃ」

そんなものらしい。納得は出来ないが。

それから俺と爺さんは少し話をして、俺の本題へと入った。

「さて本題だが……昨日爺さんはギルドに紹介状を書いてくれるって言ったよな？」

「言ったが、今必要なのか？」

「ああ、今から登録だけしに行こうと思ってな。時間がこう微妙だと何もすることがなくて暇だからな」

「なるほどな……」

そう言つと爺さんは机の中を漁り始める。

そうして出てきたのは一通の便箋。

「ほれ、これじゃ」

「えっ？」

「紹介状じゃ……必要なんじゃない？」

「確かに必要だが……」

何時の間に書いたんだ？

「昨日のうちに書いておいたわ。お前さんのことだから明日にでも来ると思ってたの」

「……助かる」

本当にうちの爺さんみたいな人だな、この人は。

「それと文字も書けないと思ったからついでに必要なものはその便箋に書いておいたから、受付の人物にその便箋を渡すだけで登録出来るはずじゃ」

「何から何まで世話になるな……」

「このくらい気にすることでない。お主は世界を変えろという偉業を成し遂げてもらわねばならないんじゃないか。この位のことは儂らに任せておけ」

「ありがとう」

素直な気持ちを述べる。

これが今俺に出来ることだ。

「よいよい。今すぐ行くのかの？」

「そうだな。……それに何故か知らんがレイラとアイリさんの機嫌が悪かったから早く帰ってこないといけないし……」

「そうじゃったか……。なら早く行って帰ってくるのじゃ。女性を待たすのは男がするものではないぞ？」

「……そうだな。なら行ってくる」

俺は背を向け扉に手を掛ける。

少し気恥ずかしかったが、うちの爺さんがいるみたいに言っていたと思うた

「……行つてきます、爺さん」

その言葉を言い残し、俺はすぐに扉から出ていく。
ああ、恥ずかしい……

＼side クレウイス＼

「行つてきます……か」

何故かその言葉が心に響く。

それは決して嫌な感じじゃなく、むしろ心地よい。

「これが孫を持つ気持ちなのかも知れんのか」

妻も娶らず、ただ国のためだけに生きてきた儂じゃったが、この
ような気持ちを持てる日が来るとは……

「やはり長生きはするもんじゃのう」

経った今、出掛けて行つた孫を窓の外から眺めながら、ゆっくり
とその心地に身を任せた。

＼side out＼

9・想像（後書き）

今日は徹夜で友と遊んでいましたw

だからホントに眠い……

これをうpしたら布団に直行です（笑）

そういえば、PVが100000超えとユニーク10000超えしました。

とりあえず近日中に何か企画でも考えよう……今は考えられないw
それとこの小説のサブタイが〴〵話だけでは寂しいかなあと思って何かをつけようと思うんですが、何か良い案はありませんかね？

誰かサブタイ付けてくれる人募集ですw（えっ？

付けてくれる人は感想にでも力キコしてください〴〵（チヨツw

では（つ　・　）オヤスミ

10・邂逅（前書き）

帰ってきたZ E

それにしても疲れました……

一週間徹夜はキツイ（汗

昼間に睡眠は取ってるけどキツイことには変わらなかった……

10・邂逅

さて城下町に出てきたのはいいが……

「ギルドってどこにあるんだ？」

目立たないことを考えていたせいか、すっかりその事を忘れていた。森に行く時もギルドの場所を聞くのを忘れてたし。

「しょうがない……また適当に歩くか」

そう思い、歩きだす。

まあ初めてゆつくりと城下町を巡るいい機会だろう。お金は爺さんから少し貰って来たから買い食いなんかもしていいかも。

そう言えばお金の単位をもう一度復唱しておくか。前の世界と違うしな。

確か、お金の単位が銅貨、銀貨、金貨、白金貨の四つ。

銅貨が最低で白金貨が一番高いと。んで、10銅貨で1銀貨。100銀貨で1金貨。1000金貨で1白金貨。白金貨は普段の買い物などには使えない。普段の買い物は基本銀貨まで。金貨は武器など高価な物を買う時だけ。白金貨は主に国同士のやりとりなんかで使われる。

こんなもんか？

まあ覚えやすいな。一つ位が上がっていくごとに、必要量を10倍するだけだしな。

そんなことを考えながら歩いていると路地裏の方面に来ていた。

ありゃ？ 無意識下で歩きすぎたかな？

後悔しても遅いので、今さっき歩いてきた道に戻ろうとする。そ

んな折、今いる場所の先の方から怒鳴り声と少女の声が響いてきた。
はあ……仕方ない、行くか。

見ていなければ何も思わないのだが、一度発見してそれを無視するほど人間を捨ててはいない。こんなことなら平行思考マルチタスクを使っていたら良かった……

＼side 謎の少女＼

「くっ、離してよっ！」

なんでこんな事になっちゃったんだろ……

この路地裏を通れば、北の町の出口に近いからって通って来たのが間違いだったなあ。案の定、こんな場所定番のチンピラに絡まれるし……

「別にいいじゃねあか。なあ？ 俺達といい事しようぜ？」

ゲヒた笑いを浮かべた3人のチンピラは私の手を掴んで引っ張る。
力じゃ私は敵わない。

大の大人、それも男性に、まだ成人もしていない少女が力で敵う筈もない。

魔法は使っちゃ駄目だしなあ……

魔法を使える人間が、魔法を使えない人間に魔法を使うと捕まる。まあ、魔法の使えない人間からしたら、魔法はナイフなんかよりも凶悪な武器になる。それでも、魔法を使えない人間が暴力などを振るってきた場合は、これは例外として魔法を使用しても構わない。どうしよ……魔法が使えないし、力でも敵わない。自分の身に危

険が迫つたらどうにかなるんだけど……

「おい、聞いてんのかよっ!？」

「無視はよくないんじゃないのか？」

「だぞだぞ？」

三人のチンピラは私がさっきから無視していることに腹を立てているようだ。

こういう輩は無視されることを嫌う。案の定、

「このアマがつ！」

一人が私に向かって拳を振りかぶる。

来たっ！ これで魔法が使える！

相手が殴りかかって来たことにより、正当防衛で魔法が使えるようになったのだが、そこに一人の乱入者が現れた。

｝side out｝

「何やってんだ？」

どっからどう見てもチンピラにしか見えない三人の男と、それらに取り囲まれている少女。漫画やアニメでしかお目にかかれない場面に出くわした。

少女は俺よりも少し年下の感じで、背が低く150cmにも満たしていないだろう。体の発達も同じようで、まだまだ未発達という感じだ。

それでも美少女には違いなく、金色のウェーブの掛かった髪が肩の上で切られており、眼はクリクリとして小動物を思われる。しかも服装はこのような所を通る者の物ではなく、どこか高級品のよくな綺麗な仕立てとなっている。

「ああ!？」

「誰だデメエ!」

「黙っとくんだな!」

三者三様の返し方をされ、思わず言葉を発する。

「うるさい。三人話さなくても別にいいんだ、一人だけ話せこの馬鹿ども」

とりあえず言ってみた。まあ反応は予想できたもので、

「はあ?」

「調子にノってんじゃねえぞ、坊主!」

「どっかに行くんだな!」

「ちょ、キミ!」

なんか少女が言ってるけど気にしない。

「とりあえず口を閉ざしてその女の子から手を離せ。んな汚い手で触れたら女の子が汚れるだろ?」

その言葉とともに俺は女の子とチンピラの間割って入り、チンピラの手を手刀を入れる。男の呻き声が聞こえるが無視。それから女の子を抱えて少しチンピラ達から距離を取る。

「あれ、え？」

女の子はいきなり自分が見える風景が変わったことに驚いている。

「何か嫌な事はされなかったか？」

「え？ えと、はい」

「そっか」

抱えているのを降ろし、俺はチンピラの方に向き直る。

「か弱い少女を大の大人が数人で囲んで脅すのは感心しないな」

「デメエツ！？」

「人として終わってんだよ、この屑ども」

その言葉を皮切りに、チンピラが俺に向かって拳を振り上げてくる。そんな光景を見て、少女は俺が殴られると思ったのだろうか、眼をキツく閉じていた。

「死ねや、オラッ！」

最初の一人が殴りかかってくる。

俺はそれを左手で払い、カウンターで右手で顎先を軽くぶつける。ただそれだけで人間は脳が揺れ、失神してしまう。

それを見た残りのチンピラは恐怖に駆られながら俺に突撃してくる。

「あああああああ！」

「うわあああああ！」

今度は二人同時に殴りかかってくるので、それを一人目は首を横

に倒すことで避け、足を引つ掛け転ばす。転ばした男を無視してもう一人の男が向かってくるのを、先ほどと同じようにして気絶させる。残った一人はもはや半泣きになっていた。

「はぁ……そんなにビビるんなら最初からこんなことをするなよ」
「ひいつ!？」

そんなに怯えられると少しショックなんだが……
まるで俺が悪者みたいな構図になってしまった。

「今度からはこんなことをするなよ? もししたら——」

俺は近くの壁を殴りつける。

気で体を強化し、皮膚を硬質化したもので殴りつけたため、壁は砕け散る。

「これをお前らの顔に叩きこむからな?」

「は、はiiiiiii!」

「なら行け。ああ、そこに倒れてる二人も連れてけよ?」

「わかりましたあああああ!」

叫びながら倒れてる二人を担いで去っていくチンピラ。

少ししたらその姿は消えていった。

さて……

俺はこの場に残っている少女に向き直る。少女は俺が眼を向けると少しビクッ、と体を震わせる。

……俺ってそんなに怖いのか?

「えっと……大丈夫だったか?」

「ひ、ひゃい!」

「……………」
「／／／／」

モロ噛んだな。

「まあ見た目何もされてなさそうだし、俺は行くぞ?」

俺はこんな所で時間を潰している暇はない。

早くギルドに行つて城に帰らなくては、レイラやアイリさんの機嫌が悪くなってしまう。

何でかは知らないけど……

何故か去ろうとしているところに声がかかる。

「あ、あの!」

「何だ?」

俺は忙しいんだぞ?

要件があるなら早く言つてくれ!

「助けてくれてありがとうございました!」

「ん、まあ声が聞こえたからきただけで、もし声が聞こえてなかったら来なかったんだからそこまで言わなくてもいいぞ?」

「それでもです!」

おおう?

急にハキハキ喋り出したな。

「魔法は使えるんですけど、一般人に魔法を使うのは犯罪で困つてたんです」

「へえ」

てか、一般人に魔法を使うことが犯罪って初めて聞いたわ。
まあどう考えても魔法が使える方が有利だもんな。

「それで何かお礼したいんですけど……」
「別にいらねえよ、お礼目的で助けたんじゃないしあるまいし」

人助けにお礼を求めるのが間違っている。
まあ人によつてはお礼を求めるんだが……

「何かないでしょうか？ あ、時間はありますか？ 今の時間なら
夕食を奢らしてもらいますよ？」

「あ、別にいいって。どっちにしる時間ないし」
「そうですか……」

ああ、そんな落ち込むなよ。
何かメチャクチャ俺が悪い感じがするだろ？

「はあ……なら一つ頼んでもいいか？」
「え？ は、はい！」
「はあ、この町のギルドの場所って知ってる？」

とりあえず何かしてもらわなくちゃいけないのなら、今一番困つ
てるギルドの場所に案内してもらおう。

「ギルドの場所、ですか？」
「ああ、この町は初めて来たからギルドの場所が判らなくて困つて
たんだよ。んで、知ってたら教えて欲しいんだが……」

「それくらいならお安いご用です！ ギルドまで送りますよー！」
「あ、ああ……」

別に教えてくれるだけでよかったのに……

「へえ……あんなに強いのにギルドに登録するのは初めてなんですか？」

「まあ……てか言うの忘れてたけど、俺の名前は一也 御薙だ」

何かテンパってて自己紹介するの忘れてたな。
しかも相手の名前も知らねえし。

「あ！　そういえば、自己紹介してませんでしたね！　私はフィルファール・リリン・スカールスです。名前は長いんでフィルって呼んでください！」

「フィル……ね。俺は一也って呼んでくれてかまわないから」「はい、一也さん！」

さっきから何かテンションおかしくね？

「そっぴや何でフィルはあんな場所に居たんだ？　普通の女の子ならあんな場所を通らないだろうに」

普通あんな場所通るか？　俺でも通らないぞ。絶対誰かに絡まれるだろ。

「えっと……あの場所を通ると町の出口に行くまでの近道になるんですよ。それで少し急ごうと思って通ったらあんなことに……」

「はあ……でもいいのか？ 急いでいたんならギルドの案内は別に無理しなくても……」

「全然大丈夫です！ ……もともと少し早めに学園に帰ろうと思っただけで、無理してまで早く戻る必要はなかったんです」

なら最初から通るなよ……

「ふん…学園？ どの学園？」

もしかしてレイラ達と同じ学園だったりして？

「えっと、ルイス学園ですけど……知ってます？」

ビンゴだった！？

「まあ……な」

「一也さんはどこかの学園に通ってるんですか？ 私より年上だと思っんですけど」

「俺は行ってない」

まあ、もう少ししたら通うことになるがな！

「そうなんですか……」

「まあな。んで？ ギルドはどこなんだ？」

あんまり雑談する時間も残ってないんで、とつととギルドに登録に行きたい。

「もう少しですよ？ 後数分もあれば辿り着きます」

「あいよ」

それから二人とも無言で歩いていく。

周りは町の人の声で賑わっており、少しうるさいが活気があって
ほどよいBGMとなっていた。そうして歩く事数分、すると俺の目
の前にはすこし大きめの建物が眼に入ってきた。

「あれがギルドです」

「あれか……」

大きさは少し大きめのアパートと言ったところか。

二階建てになっており、なかなかの人数の人間が出入り出来る造
りになっている。

「一階でギルドの登録や仕事クエストの受諾などが出来ます。二階は主に休
憩所になっていて、軽い食事や情報交換などが主になっていますね」

軽い説明をしてくれるフィル。

「助かった、もうここまで来れば大丈夫だ」

「いえ、私の方こそ助けていただいて本当にありがとうございまし
た」

わざわざ深くお辞儀する。

そこまで気にしなくていいって言ってるのに。

「気にするな。俺もギルドまで連れてきてもらったんだ。これでお
相子だ」

「そう……ですか？」

フィルは首を傾げる。

俺はそんなフィルを見ながらギルドの扉に手を掛ける。

「そうだよ。……まあ次いつ会うかわかんないけど、またな」

多分すぐ会うことになると思うけど……

「はい！」

俺はその言葉を聞きながら扉を閉じた。

「……いつかまた会いましょう」

そんな言葉は空へと吸い込まれ、消えていった。

〈side フィル〉

「かつこいい人だったなあ」

私はさっきまで一緒に居た人の事を思い浮かべる。

漆黒の髪。高い身長。細身ながらも引き締まった肉体。眼は少しキレ長で怖そうに見えるが、どこか優しい感じがする瞳。どれもが最上で、同じ人間とは到底思えない。

「はあ……あんな人が同じ学園に居てくれたらな」

そうしたら、夢見る学園生活だって過ごせるかも知れないのに……

「学園に居る男子はまともな人が少ないからなあ……」

基本的にルイス学園はトップランクの人間が集まってくる。

しかし、それは才能があれば入れるのであるのと同義で人間性に問題があってもなんら構わないということだ。

ルイス学園に入るために必要なのはただ一つ、優秀であること。

そのため、自分が一番正しいと思っている人間やナルシストみたいな人間が集まってくる。そういう人間に限って、何故か優秀だったりもする。

「一也さん……か」

もう一度あの人の名前を呟く。

それは魔法の言葉のように、自分の胸を満たしていく。

「一目惚れ……かな？」

私ってこんなに惚れやすい体質だったのかな？

「違うよね……」

多分あの人だからこんな気持ちになるんだろう。

「もう一度会いたいな……。でも学園に帰らなくちゃ……」

はあ……

ここにいれば一也さんにまた会えるのに……

「まあしょうがないよね？ また学園が休みになったらここに来よ

うつと！」

そんなことを思いながら、学園に帰っていく。
その胸の内には一人の少年のことを思い浮かべながら。

＼side out＼

「すみません」

「何か御用でしょうか？」

俺は受付嬢であろう人物に話しかける。

「これを……」

爺さんに貰った紹介状を渡す。
渡した途端、受付嬢が驚いて、

「これ「よつと」ふむぐう!?!」

「あまり大きな声を出さないでください」

俺は叫びそうになる受付嬢の口を塞ぐ。少しジタバタしていたのもすぐに落ち着く。

そのため周りからは怪しまれずに済んだようだ。

「あまり目立ちたくないんで……」

「失礼しました。少しお待ちください」

そう言い残し、受付嬢は奥に消えていった。
少し暇になったため、俺は周りを見る。

見た感じ、近接戦闘が得意そうな人が3人、魔法戦闘が得意そうな人が2人くらい居る。魔法が得意そうな人は一番大きな魔力持ちが、大体レイラより少し大きいくらいか。

まあ、爺さんクラスやリーク爺さんクラスがそうホイホイと居る訳ないか。

周りの強さを確認していると、奥に行っていた受付嬢が戻ってくる。

「お待たせいたしました。これがギルドカードになります」

渡されたカードには自分の名前とランクが記入されていた。

本当にAランクから始まったな。

「これはギルドの所属している証にもなりますので失くさないよう注意してください。もし失くした場合は再発行致しますが、少々のお金とランクが1ランク下がるため注意してください」

お金は分かるがランクまで下がるのか……

「それではギルドについての説明を少しさせて頂きます。まず、ギルドにはランク「そこは連れに聞いたんで大丈夫です」そうですか？　ならそこは飛ばさせて頂きます。次はランクの上げ方について説明致します。ランクを上げるには、基本は自分と同ランクのクエストを15回受けることで1ランク上げることが出来ます。他には自分より1ランク高い場合は10回、2ランクなら5回、3ランクなら1回となっています」

なるほど……なら俺の場合はAだから……SSSかよ!?

さつそく最大級になるとは……

「御理解頂けました？」

「はい」

「次はクエストが失敗した場合のことを説明させて頂きます。ご自分が受諾なさったクエストはランクの上下に係わらず、5回失敗することでランクが1つ下がりますので注意してください。しかし4回失敗していても5回失敗する前に1ランク自分のランクを上げることが出来ましたら失敗のカウントは帳消しとなります」

まあ失敗はしないだろうからここは大丈夫と……

「ここも大丈夫です」

「分かりました、では次の説明に入ります。次の説明はギルドの建物についての説明になります。まず一階がクエストを受諾するスペースになっています。その壁に貼り付けられている紙がクエストの依頼書です。それはランク毎に分けれているので、自分のランクにあったクエストを探してください。そして受けたいクエストを見つけたら私の所に持ってきてください。それでクエストを受諾した形となりますので、後は依頼書に書いてる内容を遂行出来れば完了となります」

「なら魔物討伐系統のクエストなんかどうやって報告するんですか？ 採集系統なんかは目的の物を持ってきて呈示すれば大丈夫ですけど……」

「そういうクエストの場合は、その対象となっている魔物の部位を持ってきてもらう形になります」

へえ、ドラゴンとかなら牙とか鱗を持ってくるんだな？

「なるほど」

「次の説明に入ってもよろしいでしょうか？」

「頼みます」

「わかりました。次ですがクエストが終わる度にギルドカードを私に渡してください。それによってギルドカードに色が入るようになっていきます。その色が溜まって発光すれば1ランク上がることが出来ます。

ちなみに色はGは灰、Fは青、Eは緑、Dは黄色、Cはオレンジ、Bは赤、Aはピンク、Sは水色、SSは白、SSSは黒となっています。一也様の場合はAランクなのでピンクですね」

へえ……

「それに伴って、ギルドカードの枠の色は、自分のランクの色と同じになっていますので直ぐに確認出来ます」

「お、本当だ」

そう言われるので、自分のカードの枠を見る。

見ると言われている通り、枠はピンク色をしていた。

「次は二階の説明です。二階はギルド員専用の酒場となっています。ギルドカードを提示することによって食べ物や飲み物を頼めるようになっていきますので、クエストが終わったらそこで食事することをオススメします。普通の店より安いですし」

俺の場合は城に帰って食事しないと、何故か怒られるような気配がする……

「まあギルド員じゃなくても入れますが、ここに来る人のほとんどがギルド員なのであまり関係はありません。後、2階はいつも人で賑わっているので情報の交換なども出来ます」

「なるほど」

情報かあ……

確かにこの国の情報も欲しいけど、それよりも先に一般教養からの知識の習得の方が先になりそうだな……

「説明はこのくらいですね。何か質問はありますか？」

「特に……あ、一つだけいいですか？」

「何でしょうか？」

笑顔で俺の質問を聞いてくれる受付嬢。

「名前を教えてくださいませんか？ 名前が分からないんで呼べないんですよ」

「クスツ。そんな質問をする人はあなたが初めてですよ？」

「そうなんですか？」

「ええ。でもそんな人だからこそ名乗る価値もあるかも知れませんね。」

では改めて自己紹介をさせて頂きます。私の名前はサレス・フェルスタンと言います。気軽にサレス、と呼んでいただいて構いませんよ？」

「サレスさん……ですね」

受付嬢——サレスさんは直ぐに名前を教えてくださいました。

「それじゃサレスさん、今日のところはこれで帰ります。また明日来ると思っんでその時はよろしく願いします」

「わかりました。では」

別れの挨拶を言い残し、ギルドの扉から出る。

外はもうそろそろ太陽が沈む時間になりそうだった。

「少し急いで帰りますか……」

体を気で強化し、少し駆け足で帰る。

そんな俺に対しても、町は変わらずに賑わっていた。

Side サレス

「珍しい人でしたね……」

私は先ほど出ていった少年の事を思い出す。

いきなり私の名前を聞き出した稀有な人。初めてギルドに訪れた人で、最初から私の名前を聞こうとする人なんて初めてだった。

「それにしても……」

そんなことより気掛かりなのは、この国の王国魔導隊隊長、クレウイス・アスカルド・ペリオン様からの紹介状。

書かれていた内容は簡潔で『名前は一也 御薙。この少年をAランクからクエストを始めさせてほしい』との事。まあもっと詳しく書いていたのだが、ここは簡潔に纏めた。

「クレウイス様からの紹介状なんて……あの少年は何者なのかしら？」

少年が出て行った出口を見やる。

もうそこにはいないというのに見てしまっ。

「まあ明日にまた尋ねるって言っていたし、その時にでも聞きましたよっか」

私はそう纏め、ギルドの仕事に没頭していく。

しかしその頭の中には、やはり先ほどの少年の影がちらついていた。

side out

10・邂逅（後書き）

人物設定

フィルファール・リリン・スカールズ

身長 148cm

体重？

スリーサイズ？

体の発達はまだまだ未熟で凹凸が少ない。

それでも美少女には違いはない。

金色のウェーブの掛かった髪が肩の上で切られており、眼はクリクリとして小動物を思わされる。

一也に一目惚れした模様？

サレス・フェルスタン

身長 162cm

体重？

スリーサイズ？

ギルドの受付嬢。

髪は茶髪で腰くらいまであるのをポニーテールで纏めている。

眼は翡翠色で細長く、知的なイメージがある。

一也に興味を持っている。

皆さん、散々待たしてスイマセンでしたッ（TDTT）ゴメンヨー

今日より復帰です！

今日からはまた一日一話更新が出来る！…… 筈www

そっぴや新作はバカテス物でもうpしようかと思ってます。
とりあえず数話upしてみて反応待ちにでもしようかな？

まあとりあえず、本日からまたよろしく願ひします！
では！

11・vs色王『白』（前書き）

昨日は人物設定しか投稿出来なかった……
不覚っ！

11・vs色王『白』

さて今日はギルドの仕事をしようと思うんだが……

昨日サレスさんに言ったことだし……

え？ 昨日はどうしたかって？

別段問題はなかったさ。

帰ってきたらレイラとアイリさんに少し怒られたけど、他は特に何もなかったよ。ただ、何で怒られたかは未だに判らないけど。

まあちよつと怒られた後に夕食を取って、風呂（そついやこの世界の文化に風呂があるんだぜ？ 地球凄えと思った瞬間でした）に入った後、早めの就寝を取りました。

昨日は早く寝られて体調も万全。

体も動かして、いつでも戦闘準備OKになったんで、早速ギルドに行ってきます！

にしても早朝だけど開いてるのか？

「こんにちは」

言葉と同時にドアを開く。

ドアの前で誰かいないか確認すると、一人だけいたので普通に開ける。

「あら……」

「おはようございます、サレスさん。約束通りちゃんと来ましたよ？」

微笑みながら挨拶する。

そうすると向こうも微笑んで返してくれた。

「おはよう。でも来るとは言っていたけど、いくらなんでも早すぎませんか？」

「まだ駄目でした……？」

それは困った。

わざわざ早朝から出てきたのに無駄足を踏んだか？

「別にいいんですけどね？ それとギルドは朝の4時から終わるのが夜の10時で基本的に休みはなし。二階の酒場は夜遅くまで開いていますよ？」

「そうなんですか……」

俺はホッとして辺りを見渡す。

今日はクエストを受けに来たので、昨日は見れなかったクエスト欄を見ていく。

んゝ、いまいいのがないな……

自分のランクより上のクエストを探すも、短時間で終われるものがない。

出来れば昼頃には帰れるクエストがあればいいんだが……

「どうしたんですか？」

そんな俺を見かねてサレスさんが声を掛ける。

「えつとですね、余り時間が使えないんで昼頃くらいまでに終わって、なおかつ高ランクのクエストを探しているんですけど……」

そうでもしないとアイリさんやレイラが怒ってくるだろう。

「そうですねえ……」

そう言い残すとサレスさんは奥に消えていった。
俺ももう一度クエストを見ていく。

「ないな……」

「これなんでそうですか？」

奥から戻って来たサレスさんが俺に一つの紙を渡す。その紙を見ると、

「ジェネシックウルフの討伐？」

ジェネシックウルフって何だ？

「サレスさん、ジェネシックウルフって何ですか？」

「ジェネシックウルフって言うのはですね——」

サレスさん曰く、

この世界が生まれたところからいた原初の魔物。

幼体でも下位の竜種を殺すことが出来、その体長は幼体でも4〜5メートル、成体にもなると10メートルを超す巨体もいるらしい。毛並みが白銀で“色王”の一角を担う存在。知能も高く、中位の魔法まで使用してくる。が、一番怖いのはその巨体からは考えられないくらいの俊敏さと、剛腕から繰り出される爪の一撃らしい。一撃でも食らうと大抵の人間なら即お陀仏。

白銀の毛並みは、並みの攻撃も魔法も通さない。その為、その毛

は高額なレートで市場に出回るらしい。もちろん他の部位も最高品質だが、毛には一歩劣る。

「なるほど。それと“色王”って何ですか？」

「“色王”って言うのは、名前の通り、見かけがその色を表していて、尚且つ最高クラスの強さを持つ魔物に与えられる名です。その強さはギルドランクで言えばSS→SSSクラスと考えても遜色はない筈です」

「へえ、他にはどんな奴がいるんですか？」

「そうですね。“白”はさっき言ったジエネシツクウルフ、“紅”がフェニックス。それに“蒼”のリヴァイアサン。“琥珀”のレイジングタイガー、“翡翠”のナウスナーガ、“黒”のグロリアスダイダロス、そして“金”のセラフィムと“銀”のクロノドラゴンよ。特に最後の二匹は別格で、最早伝説上の魔物となってるわ。まあ“金”や“銀”、それに“蒼”と“紅”は知能が人間以上で、滅多に悪い事なんかしないんですけどね」

「なるほど……」

それにしてもフェニックスって言ったら不死鳥か？

それにリヴァイアサンって言ったら海竜神だろ？

セラフィムなんか最上級の天使じゃねえか。知名度だったらミカエルなんかに劣るけど、地位で言えばセラフィムの方が高いんだぜ？

ホント何でもありだな……

「その“白”の討伐ですか……」

「あら、自信がないんですか？ クレウイス様の紹介だったから大丈夫だと思って持ってきたんですけど？」

「……………」

はあ、これ完全に挑発されてるよな？

最初のクエストで、しかも初めての戦闘だから軽い奴が良かったんだが……

しょうがない……か。

「わかりました。そのクエストを受けます」

「それじゃ……はい」

セレスさんが俺にクエストの受諾書を手渡す。

内容が、

↳ ジェネシックウルフの討伐↳

場所 アルティウス王国のジークレインの高原

内容 ジェネシックウルフの討伐。成体にはなっていない様だが、それでも体長は5メートルを越している。知能は低めで、手当たり次第に周りに被害を与えているので、早めの討伐を願う。討伐の証拠としては牙を持ってきてくれるだけでいい。なお、毛などの採集品はクエスト受諾者が貰ってくれて構わない。

報酬 500金貨

と書かれていた。

ふむ…… 500金貨か。大体日本円に換算すると…… 5000万円。ね。

まあなかなかの収入か。

「サレスさん、ジークレインの高原ってどこですか？」

「えーっとね、ここの南門から出て、東に向かった所にある高原ね。普通の馬車なんかで向かったら数時間で着くと思います」

「馬車で数時間……」

俺なら1時間もあれば着くか？

そう思い、俺は討伐の準備を始める。

まあ準備と言っても、殆どすることがないので討伐の方法を考えることにする。

さっきのサレスさんの話からすると、下位、中位クラスの魔法は通らないと思ってもいいか。まあ上位がどの位の威力かは知らんけど。

あれ？　そう言えばレイラが俺の火の玉出した時に上位クラスの威力って言ってなかったっけ？　ということはあの位の魔法はダメージが入るのか？

ま、無理だったら気で身体強化を最大にして接近戦でもしたら大丈夫だろ。

俺は考えが纏まったので、サレスさんに一言告げギルドから出ていく。セレスさんは何時の間にか来ていた、他のクエスト受諾者の相手をしていた。

side サレス

大丈夫なんでしょうか……

先ほどギルドから出て行った少年のことを思う。

いくらクレウイス様の紹介があつたからと言っても、“色王”の討伐は間違っていたかも知れない。他のクエスト受諾者の受け答えをしながら考える。

出来れば怪我をしないでほしい……

それは無理なのはわかつている。

相手は“色王”

魔物の中で最強と言われている王達。そんなもの相手に怪我なしで勝てる筈がない。

それでも――

――生きて帰ってきてくださいね。

願ってしまう。

｝side out｝

「ここが南門か……」

ギルドから出て、やっと南門に辿り着いた。

この時間帯になると町は活気づくようだ。門からは引つ切り無しに人が出入りし、町の人達は声を上げ喋っている。

ここから出て東だったな……

俺は門から外に出る。外は草原地帯のようだ。薄い緑が大地の果てまで続いて、周りには森なども目に入る。

それじゃ気で強化して走りますか。

体を気で強化する。自分の気の3分の一くらいの量を使い強化。そうすると一気に体が軽くなり、力が湧いてくる。

んじゃ行きますか！

俺は走る。その速さは走ると言うよりも駆けると言った方が正しい。いや、この表現でも足りないだろう。なんせ軽く残像を残して走っているのだから。

「あれ……か？」

数十分くらい走っただろうか。

体を強化しているために視力なども強化されている。現状は数キロ先までなら注視すると見える。その一、二キロ先に明らかに体が真っ白で、それでいて周りの魔物を食っているやつがいる。

俺はどうしたかって？ そんなもん無視してきたに決まってるだろ？

俺の走りについてこられる魔物なんていなかったし。

俺はそんな惨劇を繰り広げている場所へと近づいていく。一分も経たない内に、その惨劇の場所が眼に入った。

「グルルルウウー！」

「えらくいきり立ってるな」

俺の目の前には6、7メートルくらいの白銀の狼。

どうやらこいつで間違いなさそうだな。

「お前がジェネシクウルフか？」

一応話しかけてみる。サレスさんが言うには知能は少しあるらしいし。

「ガアアアアア！」

どうやら交渉は決裂のようだ。

完全に敵と認識されてしまった。

俺まだ何もしてないのに……

少し寂しい気持ちになったが、そんな気持ちを切り替える。

ここからは命の取り合い。殺すか殺されるかの生物の原初としての本能。

——さて、俺はコイツに勝てるのか？

——少しだけ不安に思う。

いくら魔力が無限でも、気の量が増減したとしてもこんな戦いは初めてだ。

——いや、違うな。

俺は闘気を漲らせる。

そんな俺の様子に、ジェネシクウルフも戦闘状態に入ったようだ。四肢に力を漲らせ、何時でも跳びつける体勢になった。

——こいつ如きに負けるようじゃ、俺はこの世界で生きていけない！

影桜を引き抜き正眼に構える。

そして——

——いざ、勝負！

影は交錯した。

「チッ！」

予想以上に最初の突撃が早かった。

怪我は負ってないが、タイミングがずれて斬りつけなかった。

俺は一度距離を取り、頭の中で魔法をイメージする。そんな俺の様子に危険を感じたのか、ジェネシックウルフは俺に突っ込んでくる。想像するは火の矢。数は数百。

頭の中で完全にイメージし現実に再現する！ジェネシックウルフとの距離が10メートルくらいで俺の魔法が炸裂する。

「魔法の射手 連弾 炎の500矢」！

俺の手から炎の矢が次々と飛んでいく。

制御も完璧で全段ジェネシックウルフに着弾する。

え？ なんでネギまの魔法かって？ イメージしやすいんだよ！あの漫画なんだよ。魔法世界行ってから能力のインフレ起こり過ぎだろ？

まあそのおかげでイメージの固定は簡単だからいいけど……

少しすると炎の矢が着弾した時に出た煙も張れる。

そこには少し焦げてはいるがダメージは負っていないジェネシックウルフが立っていた。

「マジかよ……。あれでノーダメージですか。流石だな、最強種」

俺は感心すると同時にジェネシックウルフの攻撃を避ける。

剛腕から繰り出される攻撃をバックステップや跳躍などで避けながら考える。

さて、どうする？ 魔法で攻撃するか、近接戦闘に変更するか……

相手も俺の攻撃を読んだのか、フェイントを混ぜて攻撃してくる。流石にそんなことを予想していなかった俺は咄嗟に刀で防御する。

防御はしたが、防御越しから少しのダメージが入る。

「グッ！ えげつない威力だな、オイ」

そして俺は目の前のジエネシクウルフを見る。
すると――

「なっ！？」

ジエネシクウルフの体が突如消え去った。

「どういう、ッ！？」

後ろから衝撃。

まともに背後からの強襲を食らい、吹き飛ばす。

「ゴフッ……カハッ」

内臓や骨が数本やられたらしい。

気をちゃんと練れてなかったのと、消えるということとで少し注意
力が散漫していたようだ。

どういうことだ？ 消える？

もしかして幻影魔法……？ いや、そんな魔法があるのか？

それ以上に幻影魔法って高等魔法っぽしそうだし。

なら――

「――光の屈折、または熱による陽炎……ね」

糞がッ！ 狼風情がそんな知恵を付けているとは。

どうやらジエネシクウルフは炎の魔法による陽炎、または光の

魔法で屈折を起こしていたようだ。

「俺も弱くなつたな……」

気持ちを切り替える。こっからが本番だ。

「潰してやるよッ！」

俺は気の強化、密度ともに最大にする。

そして影桜を腰より後ろ側で構え突撃する。そんな様子にジェネシックウルフはカウンターを狙っているようだ。その場から動かず、回避行動に移らない。

だが！

「その考えが甘えんだよッ！——天凱流 攻式参之型 流星」

カウンターをしようとするジェネシックウルフの腕を避けるように俺の刀を動く。そして手足を一息の間に斬り飛ばす。

「グアアアアアアアアア！」

「これで終いだッ！“神の鉄鎚”！」

突撃する間にイメージしておいた魔法を炸裂させる。

その突如、ジェネシックウルフの頭上から土で出来た巨大な鉄槌が落ちてくる。

「——潰れる！」

「ギャン！？」

まともに頭からその攻撃を受けたジェネシックウルフは少しの間

痙攣していたが、それも収まり動かなくなった。

「死んだ……か？」

俺は緊張の糸が切れない内にジエネシクウルフの容体を調べる。

「一応死んだみたいだな……」

俺は保険のためにジエネシクウルフの心臓を突き刺す。
これで完全に死んだだろう。

「なかなか疲れたな……」

初めての魔物との戦闘は辛くも勝利で終えた。

11・vs色王『白』（後書き）

天凱流 攻式参之型 流星

三個目の攻撃の型。相手の防御、またはカウンターを避けながら相手を斬りつける斬撃方式。

斬撃自体の威力は低めだが、防御を抜いてダメージが入るので予想以上のダメージを与えられる。

久しぶりの戦闘描写（汗

何か変な感じがするんですが大丈夫でしょうかね？

一也の愛刀―影桜は一也の気を込めると、それに伴って切れ味が増すという設定です。

何と言う妖刀仕様ww

では、また次回でお会いしましょう。感想など待ってます！

11・5 少女達の日常（前書き）

諸事情により二日投稿出来ませんでした。
本当にスイマセン（汗）

まあ諸事情と言っても出掛けてりしたただけですが……
出掛けついでにFateの映画見てきました！
某赤い正義の人がかつこよかったです！

んゝ、あの能力の小説を一つ書いてみたいなゝ。
それをするためにはこの作品を終わらせねばw
それにしてもこの作品何話くらいまで続けれるかな……
100話じゃ終わらなさそうなんだよねw

11・5 少女達の日常

く少女とメイドの一日様子く

「おはようございます」

今日は昨日よりも少し遅い時間に我がご主人様—— 一也様を起こしにきました。

昨日は朝から訓練をするという事で早朝に起こしましたが、基本は朝食の1時間前くらいに起こすのがベストでしょう。

「あら？」

そう思ってきたのですが、当の本人が見当たりません。
もう起きているんでしょうか……

そう思って部屋の中を見渡すと一つの手紙が目に入ります。それは机の上に置いてあって、拙い文字で書かれていました。

く レイラとアイリへ

今日は朝からギルドに行ってクエストをしてきます。
なので朝食はいりません。

昼頃には帰ってくると思うので心配しないでください。

昼食は一緒に食べれるようにします。

——一也よりく

「……………」

あの方は……

こんな手紙に書くのではなく、直接口で伝えてくれたらいいでし

よう」。

「これはレイラ様にも見せなくてはなりませんね……」

まだレイラ様は就寝していますし、もう少し時間が経ったら起こしに行くことにしましょう。

「そういえば……」

一也様は文字が読めなかった筈では……？

「まさか……！」

一日で覚えたばかりか、一日で文字まで身に付けたんでしょうか。……いえ、流石に一也様と言えどそれはありません……よね？

「確信出来ない程、一也様は規格外ですからね……」

本当に私のご主人様は凄いです。
出来ない事なんてないのではないのでしょうか。

「まあ……考えても無駄ですか」

そう思ふことにして、私は部屋を後にします。
とりあえずはレイラ様を起こしてからにしましょう。

コンコン

「レイラ様、起きていらっしゃいますか？」

ドア越しから声を掛けるが、反応は一向にない。やはりまだ眠っているようだ。

「失礼します」

ドアを開けて中に入る。

やはりと言うべきか、レイラ様はベットの中でぐっすりと眠っていた。しかも顔は幸せそうで、起こすには罪悪感が沸くくらいふにやけていた。

夢でも見ているのでしょうか。

起こすのは忍びないと思いつつも、心を鬼にして起こします。まずは声を掛ける。

「レイラ様、起きてください。起床の時間ですよ」
「みゅう……………」

反応なし。

まあ、呻き声？ は気にしない方向で。

ここは予想通りです。

今まで声を掛けただけで起きたことなんて、両の手で数えるくらいしかなかったですし。

次の方法で起こすことにします。

私はレイラ様の体を揺さぶり、声を掛けます。

「起きてください」

「むう……………」

少しだけ反応はありましたが、やはり起きません。
今日はなかなか手強いですね……

10回に7回くらいはこの時点で起きるのですが、今日は起きません。

仕方なく最後の手段を実行します。

幸せそうに眠っているレイラ様の布団を勢いよく剥ぎ取ります。

「起きて……ください！」

「ひゃうっ!？」

布団を剥ぎ取った瞬間、レイラ様は驚いた様子で跳ね起きました。辺りを見回し私を見つけると納得した表情をしながらも少しジト目で私を見つめます。

「いつも思っんですけど、もう少し優しく起こすことは出来ませんか？」

「初めはちゃんと声を掛けたり揺さぶったりしてますよ？ それでもレイラ様が起きないのが悪いんです」

「むう……」

そう睨んだって変わりませんよ。

「ほら、もう少しで朝食ですから着替えてください」

「わかりましたよ……」

むう、と言いながら着替えてくださる。

レイラ様は私にいつも文句は言っがそれはじゃれあいみたいなものです。

私は着替え終わったレイラ様の髪を梳くために、櫛を用意します。

レイラ様の髪は櫛などで梳かなくても、枝毛などなく綺麗なままなのですが、

「アイリさ〜ん、髪の手梳いてください」

「かしこまりました」

こうしていつも頼んでくる。

まあ髪は女の命ですし、私もレイラ様の髪を梳くのが好きですからいいですけど。

「そういえば一也様はまだ眠ってるんですか？」

「そうでしたっ！」

「へうっ!？」

いきなり大声を挙げた私に対してレイラ様は驚いた様子。

「これを見てください！」

「……何ですか、これ？」

私は部屋に置いてあった、一也様の手紙を渡します。

「どうやら一也様が書いた、もしくは誰かに書いてもらったであろう手紙です」

でも私は一也様本人が書いたであろうと予測します。

だって他の人が書いたのなら文字があんなに稚拙ではなく、綺麗な字で書くでしょうから。

本当に凄い御人です。

私は改めて一也様の凄さを知りました。

「……………」

アイリ様はそんな手紙を無言で読み進めていきます。
最後まで読み切り、もう一度最初から読み直す。
そんな作業が数回あり、やっと私に手紙を手渡しました。

「……一也様と朝食を一緒に取れません」

第一声がそれ。

「まあ昼食は取れそうですからちよつとした辛抱ではないでしょうか」

「アイリさんは昨日一也さんと一緒に朝食を取りましたよね？」
「うっ……………」

昨日は一也様の鍛錬を御一緒した時に朝食を取りました。
あの時は確かにレイラ様も居なくて、至福の時でした。

「そ、それは……………」
「うっ、ずるいですっ!」

そんなことを言われても困ります。
そう思いつつも、昨日の光景が蘇ってきて顔がにやけてしまいま
す。

「うっ、そんな顔して……………」

レイラ様が呻きますが私は気にしません。
レイラ様から私にライバル宣言をしてきましたから。私だって手
を抜きません。

そんなことを思っていると、急にレイラ様の顔がにやけます。

「どうしたんですか？」

「えへへ……え？ な、何でもありませんよっ？」

「そんな顔で何でもありませんと言われても信用出来ません」

「うつ……」

「さあ、早く白状した方が身のためですよ？」

私はレイラ様に一步一步近づいていきます。

「わ、わかりました！ 言いますから！ 近づかないでください！

何か怖いです！」

「じゃあどうぞ」

「うつ……えつとですね、その手紙があるじゃないですか」

「？ ありますね」

手紙……ですか？

これに何か関係するんでしょうか。

「その文字です。それは完全に一也さんの文字です」

「……まあだいたい予測出来ますけど。何で確信でッ!？」

ま、まさか！

「そのまさかですっ！ 一也さんに文字を教えるのは、何を隠そうこの私なのです！」

「何て事を……」

いつか私が教えて差し上げようと思っていたのに、先を越されてしまいました……

「密室で、しかも二人だけの授業でした」
「うー……」

今度は私が呻き声を上げる番でした。
ずるいっ！ 私もそんな甘々な時間を過ごしたかったです！

「体がくつつくぐらいの近さで文字を教える喜びと言ったらもうっ
！」

「……私も教えて差し上げたかった」

「……でも一也さんは天才でしたからすぐに教えることがなくなり
ましたけどね」

いきなり暗くなるレイラ様。

ですが、やはりそこでも能力を如何なく発揮するんですね。

「ま、まあ仕方ないんじゃないですか？ あの人は天才ですし」

「それはわかってましたけど、やっぱりもう少し教えたかったです
……」

ここで天才すぎるという問題が出てきました。

……あの人に出来ないことはないんでしょうか。

「私も予想外でした。数時間で理解されるとは思ってませんでした
し……」

「……その話はもう止めにして朝食を食べに行きましょう。そうで
なければ私達が惨めです……」

「そうですね……」

私達は部屋から出て、王様達が待つ部屋へと足を進めます。

……一也様が帰ってきたら何かおいしいものを作って差し上げましょう。

私はそんな事を思いながらレイラ様と歩いていきます。

少女と少年の勉強会

「なあレイラ」

「なんです？」

夕食が終わり、今から自室に帰ろうとしたところを一也さんが引きとめます。

私は部屋に戻ろうとするのを一旦止め、一也さんの方に向き直ります。

珍しいですね。いつもは反対で、私が一也さんを引き留める側だと言っのに。何か用事でもあるんでしょうか。

「今から少し時間あるか？」

「時間：ですか？ まあ今日やらなくてはいけないことは終わっているのですけど」

どうやら私に用事があるようで間違いないようです。
何でしょうか。何かありましたっけ？

「そっか。なら一つ頼みごとを聞いてくれないか？」

「頼みごとですか？」

本当に珍しいです。

まだ一也さんと出会ってから数日しか経っていませんが、人に頼みごとをするような性格には思えませんでした。

どちらかというと、どんな事も自分一人で解決するような、そんな性格だと思ってました。それに頼みごとをするなら私じゃなくてアイリさんにすると思っていましたし。

「私が出来ることならぜひ！」

でもそのおかげで一也さんの手伝いが出来ます！

一也さんに頼られるなんて、ホント幸せです！

「それで頼みって何ですか？」

私は抑えられない気持ちを胸に、一也さんに問いかけます。

そんな私を見て一也さんは苦笑しますが気にしません。

「俺ってこの世界の文字の読み書きが出来ないだろ？ だから教えて欲しいんだが……」

そういえば一也さんはこの世界に来てから、そういう一般教養のことは教えてませんでしたね。

それにしても、文字……ですか。

「それくらいならお安いご用です！」

ということとは、部屋で二人っきりで勉強出来るということですね！？

これはチャンスですか！？

二人しかいないということはあんなことやこんなことや……！

「おゝい、レイラ……聞ってるのか？」

「ハッ！？ す、すいません……／／／／」

あまりに幸せだったのでトんでました……／／／／
恥ずかしいです……

「そ、それなら早速勉強しますか？」

「ああ。出来るだけ早く文字の読み書きは出来た方がいいしな」
「わかりました。なら私の部屋で勉強しましょうか」

さりげなく……

「わかった」

ヤッタ！

「それなら勉強道具を取ってくるので少しだけ待っていてください」

「ここで待ってればいいのか？」

「はい！」

「わかったよ」

「それでは行ってきます！」

一也さんは私を苦笑した顔で見つめますが気にしません。

初めて二人で何かするんです！ ドキドキが止まるわけがある筈
がないじゃないですか！

「ここが私の部屋です」

初めて異性を私の部屋に自分から招きます。

今まで異性は苦手だったので、初めての試みです。

おかしくないでしょうか……？

少しの期待と大半の不安を胸に抱きながら、一也さんを部屋の中に招き入れます。部屋は綺麗に片付いていて、女の子らしくぬいぐるみなんかも置いてます。色調は明るい色で統一されていて、どこか安心出来る雰囲気が醸し出されています。

「へえ……いい部屋だな」

「あ、ありがとうございます／＼／＼」

褒められました！

好きな人に褒められるのは、こつも幸せになれるんでしょうか。

「それじゃ始めましょうか」

「おう」

私はそんな幸福を胸の内に秘め、一也さんをイスに座らせます。もちろん私はその隣に座ります。一也さんは少しだけ驚きましたが、すぐに平常に戻りました。

もう少しドギマギしてもいいと思うんですけど……

私はそう思いながら、先ほどとってきた本を取りだします。

「それでこれがこの世界の共通言語の本になります」

「これが？」

私が手渡すのは、一般家庭でも使われるほどの出来のいい教科書です。

主に使用対象者は子供なんですけどね。
まあ気にしません。

「ふん……」

一也さんはペラペラと本を捲っていきます。

「基本は30の文字を使って意味のある文字を作ります。それを組み合わせることで文になります」

「なるほど……」

「わかりますか？」

そういえば一也さんは頭はいいんしょうか？

武術や魔法は天才という言葉では片づけられませんが、こつこつ教養の方はどうなのでしょう。

「ん、大体……。レイラ、単語が載ってる本はないか？」

「これです」

私はすぐに一也さんに本を手渡します。

一也さんはそれを真剣に眺めていきます。
かつこいいです……／＼／＼

そんな横顔を見ながら時間が過ぎていきます。そして一時間が経ったくらいに、

「レイラ、何か書くものはあるか？」

「はい」

また一也さんが言うので、またもや手渡します。

そうすると、一也さんは紙に文字を書き込んでいきます。

「えっと、文の体系はほとんど英語と同じで主語述語の順番で――」

英語って何でしょうか。

一也さんがいた世界の言語でしょうか。

「んで違うところが目的語補語じゃなくて補語目的語の順番だけと――」

そつえば一也さんが居た世界のことを聞いたことがありますね。

一度は聞いてみたいですけど……あまりその話題を話したくありません。なんたつて、私達が無理やりこの世界に呼んでしまったから。それなのに元居た世界のことを聞くなんてことは出来ません。

「大体わかったから一度なにかの文を書いてみるか――」

せめて一也さんが話してくれるまで気長に待ちましょう。あの人は厳しい人ですけど、それ以上に優しい人ですから。

「レイラ、この文の書き方で合ってるか？」

「どれですか？」

どうやら一也さんは文を書いたようです。

それにしてもまだ一時間くらいしか経ってませんよ？

「えーっと、『私の名前は一也 御薙です』……。大丈夫です。というよりも完璧です」

「こういう書き方でいいのか……」

どうやらこっち方面でも天才のようでした。
文字はまだまだでしたけど、文の立て方は完璧です。

「後は単語の暗記か……」

そう言っ、また単語が載っている本を黙々と読んでいきます。
その表情は真剣で、どこか楽しそうな雰囲気があります。

「どうしたんですか？」

そんな表情を不思議に思っ、て私は尋ねます。

「ん？ いや、知らないことを知るの楽しいと思っ、てな……。や
っぱり、人間は知を欲する生き物だと再確認したな」

「そうなんですか？」

「ああ。俺の居た世界の偉人が言い残した言葉だ」

その言葉を皮切りに、また沈黙が続きます。
部屋に響くのは一也さんが捲る本の音だけ。それでも心地いい響
きとなっ、て音を奏でます。

「こんなもん……か」

パタン、と音を立て、一也さんが本を閉じます。
どうやらもう数時間も経っ、ていたようです。
気付きませんでした……

幸せな時間は過ぎるのが早いと聞きますが、ここまで早く感じる
とは驚きです。

「そろそろ就寝の時間だし戻ることにするか」

「そうですか？」

「ああ。それに寝るのが遅いのは美容の天敵だぞ？　せつかく綺麗な顔をしてるんだ。そういうことにも気を使った方がいいと思うぞ？」

「あう……／＼／＼」

綺麗って言われました！

うれしいですけど、恥ずかしいです／＼／

「そ、それならもう寝ることにしましゅ！」

囁んじやった／＼／

「クククッ、それがいい。んじやおやすみ」

「あう……、おやすみなさい／＼／」

笑われてしまいました。

恥ずかしいです／＼／

そう言つて一也さんは部屋から出ていきました。

そして部屋に残るのは私だけ。私はベットに飛びこむと、

「今日は幸せでした……」

どうやら思った以上に緊張していたのでしょうか。
すぐに瞼が落ちてきて、

「おやすみなさい……一也さん」

眠りにつきました。

そして今日一也さんに教えた成果はすぐに実ることを私は知りませんでした。

11・5 少女達の日常（後書き）

明日はちゃんと投稿出来るといいな。

今回は閑話だったから文字数も少なめだったし。

早く学園編に行きたいぜ。

けど最近ネタ切れなんだな。

12・クエストの報酬（前書き）

やっと本編が再開だぜ！

12・クエストの報酬

「それにしても手酷くやられたな……」

ゴフツ、と言葉とともに口から血が吐き出される。完全に内臓がやられたらしい。止めどなく血が口から溢れ出て来る。体を触った感触では骨が6本くらいは粉々だ。

「このまま帰ったら絶叫されるのがオチだよな……」

城に帰ればレイラとアイリさんが。ギルドに帰ってもサレスさんが大声で叫ぶだろう。

まあどんな人間でもこんな姿を見れば叫ぶだろうが。

「どうしたものか……」

魔法で治すか……？

それでも別にいいんだが、イメージがなあ……

何かの回復系統の魔法をイメージする。が、なかなか出てこない。

「攻撃系統はすぐに思い付くんだが……」

むう、何かいいものはないか……

回復回復――

「――あれがあつたな」

こつちに来る直前に発売して、攻略したF。13。
その代表的な回復魔法で大丈夫だろう。

「イメージはつと……」

ん、系統は……光か？

イメージとして体が淡く発光する感じで。

効力がダメージの完全回復。こんなもんか……

「よし、行くぞ！ “ケアルガ”！」

……成功みたいだな。

言葉とともに発動し、イメージ通りに体が淡く発光する。

その光に体が包まれると、体が軽くなり、痛みが引く。

「さて、骨はどうか……？」

手で触れてみると、完璧に治っている。どうやら成功のようだ。

「凄い回復力だな……」

内臓の方モチェックするため、一度気を体に張り巡らせる。

張り巡らせた時どこかに損傷があれば、スムーズにいかなくなる。

しかしそんなこともなくスムーズに気が全身を駆け巡る。

……こつちも完全回復つと。

どちらも完全に回復したらしいので、俺は次の行動に移り、倒れ伏しているジエネシクウルフの死体の前まで歩み寄る。

「えつと、牙が討伐の証だつたよな……」

討伐の証が必要ということなので、俺は口を開いて牙を刀で斬る。スッ、と豆腐を斬るみたいな感触とともに牙は地面に転がり落ち

る。

「いつも思うが、この刀の切れ味はおかしいよな……」

そんなことを気にしながら俺は残った本体をどうしようか考える。毛は売れば高価な値段がつくらしいが、俺にうまく剥ぎ取れるか分からない。他の部位も同様。

「なんか保存する魔法……」

とりあえず、困った時は魔法を考えよう。

基本的に俺の魔法はイメージがあれば発動するから大丈夫の筈だ。

「保存または圧縮系統かな……」

ん、圧縮系統はよく聞くけど、実際のイメージがつきにくいな。なんか小さくするのはわかるんだが、その後どうやってもとに戻すんだ？ それに圧縮したら重さって変わるもんなのか？

……わからん。

……なら保存か？

「保存って言ったら影に保存するとか空間に穴を開けるのが有名所か……」

ふむ……

だが影に保存って具体的にどんな感じなんだ？

……わかりやすい空間に穴を開けるか。

イメージは、そうだな……空間に穴を開けて四次元空間に繋げる感じで。

効果は、物の永久保存や時間という概念の無視でいいか。

「んじゃ行くぞ！ “次元空間”！」

出てきたのはどこまでも続いている黒い穴。

一度手を入れてみるが、何もない。

……これは成功なのか？

とりあえずそこらへんにあつた岩を投げ入れてみる。

……スッポリと入って消えていった。

「んじゃ一回閉じる、っと」

俺はその魔法を一回止める。そして再度イメージ。

「“次元空間”！」

やはり出てくる黒い穴。

俺はそこに手を入れ、先ほど投げ入れた岩を手元に来るように念じる。すると、

「成功か……」

先ほど投げ入れた岩はちゃんと俺の手元に戻って来た。これでこの魔法も成功というわけだ。なら、

「このデカブツも入れておくか……」

俺はジェネシックウルフの死体と牙をその空間に放り投げる。

他にも入れるものはないかと探したがなかったので魔法を停止する。

「こんなもんか……んじゃ帰るか」

帰りは来た時よりもスピードを落として帰っていく。
これで依頼達成だ。なかなか楽しかったな……

——そんな少年は忘れている。

先ほど使った魔法は“精霊魔法”だということを。

——そんな少年は考えてもいなかった。

自分が神の領域に足を踏み入れたことを。

——そんな少年は思ってもいなかった。

自分が人間という枠から少しづつ離れているということ。

帰りは二時間くらい経っただろうか。
それくらいでギルド前まで辿り着いた。

「まだお昼にはなっていないな……」

空を見上げると、太陽はまだ真上ではなく、少し傾いたくらいだった。

これならまだ大丈夫と確信し、ギルドの中へ入っていく。

「え」と……」

中に入って辺りを見渡すと大勢の人。この時間帯は比較的混むようだ。

サレスさんは、と……

少しだけ注視して見ていくとすぐに発見出来た。
それに伴って近づいていく。

「戻りましたよ、サレスさん」

「一也くんっ!？」

……何故か驚かれた。

そんなに驚かなくてもいいと思うんだが。

そんなことを思いつつも、俺は依頼達成のための牙を提示しようとする。

「怪我はなかったですか!? というより無事だったんですね!？」

「あの……」

何故か錯乱しているサレスさん。

無事だったって……

あなたがこの依頼を持って来たんでしょ……

「まあ骨や内臓を少しやられましたけど、ちゃんと回復しましたら大丈夫です」

「骨や内臓って!？」

むう……

なかなか収まらないな。

「とりあえず一回深呼吸しましょうか。はい、吸ってえー」

「？」

「吸ってえー」

「スウーーーーッ」

「吐いてえー」

「ハアーーーーッ」

「落ち着きました？」

「ええ、もう大丈夫です」

どうやら落ち着いたようだ。

昨日や今日の朝みたサレスさんに戻っていた。

「本当に怪我は大丈夫なんですか？」

「はい。完璧に回復したから大丈夫です」

俺は大丈夫だということをこれでもかとアピールする。

……そうでもしなかったら納得しなさそうだし。

「……それで討伐の方は？」

「そちらも大丈夫です。まあなかなか強かったですけど」

本当に予想外だった。

魔法を使うとは事前に知っていたが、光の屈折まで使ってたとは思ってもいなかった。

「討伐の証はこちらです」

俺は“次元空間”を発動し、中にある牙を取りだす。
しかし、その魔法を見たサレスさんは驚き声を上げる。

「な、何なんですかその魔法は!？」

「えーっと……そうですね、俺のオリジナル魔法ですかね」

正直こう言う他ない。これ以外の言葉は思い付かなかった。

「オリジナル魔法って………現代でオリジナル魔法を創れるのはクレウイス様クラスでしか無理なのに……」
「どうしたんですか？」

何か呟いているが、あいにく俺の耳には届かなかった。
気で強化すれば音は拾えるが、わざわざそこまでして聞きたいとは思わない。

「と、ごめんなさいね。確かにジェネシックスウルフの牙を受け取りました。報酬のお金はどうしますか？」

小声で俺に聞いてくる。
どうやらあまり俺が目立ちたくないことを理解してくれているようだ。

「そうですね。俺にはさつき使った魔法があるんで、今渡して貰っても全然大丈夫です」

「そうですか？　ならこっちに来てください」

俺はサレスが手で招いている方に近づく。

そこはギルドの奥にある部屋で、いろいろな物が置かれている。

「ここは？」

「軽い物置です。金庫とかもここに置いてますけど、ほとんど使用されてないから勝手に私室なんかも作ってます」

勝手に……

そんなことしていいのか？

そんな感想を胸に秘めながらも歩いていくと、一つの部屋でサレスさんが立ち止まる。その部屋を開けると、強固なものであろう金庫のような物体が眼に入る。

「少し待っててくださいね」

そう言っただけでサレスさんはその部屋の中に入り、扉を閉める。俺は帰ってくるまで暇になったので、今日の午後のことを考える。

このお金でアイリさんとレイラの服とかを買ってやるかな……

そっか俺の服もついでに買わないといけないな。後は……

考えているうちに、サレスさんは戻って来たようだ。手には大きな袋を両手に持ち、ゆっくりと歩いてくる。

「大丈夫ですか？」

俺は慌てて駆け寄り、袋の一つを受け取る。
ズシン、という重さが手に伝わる。

なかなか重いな……

中身は金貨だからだろうか。やはり一枚一枚がなかなかの重さとなっている。

「この二つの袋で金貨500枚になっています。確認は？」

「別にいいですよ」

俺はもう一つの方の袋も受け取る。

何か小さな袋が必要だな……

「あら、もしかしたら私が嘘をついているかも知れないですよ？」

サレスさんが笑いながらそう言うけれど、俺はそんなことは思わない。

「サレスさんはそんなことしないでしょ？」

真っ直ぐとサレスさんを見つめる。

人の眼を見ると、大体の性格は分かる。その人の眼が澄んで綺麗だったら誠実な人物だし、濁っていたら悪事を働く人物というように。

「ッ！ はあ、完敗です……」

サレスさんは溜息を吐きながら苦笑する。

そんな溜息を吐かなくても……

「あなたはそう人柄なんですね」

「人柄って……ただ思ったことを言っただけですよ？」

「フフッ、まあいいです。ほら、待たせてる人がいるんでしょ？」

行つてあげなさい」

おっと！

そう言えばもうすぐ昼食の時間だったな。

「そうでしたね。それではまた来ますね」

「ええ。……あ、ちょっと待ってください！」

「何です？」

俺はもと来た方向に歩きだそうとしたところを呼び止められる。

「ギルドカードを貸して？　今回はSSSランクのクエストだったから1ランクアップさせなくちゃ」

「そうでしたっけ？」

俺はギルドカードを手渡す。

そうすると、サレスさんは何かの宝石をカードに掲げた。すると、ギルドカードは綺麗なピンク色に発光する。

「教えるのを忘れていましたけど、SSSランクのクエストを成功させた場合は絶対に1ランク上がりますからね」

「そうなんですか？」

ということは、後2回SSSランクを成功させたらランクアップということか。

「まあSSSランクのクエストなんて滅多にないんですけどね」

サレスさんは苦笑しながら奥の部屋に戻っていく。
今度はすぐに俺の下に戻って来た。

「はい、これ」

「ありがとうございます」

縁が水色になったSランクを証明するギルドカードを受け取る。

「それじゃ今度こそお別れ。また機会があれば来てくださいね?」

「わかってますよ。それじゃ」

今度こそ俺はもと来た道を戻り、ギルドから外に出る。

外に出ると、太陽も真上に上がっていた。

こりゃ、急いで帰らなくちゃな……

俺は怒るレイラやアイリさんの顔を想像しながら、町を駆けていく。町は相変わらず賑わっていた。

side サレス

本当に“色王”を討伐するなんて……

私は心底驚いた。

いくらなんでもやり過ぎたと思ったのに、初めとなんら変わらない姿でここに帰って来たのだから。しかもオリジナル魔法というものを添加して。

オリジナル魔法——現在の四賢者くらししか、しかも四賢者であつてもそう簡単に創れないものをあの少年はやすやす創り出した。しかも、今まで誰もが考え、誰もが断念した収納魔法。響きは聞こえ悪いが、使えればこれほど便利なものはない。理論的には収納限界がなく、中に入れた物は生物であつても腐らないという生活す

るためにはとても便利な魔法。

それをあの少年はあの歳で創り上げてしまった。

今度クレウイス様に聞いてみないと……

最早あの少年に聞くことは出来ない。

初めはあの少年に聞くつもりだったが、今となつてはクレウイス様に聞いた方が的確な返事が返ってくるだろう。

それにあの少年が自分のことを理解していないかもしれない。

あの歳での才能。

正直な話、化け物と呼ばれる可能性だつてある。

なんて言つたつて、あの歳でいくらか成体になつていないとは言え
“色王”の一角を倒してしまったのだから。

今はどれくらいいるだろうか。

“色王”と単身で殺り合つて打ち勝つ人物なんて。

多分10人と少ししかないだろう。その中での若さの人間な
んていない。

一番若くても、最近“海帝”が入れ替わり入つたジェイン・ウル
バス・ランフォードさんの28歳だつた筈。

それ以上に若いあの少年は何ものなんだろうか。

名前は確か――

「――一也 御薙と言いましたね」

覚えておこつ。

もしかすると彼はこの世界で何かを引き起こしてくれるかも知れ
ない。

単身で“色王”を破り、夢だつた収納魔法を創り上げた天才。

「これからおもしろくなりそうです……」

side out

12・クエストの報酬（後書き）

次は本編だけど、正直必要かどうか迷う話だな……
ま、レイラやアイリの可愛いところが見たいが為に書くんだが（笑）

13・三人でお買いもの（前書き）

お久しぶりです。

スランプから抜け出せた（かも知れない）私が帰ってきましたw
そう言えば、何時の間にかにPV数400,000とユニーク数50,000を越していましたww

本当にこんな妄想作品を読んでいただいて感謝をいくらしても足りない気持ちです。

学園にさえ入ればいくらかでも記念作品を書けると言うのに……

現状じゃ少し厳しいですし。

ま、またこんな感じで進んでいくと思うんで、応援再度よろしくお願いします。

PS・春休みの宿題やらなくちゃ（笑）

13・三人でお買い物

「さて、レイラとアイリさんが怒ってなきゃいいんだけど……」

やっと城に辿り着いた俺は昼食を取る為に大広間に足を進める。
その途中、一度レイラやアイリさんの部屋に寄ろうかと思ったが、
まあ大広間にいるだろうと思い、直で向かう。

「ただいま」

大広間に入ると同時に声を上げる。
中を見るとやはりレイラとアイリさんはイスに座っていた。

「一也さんっ！」

「一也様っ！」

「うおっ!？」

いきなり二人が突っ込んでくる。

避けようと思ったが、俺の中の何かが避けるのを拒みそのまま二人に突進される。

ちよ、死ぬって……

俺は呻き声を上げながらも、その突進を堪える。

「一也さんどこいったんですかっ!？」

「いや、手紙に書いたよね、俺？」

レイラに習った？文字で手紙を書いて俺の部屋に置いておいた筈だ。アイリさんは朝一番に俺を起こしに来るからそれを発見してると思うんだが。

……もしかして見てない？

「見ましたけど！ それでも口で直接言ってくれたらいいじゃないですか！」

「いや、まだ朝の早い時間だったし？」

まだ日が出るか出ないかぐらいの時間に城から出たわけだよ？
アイリさんはともかく、レイラは起きていないだろ？

「それでも教えて欲しかったです！」

「んな無茶な……」

普通に考えて、日がまだ出てない時間に部屋に行くなんておかしいだろ？

それに男が女の子に部屋に行くのもなあ……

「まあそれはいいではないですか。ちゃんと帰ってきてくださったことですし」

「アイリさん……」

「アイリさんもただいま」

「おかえりなさいませ、一也様」

そうやって大人の対応をしてくれるのはうれしいんだけど、突進したから関係ないけどな……

「それでどんなクエストを受けてきたのですか？ 昼食を取りながら聞かせてください」

「そうだな」

そうして俺はやっとイスに座る。俺の前にレイラ。アイリさんは

俺の横に佇んでいる。

「アイリさんも座れば？」

昨日からずっとこの立ち位置だ。一緒に食べればいいのに。

「いえ、私はもう頂きましたので……」
「むう……」

やはりアイリさんはなかなか強情だ。もう少し軟らかくてもいいんだがな。

「まあとりあえずは昼食を取るかね」
「そうですね」

俺とレイラは運ばれてくる昼食に手をつけていく。
少し食べたところで、俺は今日受けてきたクエストの話を切り出すことにした。

「今日受けてきたクエストは“色王”の討伐だったな」
「「ぶっ!？」」
「おいおい……」

いくらなんでも女の子が噴出したら駄目だろ。
アイリさんも大人の女性なんだから……

「「ごほごほ……」」
「どうぞ、水です」
「あ、ありがとうございます、アイリさん」

アイリさんはすぐに立ち直るとレイラに水を渡す。レイラも渡された水をすぐに飲み干す。

「ゴクゴクゴク……ふう〜」

「落ち着きましたか？」

「はい……ってどういことですか!？」

「ん？」

俺はそんな光景はスルーし、昼食を食べてたらレイラに怒られた。どうしたんだ？

「“色王”って、何でそんな最強種と戦ってるんですか!？」

「それは私も思います」

「ん〜？ 何かランクが高くて手早く終わるのないか？ って聞いたら出てきた」

俺は事もなく食べながら話す。

まあなかなか強かったけど、それほど問題はなかったし？

「怪我はなかったんですか？」

「怪我？」

アイリさんは俺が怪我をしていないか心配のようだ。

それも大丈夫。ちゃんと完治したし。

「骨を数本と内臓をやられたくらいだな」

「くらいって……!？」

アイリさんは俺の方へ駆けよってくるが、俺は手を向けて制止させる。

「ちゃんと魔法で治療したから大丈夫だ」

「……本当ですか？」

「俺の魔法は知ってるだろ？」

最早無茶苦茶な俺の魔法だ。

アイリさんも出来ることぐらい予想出来るだろう。

「まあ確かに強かったけど成体じゃなかったし、対処出来ないレベルじゃなかったよ」

「……本当に規格外ですね」

「酷い……」

昼食をもくもくと食べながら、昼はどうするのかレイラとアイリさんに聞いてみる。

とりあえずお金の心配はなくなったから、他の心配について考える。が、特に思い付かない。

「二人は昼から何か用事あるか？」

「私は別に」

「私の方ありません」

「そっか。なら買い物に付き合ってくれない？」

やっぱり贈り物って言うくらいだから買ってあげるなんて言葉は口にしない方がいいだろう。そう思い、俺自身の物を買に行くと言うニュアンスで二人に伝える。

「私は大丈夫です」

「かしこまりました」

「んじゃご飯食べたらず速行くか」

「こうやって店を巡るのは初めてだな」

こっちの世界に訪れて数日。初めて俺は買い物をする。

周りは昼も少し過ぎ、ゆったりとした趣きを醸し出していた。

「そう言えばそうでしたね」

「ま、時間もあるしゆっくり回ってみるか」

アイリさんはメイド服——ではなく、レイラから服を貸してもらったようだ。

少し身長差があり、レイラなら足元まである長さのスカートが、膝と足元の半分くらいの場所になっている。

レイラは淡い青を基調とした服装で、アイリさんは白と黒を基調とした、大人っぽい服装だ。

二人は絶世に美女なので、町の男性の眼を釘付け。おかげでさっきから嫉妬と羨望とが入り混じった視線が突き刺さる。

「ゆっくり回るのは撤回で早く目的を達成させよう」

これじゃ胃に穴が開く……

予想外にも程がある、と俺は心で毒づく。

確かに二人は美女だ。それは俺も認めよう。それでもこれは酷い。何で歩いてるだけで、「死んでしまえ……」だの「呪い殺してやる……」だの言われなくちゃなんのだ。

「そう言えば一也さん、今日は何を買いに来たんですか？」
「そついや伝えてなかったつけ。今日は主に服の調達だな」

二人のな、と心の中で付け加える。

「では服屋が多い場所にご案内します」

「私服は持っていないのに場所だけは知ってんのな」

「……………」

「……ごめん」

失言だったみたいだ。

「さ、さぁ行きましょう！」

「そつだな」

「……………」

無言のままのアイリさんに連れられ、俺達は街中を歩いていく。

「ホント謝るから機嫌直してくれよ……」

誠心誠意、真心を込めて謝る。

レイラも苦笑いでそれを眺める。

「……はあ。別に怒っていませんよ。少し意地悪しただけです」

「そつか……ま、ホントごめんな」

ポン、と手のひらをアイリさんの頭に乗せる。

俗に言う撫でるという行為。自分より年上の人にやるのは躊躇する行為だが、気にしない。

「あっ……」

声が零れる。

それは拒絶ではなく、いきなりの行為に戸惑う声。

「あ、嫌だった？」

「……いえ」

「むう」

とりあえず嫌がられてる雰囲気はないしこのまま続けておこう。
レイラが何か不満そうだがどうしたんだろうか。

「あ、ここが服屋です」

「ん、ありがとう」

「あっ……」

服屋に着いたということなので、俺はアイリさんの頭から手を離す。

また声が零れたようだが、気のせいだろう。

「で、早速で悪いんだけど二人には俺に似合う服を選んで欲しいだが……頼めるか？」

「……へっ？」

予期せず言葉に戸惑う二人。

でもそうでもしてくれないと、俺が二人に似合う服をバレないように探せないし。

「いやだってさ、俺こっちの世界の服とかわかんないし」

「「ああ！」」

そうでしたね、と呟く。

そんな二人を眺めながら、俺は女性物の服に目をやる。

……そこまで元いた世界と違うような服はおいてないな。

そうすると元居た世界と同様に服を選べばいいのだが……

「俺ってセンスないし、女物の服なんか選んだことないだがな……」

……」

思わずぼやく。

一瞬、今の言葉を聞かれたかと思ったが聞こえてなかったようだ。二人は俺の言葉を信じたようで、真剣に服を見て選んでくれている。

「それじゃ頼んだぞ？俺も見えて回ってくるから、1時間くらい経

ったら呼んでくれ。お金の心配はないからいくらでも大丈夫だ」

「わかりました」

「かしこまりました」

そうして俺達三人は服屋の中を散りじりになって別れる。

さて、俺も頑張って選んでみますか。

「ん、わからん……」

別れてから10分くらい、早速俺は悩んでいた。

「どんな感じがいいんだ？」

こっちの流行りなどはまったくわからないし、アイリさんやレイラがどんな服を好んでいるなんかはもっとわからない。アイリさんに至っては私服を持っていないし……

「どうしよっかな……」

迷い、悩む。

うーん、と頭を悩ませながら店内を歩いていく。

そんな俺を見る店員は何故か微笑ましいような感じで俺を見る。何故？

「ん？」

すると、店の一角。

それも端の端に二つの服が置かれている。

誰かがボン、と置いた風で到底店の売り物には見えない。

「これは……」

そんな二つの服を俺は手に取る。

一つは純白。

適当に置かれていた割に手入れが行き届いていて、染み一つない白さを保っている。柄などは本当に少なく、胸元に少しのワンポイントを付けているのと、所どころに付いている以外は何も無い。

もう一つの方は鮮やかな空色をベースに白や琥珀色を混ぜたもの。こちらはさっきよりも柄が多く、明るい仕上げになっている。だが、柄が多いにも関わらず雰囲気は崩していない。

この二つをベースに考えるか。

俺はその二つの服にすると決め、手に取る。
それから二つの服に合うズボンを見ていく。上が決まれば下を決めるのは楽で、俺はすぐに選んだ。

そして俺は直ぐに店員に支払いを頼む。

レイラとアイリさんにはバレないようにタイミングを見計らって支払いを済ます。

「ミッションコンプリートってか？」

店員に入れて貰った袋を二つ持ち、二人を探す。

どうやら未だに二人は俺の服を吟味してくれているようだ。

まだ時間が掛かるようで、この時間をどうやって過ごすか悩む。
そんな中ふと外に目をやる。

そこには露天商が色々な物を売っているようだ。

「何かおもしろいものあるかな？」

俺は二人に声を掛け、外の露天商を見てくると伝える。

二人は服選びに真剣過ぎて、すぐさま返事を返してきた。

「そうまで頑張られるとちょっと困るんだけどな……」

苦笑いを浮かべながら、店内から外に出て露天商の下に行く。

「見ていつて構わないか？」

「どうぞどうぞ、見ていつてください」

店主は高齢の男性で、朗らかな笑いを浮かべてくる。

俺もそんな男性に釣られ笑いを浮かべる。

扱っている商品は色々とあるが、俺が眼に引いたものはやはりアクセサリーの部類だ。

手に取って眺めてみると、どのアクセサリーも質が高い。

その中に一つのアクセサリーを手に取る。銀細工のもので、両翼の間に蒼い宝石が付いている。どうやら取り外し可能なようで、片翼が二枚と宝石とに別れる。

「店主、これいくら？」

「お、見る目があるね。それは何でも有名な銀細工作りが作ったって言われてるんだけど、結局誰が作ったかわからずじまいで流れた一品なんだ」

「へえ……」

道理でいい作りになっている筈だ。

元の世界で買えば諭吉さん数枚は軽く飛ぶな。

「これ貰える？」

「金貨一枚——って言うところだけど、久しぶりに若い人にその商品を見つけて貰ったから銀貨50枚で売るよ」

銀貨50枚——って俺金貨しか持ってねえよ。

「金貨2枚払うから鎖を二本くれないか？」

俺は袋から金貨2枚を取り出す。

そんな様子に店主は一瞬茫然とした顔を浮かべるが、またもとの表情に戻った。

「別に金貨1枚でもいいですよ？ 鎖なんて安いもんですし。本当な

「ら鎖なんてタダで渡しますし」

「気にしなくていい、俺が払いたいただけだ」

金貨2枚を店主に渡す。

そうすると店主も諦めたのか、一度溜息を吐いてから俺を見る。

「久しぶりですね。あなたのような人物を見るのは」

「だろうな。ま、たまにはいいだろう？」

笑い合いながらのやり取り。

店主は何時の間にか鎖を出していた。

「では鎖二本と銀細工を」

「ありがとう」

俺は貰った時に銀細工を三つに分ける。
そしてそれぞれに鎖を着ける。

「贈り物ですか？」

「ああ。この世界で大切な人達だ」

13・三人でお買いもの（後書き）

これからちよくちよく更新していけたらいいと思っていますので、
感想などドシドシ送ってください！

では！

14・絆（前書き）

さて、最近また寒くなったと感じている作者です。
少し前など明らかに冬の温度に感じ、部屋で丸まって過ごしていました。

皆さんはどのようにお過ごしでしょうか。

今日で4月に入り、忙しいんではないでしょうか。

作者も今年は受験勉強などで時間が取られ、また更新が停滞気味になることが予想されます。

それでも頑張って完結を目指して頑張っていきたいと思います。

14・絆

「選び終わったか？」

俺は露天商からアクセサリー一式を包んでもらい終わった後、再度服屋に戻った。結構な時間も経ったので、そろそろ選び終わった筈だ。

「あ、一也さん」

「お、レイラ」

まず先に声を掛けてきたのはレイラだった。手にはいくつかの服やズボンを持っている。

「こんな感じでどうですか？」

手に持っていた服を俺に手渡す。

どうやら紅を基調とした上下となっている。

「へえ、やっぱりセンスがいいな」

「えへへ」

予想通り、レイラの服のセンスはあった。

俺なら適当に黒系統の服を選ぶし。

紅って一見派手に見えるが、レイラが選んだのはそこまで派手じゃなく、それでいて目立つ、所謂若い人に人気の服だった。

「とりあえずこれは確保っと」

「着てみないですか？」

「ん？ ま、大丈夫だろ。後で大きさだけ見るだけで問題なし。レイラのセンスを信用してるし」

「そ、そうですか」

少し顔を赤くして俯く。

俺はそんなレイラには気付かないでアイリさんを探していた。

「一也様」

「うおっ！？」

前方ばかりに集中していたので後ろからいきなり声を掛けられ吃驚する。

どうやら俺達の後ろに居たようだ。そりゃ見つかる訳ないか。

「決まった？」

「はい。こちらに」

そう言つてアイリさんが手渡すのは俺が考えていたのと同様、黒を基調とした服とズボン。だがこちらもセンスが良く、地味ではなく、カッコイイ系な感じになっている。

私服持つてないのにこのセンスとは……

内心で驚きつつ、声には出さない。もし声に出したらまた怒りだすだろうし。

「やっぱり二人に任せて正解だったみたいだな。二人ともセンスいいな」

「そうですか？」

「ああ。俺が選ぶより万倍良いよ」

そう言い残して、一応大きさのチェック。鏡で自分の体に服を当

てて見る。大きさも完璧で、誤差数cmという感じだった。

「んじゃお金払ってくるな」

「はい」

そう言いつつも、二人は俺に付いてくる。別に待っていてくれたらいいんだけどな。

外はそろそろ夕暮れ時。

辺りからは昼頃に見せていた趣きではなく、酒などを飲みながら今日一日の成果を讃えあうような、夜の活気を見せ始めている。

そんな中、俺達三人は街中を歩いていく。

誰も喋らない。嫌というわけでない。ただただこの時間が心地よ
いだけ。

ただそれだけ。

「……………」

俺の手には三つの袋。

二人が俺の為に選んでくれた服が二点と、俺が二人の為に選んだ服が一点。それに目を向け考える。

何時渡せばいいんだ……？

生憎と俺は女の子にプレゼントなど上げたことなど、生まれて此の方一度もない。

それなのにこれを渡せとは……

絶対に朝にやった色王討伐のクエストより遥かに難しいクエストだ。

「はぁ……」

「？　どうかしましたか？」

「いや……」

どうやら何時の間にかに溜息をついていたらしい。
左に居たアイリさんに拾われた。

ふむ……

ちやうど目の前にベンチが置かれている。
今のうちに渡しておくか。

思い立ったが吉日。すぐさま行動に移す。

「ちよつと二人とも止まってくれるか」

「はい？」

「どうかしましたか？」

二人は俺の方に振り向く。

俺はベンチのところに行き、荷物を下ろし二人を手招く。二人は素直に俺の下まで来てくれる。

さて……

どうやって渡す？　普通に渡すのか？　それとも何か声を掛ける？
そんな事を考えていたが、別になんでもいいや。

「これを二人に」

もう普通に渡そう！

プレゼントにそんなことを考える方が野暮だ！（多分）

そう思ったので、俺は袋から二つの服を二人に手渡す。
純白をアイリさんに。
紺碧をレイラに。

「これは……………」

「私達にですか……………」

二人とも茫然とした顔。

そこまで驚かなくても。苦笑しつつも俺は話す。

「そう、二人にプレゼントだ。二人に似合うと思って買った服だから大切に使ってほしい。それにアイリさんの初めての私服だ。これからはそういうのにも気を使ったほうがいいと思うぞ？ 折角綺麗なんだからな」

「わぁ……………」

「綺麗……………」

二人は手渡した服を見て感嘆とした息を漏らす。

「俺は服のセンスとかなないから似合うかわからんけどな」

一応似合わなかったら申し訳ないので一言言っておく。
でもそんなことを言わないでも問題なさそうだ。

二人は渡された服を自分の体に当てて見合っている。ここから見ている分、問題なく二人に似合っている。

「気に入ってくれた？」

「はい！」

「……………ありがとうございます」

レイラは嬉しそうに、アイリさんは恥ずかしそうに礼を述べてくれる。

どちらも心底から嬉しいようで、そんなに喜んでくれると俺まで嬉しくなってくる。

「フフフッ……」

何かアイリさんがトリップしてるように見える。

まあ初めての私服は嬉しいかも知れないけど、あそこまで喜ばれるとは予想外だった。

「えへへ……」

レイラも似たような感じで、顔をだらしくして微笑んでいる。

正直ちょっと怖い。

服を抱きしめて嬉しいのを表現してくれているようで、まあいいんだけど。

「お〜い」

「……ハッ／＼／＼」

一声掛けると元の状態に戻る。

そう嬉しそうにしてくれると嬉しいからいいけどさ。ここは外だからさ。一応人がいないけど、やっぱり恥ずかしいじゃん。

「本当にありがとうございます……」

「そんなに言わなくなたっていいって。もともとこの為買い物に来たんだし」

「え？」

あ……

「え〜と……」

「どういことですか？」

ズイツ、と身を寄せてくる。

レイラはそんな光景を見て何か納得していた。

「『ギルドで稼いだお金の最初の使い道』ってこの事だったんですね」

「聞こえてたの？」

「ええ」

ありゃ〜……

しょうがない、種明かしといきますか。

「ま、そう言う事。ギルドでお金稼いだのもアイリさんに服を買う——ま、もともとアイリさんの給金確保の為に稼ごうと思ってたんだが、おっさんが『給金は渡すから贈り物の一つでも送ってやれ』って言うからこうなったわけだ」

「なるほど……」

何か締まらない展開になっちゃったな。

「でも！」

どうしたんだろうかと思っている二人の顔が見える。
確におっさんに言われたからプレゼントを贈ったかも知れない。
それでも——

「――俺は二人にプレゼントして良かったと思ってる。二人のあんなに嬉しそうな顔を見て俺も嬉しかったし」

これが俺の本心。

たった服を贈るだけ。ただそれだけであんな笑顔を見せてくれる。そんな光景を見て、俺は本当に嬉しかった。

「あう……… / / / /」

「……… / / / /」

あれ？

二人とも顔が真っ赤になって動かなくなっただけですけど。

side レイラ

あの笑顔は反則です……

今さっき浮かべた一也さんの笑顔が頭にちらつきます。

あんな笑顔向けられて正気で保てる筈がありません。それを証拠に、アイリさんは顔を真っ赤にして動かなくなってますし、私も鏡がないので確認出来ませんが赤くなっていることでしょう。

一也さんはそんな私達を見て、あれ？とか、どうしたんだ？と首を傾げています。

何で一也さんは気付かないんでしょう。もしかしくても一也さんは鈍感ですね。

それも超弩級の。

はあ……

どうしたらこの気持ちに気付いてくれるのでしょうか。正直どんなことをしても一向に気付いて貰えない未来しか思い浮かびません。いえ！

こんな暗い考えでは駄目です。

どうにかして振り向いてもらわないと！

ライバルにはアイリさんがいますし、ルイス学園に行ったら絶対に増えること間違いなしでしょうから。

少しの間の現実逃避。そんな事を考える程、私は慌てているんでしょうね。

とりあえず落ち着かないと……

side out

「落ち着いたか？」

あれから数分。

二人とも顔を赤くして動かなくなっていた。いくら俺が声を掛けても反応がないので、少し心配だった。

「は、はい…… / / / /」

「すみません…… / / / /」

「少しどもってるのが気になるが…… まあいいや」

未だに顔の赤みは引いてないが、トリップ状態から戻っただけよしでしょう。

先ほど二人に渡した服も、再度袋に戻した。

「そっいゃ……」

買ったのはいいが、先ほどの服を渡すことに考えが行き過ぎてもう一つを忘れていた。

俺はポケットからそれを取りだす。

「それは？」

「綺麗……」

露天商で買った銀細工。白銀の両翼の間に包まれる蒼の宝玉。

「これが金貨2枚ぼちって言うんだから驚きだよな」

「金貨2枚!?」

そこまで高いものじゃないだろ？

正直、蒼の宝石だけでもそれくらいの値段は付くと思うんだけど。

「んでつと……」

俺はその銀細工を三つに分ける。片翼二枚と蒼の宝玉に。

二人はそんな銀細工に驚く。まあ気持ちはわからんでもないが。

「はい」

「えっと……」

「あの……」

俺は片翼を二人に手渡そうとする。

そんな様子にも二人も戸惑う。

「何で分けるんですか？」

そんな質問をレイラが掛けてくる。
アイリさんも同じような顔をしている。

「その銀細工は三つが繋がっていて完成でしょう？ それなのに何でわざわざ分けるんですか？」

「見る人によってはそう思うかも知れないけど——」

「——俺は三つに分けて共有した姿が本当の姿だと思うんだ」

｝side アイリ｝

先ほどの空気が一変、今度はしんみりとした空気が私達の間を吹き抜けていきます。

私達を見る一也様。その御顔はどこか寂しそうな雰囲気を持っています。

何か過去にあったのでしょうか……

それを知る術は私には持ち合わせていません。もちろん、隣にいるレイラ様も。

私達は一也様が何かを語ってくれる以外の術は何もありません。

それでも……

過去は人それぞれ。嬉しい事や楽しい事。中には悲しい事や哀しい事。

その中にも思い出たくないものだってあります。

私の中にも……

私の心の奥底、一番深く暗い場所が疼く。ざわざわと、吐きだせと。

一度思い出すといつもこうです。気持ち悪い……何かが蠢くような感じ。

それを堪える。いつものように。何もないように振舞う。

いつかバレるでしょうね……

こんな事もいつかバレるでしょう。幸いレイラ様は気付いていない様です。

ですが……

一也様は……

一也様は人の心の動きに敏感です。そんな人のメイドをしているんですから、バレるのも時間の問題でしょう。

その時になつて――

――貴方は私の事を嫌わないでくれますか？

side out

どうしたんだ？

レイラの方はさつきと似たような感じに呆けてるけど、アイリさんが……

何か辛い事を堪えてるような、苦しみに耐えてるようなそんな感じがする。

まあ見当違いかも知れないけど。

それでも頭の中にちらつく。一瞬だけ浮かべたあの表情。今はもう元に戻ったけど……

一度頭を振る。

何かの見間違いだろう。そう思う事で、今は納得しておく。

「だから二人には一つずつ受け取ってほしい。三人で一つの物が創れるって何かいいだろ？ 証明したいな感じで」

「そうですね……」

アイリさんは反応してくれる。

レイラは未だに反応なし。

「ということ……」

何か反応がないんで、ちよつくら勝手にいきます。

俺は片翼の銀細工に鎖を通し、レイラの首に掛ける。その瞬間レイラは「へう？」と言葉を漏らした。

「うん、やっぱり似合うな」

「へ？ へ！？」

「本当に似合ってますよ」

俺とアイリさんの賛辞。

レイラは未だに驚き、戸惑っている。

「さて、次はアイリさんの番ね」

「えっと、あの……？」

「どうかしたのか？」

「自分で掛けますので渡して貰えますか？」

そう言って手を差し出してくる。

けど、俺はその手を押し戻す。

「こういうのは人に掛けて貰うのが一番だろ」

「で、ですがっ！？」

「はいはい、じっとしててね」

無理やり手を押し戻す。

そして抵抗がなくなったところにゆっくりとアイリさんの首に掛けていく。

「こっちも綺麗だな」

「あ、ありがとうございます……／＼／＼」

「あ！ よく似合ってます！」

何時の間にかに復活していたレイラ。

でも本当に良く似合う。やっぱり美女には何でも似合うもんだな。

「さて、んじゃ俺も「お待ちください」ん？」

俺が残っている蒼の宝玉を首に賭けようとした所に待ったの声。

「どうかした？」

「私達だけ掛けられるというのは納得出来ません。ですので」

ズイツ、と手を差し出してくる。

ふむ……

「んじゃ頼もうかな。はい」

「かしこまりました」

俺は銀細工をアイリさんに手渡す。

それをレイラと一緒にになって俺の首に掛けてくれた。

「よくお似合いですよ」

「かつこいいです」

「ありがとう」

二人の美女に掛けられるのは恥ずかしい。

二人ともプロポーションもいいから軟らかいものが体に当たってたし、匂いもいい匂いだったし。

「ん？」

何か光った？

俺が見たものは見間違いではなく、完全に俺達三人が今しがた首に掛けた銀細工から光が零れている。その光はどんどん大きくなり辺り一面を照らし出す。それは幻想的であり、優しい光が包み込む。

「へえ……」

「これは……」

「うわぁ……」

二人は幻想的な空間に酔いしれている。

どうやらこの銀細工を造った人は相当の腕前の持ち主のようだ。しかもこの銀細工は魔法加工しているようで、先ほどから銀細工から魔力が仄かに漂っている。漂っている魔力は微かだが、銀細工に込められている魔力は中々大きく、お守り以上の役目を請け負ってくれそうだ。

「どうやらこの形が本来の姿のようだな」

俺は首に掛けている銀細工に目をやり、二人の銀細工にも目を向ける。

これを造った人はこういう使い方をしてほしかったんだろうな。

一人で使うんじゃないかって誰かと分かち合う。そんな風に着けてほしかったんだろう。

それを証拠に、俺達三人が別々に銀細工を着けるとそれを確認するかのようには光したし。

「ま、綺麗だし体にも問題ないみたいだし気にしなくて大丈夫だろ」

「そうですね」

「はい！」

時間が経つ度に発光の度合いは少なくなり、次第にもとに戻った。三人の首元に佇む三つの銀細工。それは三人の絆を証明する証になるだろうか。

「んじゃそろそろ城に戻るか。夕食の時間だろ？」

「もうそんな時間なんですな」

アイリさんは空を見上げる。

俺とレイラもつられて見上げる。一番星も輝き、もう少しで夕暮れから夜の星が輝きだす時間になる。

「あつという間に時間が経ちましたね」

「ああ。楽しい時間は早く過ぎるって言うしな」

「また……」

「ん？」

アイリさんが何か零す。

その言葉を俺は拾えなかったが、レイラは理解したようだ。

「そうですね、また……」

そして二人は口を揃える。

「「また一緒に来たいです」」

二人の笑顔は今日一番だった。

夕暮れをバックに、神秘的な雰囲気醸し出す。

「……ああ、そうだな」

俺はそんな姿に少し見惚れたが、すぐに返事を返した。

「また来ようか。いつか、また……」

14・絆（後書き）

そろそろ学園編が見えてきたかな？

もう少ししたら爺さん達とのバトルになります。

でもバトルでも数話使うからなあ……

4月中に学園編に行きたいけど……無理だな。

15・舊い（前書き）

今回は大分と時間が過ぎて、国のトップとの決闘の話になります。
正直、この話に至る話なんかは閑話で十分かな？ と思い、一気に飛ばしてしまいました。

まあ話的には何も問題ない筈なので、ごゆるりと読んでください。

15・誓い

「明日か……」

俺がこの世界に来てもう大分と経つ。

レイラとアイリさんの服を買いに行ってからもう十日。

明日は爺さん達との決闘の日。

「負けることはない……と思うが」

実際負けることはないだろう。

この世界に来てから身体能力も上昇し、魔法の扱いも反則。

この要因だけでも他の人達に負けることなどまずありえない。

「でも納得させれるかな？」

本当にやらなくてはいけないことは、勝つ事ではなく“救帝者廃止”を納得させること。

まあ勝つことも大事だが。

「頑張らなきゃな……」

そして目を閉じる。

そこに浮かびあがってくるのは、朝食中でのレイラとのやり取り、鍛錬の傍で控えて俺を見ていてくれるアイリさん。

“救帝者廃止”の為に奔放するおっさんや、庭園でお茶するハイネさんとリーネさん。

部下の指導をするリーク爺さんやキリクさん。

俺はそんな人達の為に……

自分を信頼してくれる人達の為に……

「絶対に……やり遂げて見せる」

早朝。

日が出て間もない時間。

そんな時間に俺は城の錬武場で立っていた。

「……………」

精神統一。

武術を扱う者なら絶対に通る修行法の一つである。

普通なら心を無にして何も考えないのだが、今日は違っていた。
錬武場の真ん中に立ち、ただただ集中する。

想像するのは今日のこと。

爺さん達と如何にして戦うか。

町の人達に如何にして納得させるか。

出来るのか？ ではない。

出来なくてはいけないのだ。

「一也様」

「………… アイリさんか」

俺は目を開け、目の前の人物を見る。

今日も今日とてメイド服に身を包み、俺の傍に控えてくれる人。

「そろそろ朝食の御時間です。それに今日は昼からが本番です。今から力んでいては疲れますよ?」

「これくらいなら問題ないんだけど、まあ朝食だし切り上げるか」

俺は最後に伸びをして体をほぐす。

ボキボキ、と景気のいい音が鳴って気持ちが良い。

「んじゃ行くか」

「畏まりました」

「おはよう」

「あ、おはようございます」

「おう」

食堂に辿り着くと、レイラとおっさんはもう席に着いていた。俺も席に座り、アイリさんは俺の傍に付く。

「爺さんは?」

「クレويسか? あいつなら今日は外で食べるだよ。他の連中も。今日の対戦者には一分の隙も見せないだよ」

「ふうん」

そこまで気にしなくても……

「それにしても大丈夫なんですか？」

「ん？」

「今日の決闘のことです」

レイラは心配そうな表情で俺を見てくる。
アイリさんも心なしか表情が硬い。

「まあやってみないとわからんな。三人とも俺から見ても最強の部類だし」

「それでも負けるつもりはないんだろ？」

「当たり前だろ？」

不敵に笑う俺に、他のレイラ達もほっとしたようだ。

「時刻は真昼を過ぎた時間、場所は錬武場。わかってるよな？」

「ああ。そういやレイラとアイリさんはどうするんだ？」

「私はお父様と同じ場所にいることになると思います」

「私はいつも貴方様の御傍に」

「そっか」

いつも通りの対応に安心する。

そう。俺もいつも通りにやれば大丈夫。

常に平常心を心がける。

世界のことなんて考えるから戸惑うんだ。

今は自分が出ることだけを考える。

「それじゃ昼まで時間を潰すか」

時刻は過ぎ去り、現在は昼を少し過ぎた頃。

城は一般開放が行われ、練武場には人が溢れている。

それもその筈、少し前の日にこんな御触れが町の至るところで発令された。

『来度の救帝者が現れた。そのお披露目と重大な発表がある。町の住人は必ず王城まで駆けつけるように』

まあもつと長つたらしく書いてあったけど、めんどいので少し省略。こんなことがあつたってことだけ理解してくれればいい。

「それにしても凄いな……」

眼下に広がる人、人、人。

ここがこの国の都とわかつてはいたが、これほどの人数がいるとは思っていなかった。

十万は下らないだろう。

下手すると、二十万——いや、三十万くらいいるかも知れない。

「準備はどうだ？」

「流石にこの人数は緊張するな……」

今は他の民衆からは見えない位置でおっさんと会話。

これからどのような感じで進行するのかとかを聞いている。

その横にレイラが居て、未だに不安そうに俺の服を掴んでいる。

「まず俺が最初に演説する。その後にお前に入ってもらって——」
「——俺が“救帝者廃止”を伝えるのか」

「ああ。それが終わったら三人との一対一の決闘だ」

「一也さん……」

「レイラ……」

俺はそつとレイラの頭に手を乗せる。

「あ……」

「心配するな。俺は絶対やり遂げて見せるし、絶対に死なないさ」
「でも……」

それでも心配なのか、目じりには涙が溜まり今にも泣きだしそうだ。
俺の服を握る力には一層力が込められる。

「これが終わったら一緒に学園に行くんだろ？ レイラはそんな楽しいことを考えておけ。そうしたら何時の間にか終わってるさ」

「……はい」

「一也様」

何とか宥められたのか、レイラは俺の服から手を離す。

それと同時にアイリさんがやってくる。

手に持つのは俺が今から着る服。

「こんな感じでよろしいでしょうか」

「俺はどんなものでも……てか今の服装でもいいんだけど」

別に今の服装でもおかしくはないのだが、おっさんが却下する。
何でもこれでは威厳がないだとか。

まず俺には威厳なんかねえよ。

「んじゃ着替えてくるか」

「行つて来い。俺もそろそろ演説の準備に入る。後は……頼むぞ」
「任せとけ」

そう言つておっさんは出ていく。
んじゃ俺も着替えていきますか。

「よく集まってくれた！　まずはこの俺、ラングル・ベルカッタ・アルティウスが少し話をする！」

おっさんの演説が始まった。

民衆達はおっさんの口調がいつもと違うことに戸惑いを見せている。

まあこれだけ変われば仕方ないか……

「まず一つだけ伝えたい——今回で“救帝者”を呼ぶのは止める」

「「「「「なっ！？」」「」「」」

集まっていた民衆は絶句している。

俺も同じような顔をしているだろう。

それは俺が伝えるべきものじゃなかったのか？

それはお前が背負うものじゃなかっただろ？

そんな顔をおっさんは見ていたのだろうか。

一度だけ俺の方を向いて笑って見せた。
そしてまた演説を続けて行く。

「俺達は今まで一体何をしていたんだ？ 世界の統治？ そんなもの何時やった？ 俺達はただ一人の人間の人生を壊してのうのと生きてきただけだ」

俺がおっさんに伝えたことが、次はおっさんが民衆に伝える。
人任せの統治。

そして自分達は何もしない。いや、しようともしていなかった。

「本当にそれでいいのか？ なあ、お前達。俺は言われたよ。他の世界の人間に治められている世界なんてその世界の人達の世界じゃないってな。それは他の世界の人間のものだってな」

世界と統治する——言わば、その世界を手に入れるということ。

良くある話だろ？

魔王が世界を手に入れようと征服しようとする。
征服に成功すればその世界は魔王のものだ。

俺の時も同じようなものだ。

世界を統治している者がその世界の支配者。
他の、元からいる人間なんて関係ない。

「お前らはどうだ？ それを言い返せるヤツはいるか？ いないだろ。なんだってそれが真理だ。俺達は何もしていなかった。それを覆せる人間なんて居る筈もない」

おっさんの演説は続く。

初めは騒がしかった民衆も、今では静かになり、おっさんの演説に耳を傾けている。

「お前達は悔しくないか？　ここまで言われて、何も言い返せないのか？」

「……………」

「俺は悔しかった。何が王だ。俺は何も解ってなかった。俺は何も理解してなかった」

俺はそんなおっさんを見続ける。

今が踏ん張りどころ。

これを取り越えなくては、俺達が目指す場所には到達出来ない。

「だから俺は誓った。俺の目指した場所に、もう一度辿り着くことを許してくれた異世界の友に」

「おっさん……………」

「だからお前達も協力してくれないか？　俺が本当に目指したかった場所に、もう一度チャンスを与えないか？」

真摯な言葉。

これ以上に人の心を動かすものはないだろう。

ただ願い続けた、その言葉。

だからこそそんな言葉は――届く。

「……………ワアアアアアアアアアアア！！……………」

耳が張り裂けるかと思う程の絶叫。

集まった民衆全員が心を通わせ叫んだ。

「任せてください!」

「俺達も手伝いますよ!」

「私も!」

「今度は頑張ってください!」

「そこまで発破を掛けられて動かないヤツなんていないでしょう!」

次々と声上がる。

これもおっさんが民衆に好かれている証拠。

「お前達……」

おっさんは予想外と言った感じで驚いている。

でも俺は予想してただけだな。

だってあんなに家臣に好かれてるんだぞ?

そりゃ民衆にだって好かれる筈だ。

ま、知らないのはその本人だけみたいだけだな。

「……ありがとう。なら、俺の役目もここで終わりだ。次に来度の“救帝者”を呼ぼう」

とうとう俺の番か。

まあ言いたいことはほとんどおっさんが伝えてくれたから言う事もあまりないんだけだな。

「一也 御薙。それが来度の“救帝者”の少年の名だ」

名前も呼ばれたことだし行きますか。

この世界初めての大勝負にして大舞台。

失敗は許されない。

「一也様……」

「行ってくる」

「はい……。私はどんな時でも貴方の御傍に。忘れないでください。一也様は一人ではありません。私が、レイラ様が、ラングル王や色々な人達が居ます。貴方は決して一人ではないということを」

アイリさんが俺の目の前に立ち、真っ直ぐ告げてくる。

ああ、わかってるよ。

俺はこの世界でもう一人じゃない。

頼れる人も、疲れた時に寄りかけられる人も、一緒に笑いあえる人も出来たんだ。

俺はそれを守りたい。

それだけは忘れない。

「……大丈夫そうですね。では頑張つて来てください」

「ああ」

そして俺はドアを開けた。

空は雲一つない快晴で、まるで俺を祝福してくれているようだった。

遠くで見るより圧倒される。

全ての民衆の眼が俺を見ている錯覚に陥る。

いや、錯覚じゃなくて、実際に俺を見ているんだろう。

「一也……」

「心配すんな。やり遂げてやるよ」

おっさんの心配そうな声を聞くが、俺はもう迷わない。
友と呼んでくれた、年の離れた友の為に。

「……………」

「……………」

誰もが俺の言葉を待っている。

深呼吸を一回。

そして俺は口を開く。

「……俺が今回呼びだされた“救帝者”の一也 御薙だ」
「……………」

練武場は静寂。

俺の声以外の音がどこかに置き忘れてきたかのよう。

「本当は俺が伝えることがあつたんだが——」

そう言つて俺はおっさんを見る。

おっさんは笑っていた。

してやつたり、といった感じで。

「——そこにいる友にほとんど言われてしまった。だから俺から
伝えることなんて少ししかない」

今度は俺がおっさんの方を見て笑いかける。

おっさんは苦笑。

そんなやり取りを交わし、もう一度民衆に向かいあう。

「別に俺を信じなくてもいい。けど皆が信頼しているおっさんを信じてあげて欲しい。そうすればきっと目指していた場所に辿り着けるだろうから……」

これが俺の気持ち。

別に俺は信じられなくていい。

というよりも、俺みたいなポツと出の若造を信用なんて出来ないだろう。

だから俺を信じてくれるおっさんを信じて欲しい。

「おい！ 水臭いぞ！」

「そうよ！ 私達にもう一度チャンスを与える人を信用しない筈ないでしょ！」

「そうだそうだ！」

「お前ら……」

どうやら俺が発破を掛ける必要もなさそうだが、ちゃんと生きていたようだ。心というものが。

「俺達が心配していたことは杞憂だったようだ……」

「そうだな」

「クレウィス達との決闘はどうする？ この様子だと別にしなくてもよさそうぞぞ？」

おっさんがそう聞いてくる。

でもこれだけはやり遂げなくてはいけないような気がする。

「いや、予定通り実行する」

「だが……」

「おっさんやあいつらがここまで気概を見せてくれたんだ。なら俺もそれと同じくらいの気概を見せないといけないだろ？」

「……わかった」

俺の言葉に納得したのか、おっさんが最後に頷いた。

そして民衆に向き直る。

俺は一步引いて、おっさんの右後ろに並ぶ。

「お前達にまず一言。……ありがとう。この言葉を贈らせて欲しい。こんな馬鹿な王に付いてきてくれて本当に礼を言う」

この言葉にまた民衆は沸く。

しかしそれをおっさんが制する。

「静まれッ！……本当ならこれで終わりでも良かったんだ。この後に一也には我が娘、レイラ・クライトリヒ・アルティウスと一緒にルイスフェーレンバルグ学園に入学してもらって、そこでも“救帝者”廃止を伝えてくれるだけでいいんだが……それだとお前達に申し訳ないらしい」

俺の言葉をおっさんが伝えてくれる。

「だから一也がどこまで本気なのかを示す為に、クレウイス・アスカルド・ペリオン魔導隊長、リーク・セルバネス・ライデン騎士団長、リーネ・ボルネア・ルイス魔導騎士団長と決闘をする！」

さあ、次の大舞台の道は切り開かれた。

ここからは力を示すだけ。

最初の関門。そして最大の難関になるだろう。
戦う相手はどれも最強と呼ばれる存在。
故に相手にとって不足はない。

俺が本気でぶつかる。ただそれだけだ。

15・舊い（後書き）

さて、そろそろまた学校生活が始まるもうすぐ一カ月となりました。今年で高校生活も終わり。

最後の年なので気合を入れて取り組んでいかないといいけません。

度々言って申し訳ありませんが、今年は受験の年なので更新速度が著しく鈍る可能性があります。

てか鈍ります。

テスト期間などは完璧に更新出来ません。

本当にすいません。

作者は今年はやるりと更新していくので、読者様のゆるりと御鑑賞していただく下さい。

過度の期待は厳禁ですよ？

P S ・アクセス数500,000とユニーク数70,000を超えていました。

こんな駄文をたくさんの人に読んで頂いて、本当に嬉しく思います。これからも亀更新になりますが、完結を目指して頑張りますので、応援よろしくお願いします。

16・死闘・前篇（前書き）

久しぶりの投稿。

一月に一回投稿するとか言っておきながらこんなことになって本当に申し訳ない。

16・死闘・前篇

その場に立つのは四人。

一人は女性。ダークブラウンの髪を持ち、眼鏡の奥に潜む鋭利な瞳で前を見つめる。

一人は男性。腰に剣を下げ、瞳には闘気を滾らせている。

一人は老人。藍色のローブを身に纏い、その瞳を閉じ、何かを考えている。

そして最後の一人は少年。この場に一番そぐわない、しかしその瞳にあるものは絶対的な自信以外は存在していない。

そこにいる四人は誰一人として声を発しない。それはこの場には誰も存在しないのではないかというほどの静寂。

しかし、その静寂も一人の声によって打ち破られる。

「これより、“最後の救帝者”一也 御薙と魔導騎士隊隊長“氷結姫”リーネ・ボルネア・ルイス、騎士団団長“暴帝”リーク・セルバネス・ライデン、魔導隊隊長“魔神”クレウイス・アスカルド・ペリオンとの決別試合を開始するッ！」

「「「「「ワアアアアアアアアアアアッ！」「」「」「」」

一人の男性の声によって、膨大な観客の声がその場を震わせる。

「凄い歓声じゃのう」

「だな。……にしてもあんならの二つ名物騒すぎじゃないか？ リーネさんはまだしも、“魔神”と“暴帝”ってなんだよ」

俺は先ほどの聞いた二つ名を頭の中で反芻する。

まず“魔神”。……どう聞いても悪いイメージしか思い浮かばない。

もう一つの“暴帝”。こっちはまだなんとか感じてだな。日本の有名な神、素戔男尊とかが暴帝のイメージがあるし。

「これこれ。俺の“魔神”の二つ名の意味は魔族の神という意味じゃないんじゃないぞ？」

「なら、なんなんだ？」

「これは“魔導を極めし者”という意味での“魔神”じゃ」
「ああ、なるほどね」

それなら納得出来る。

そういう意味での“魔神”なら悪いイメージはないな。

「さてルールを説明する。ルールは居たってシンプルだ。相手を殺さなければ基本的に問題ない。ただそこに一也が提示したルールが加わる」

おっさんがこれから始まる決闘のルールを街の人達に伝えていく。朗々と紡がれる声は、全ての街の人達の耳へと入っていった。

「それはリーク・セルバネス・ライデン騎士団長と闘う時は魔法の使用を禁じ、クレウイス・アスカルド・ペリオン魔導隊長と闘う時は武器の使用を禁ずるというものだ。リーネ・ボルネア・ルイス魔導騎士隊長と闘う時には特にはないがな」

「……何か私の時にルールを追加してくれてもよかったんじゃないかしら？ これだと何か不公平に感じますよ」

「しょうがないだろ。リーネさんは魔法も武器も使えるから俺が使用しないっていうのも変だし」

やはりリーネさんは異論を唱えるが、こればかりは仕方がないということで諦めて貰うしかない。

まあ無詠唱はなしにする方向でいいかな？

レイラにもあまり無詠唱だと目立ち過ぎるから、適当な詠唱をしておけて言われてるし。詠唱をしなくても唱えられる俺ではあるけど、適当にその魔法のイメージを詠唱すればそれが想像するのを助ける役割にもなるし、中々便利でもある。

「決別試合の順番は、最初にリーネ・ボルネア・ルイス魔導騎士隊長と、次にリーク・セルバネス・ライデン騎士団長、そして最後がクレウイス・アスカルド・ペリオン魔導隊長という順番で行う」

おっさんの説明ももうすぐ終わる。

それから始まる闘い。この世界に来て初めての自分の意思で行う闘争。

「では試合の準備に取り掛かる！」

「一也さん……」

「一也様……」

「二人とも、大丈夫か？」

試合をするのは俺だと言うのに、何故かレイラとアイリさんの方が焦燥している。

てか俺はそこまで焦燥——てか、疲れてもないよ？ 大体疲れてたらこれから行う戦闘も出来ないし？

「大丈夫です、と言えたらいいですが……」

「やっぱり不安です……」

「——約束するさ」

俺は二人を優しく抱きしめる。

この二人は優しくすぎる。俺にはもったいないほどに。ただの少年に、これだけの優しさを与えてくれるのだから。

「あつ……」

「一也様……」

「絶対に無事に帰ってくる。だから二人は笑って待っていてくれ。んで、終わったら皆でパーティーでも開こうぜ？ 夜通しで騒いだりしてな」

最後に二人を撫でてから、俺は身体を離す。

少しだけもつたいない感じもしたが、あまりやりすぎたら怒られそうだし。

「だから心配なんかしなくても大丈夫だ。な？」

「……はい。私は笑って待っていたらいいんですね？ 約束ですよ？」

「私も待っています。だから……早く帰ってきてください」

「了解」

最後にはちゃんと二人は笑ってくれる。

だから俺は何の心残りもなく、歩き出す。待っていてくれる人が居るんだ。だから何も心配することはない。

さっきまで居た街の人達は、今では遠く離れた場所に居る。

この場所の風景は魔法で映し出しているらしい。だから遠くに離れていようと、この闘いははっきりと見える。まあ目視するレベルと同じな為、闘いのスピードに追いつけないこともあるだろうけど。

「まずは私ですね……」

「最初の関門か」

眼の前に対峙する一人の女性——リーネ・ボルネア・ルイス魔導騎士隊長。

いつもキリツと前を向く瞳は、今では俺だけを映しだす。冷静であるうとしている中、滾る闘志も見え隠れしている。

「後の二人には流石に劣るかも知れないけど——」
「ッ……」

闘気が膨れ上がる。

正直、この間戦った色王の一角より大きい。相手が人間だからそう思うのかも知れないし、本当に大きいのかも知れない。

けど……

「魔導騎士隊隊長“氷結姫”リーネ・ボルネア・ルイスが第一陣を相手をしましょう！」

そんなものは関係ない！

ただ全身全霊を以て打ち倒すのみッ！

「これより決別試合を開始するッ！ 両者共、準備はいいなッ！？」

「はいッ！」

「あぁッ！」

俺とリーネさんの声が錬武場に響き渡った。

「なら決別試合第一試合、開始ッ！」

「まず小手調べからよッ！」

両者の間には結構な距離。

今の俺なら気で強化すれば数秒で踏み込める距離ではあるが、これは決別試合。

お互いが全力を出すことに意味があるので、わざとリーネさんに合わせる。

「炎の精霊よ その身を焦がす業火を以て 敵を焼き滅ぼせ！ “ヘルフレイム”！」

前方から十メートルくらいの大きさの火柱が飛んでくる。

俺はそれに対して慌てず冷静に対処する。火に対するのは水だよね、やっぱり。

「清水流れし数多の川 清めて洗い流せ！ “水の氾濫”！」

俺は何もない地面から大量の水を作りだし、眼前に迫っていた炎

柱を消しにかかる。

それは互いに拮抗し、どちらも消滅を言う結果に終わる。すかさず俺は第二波の準備に掛かる。

「迸れ雷神 打ち出せ轟音 焼きつくせ雷鳴！ “轟雷の響き”！」
「ッ！ 大地の精霊よ 豊穰なるその身で我を守りたまえ！ “アースシールド”！」

俺が放った雷は、リーネさんが咄嗟に作りだした土の盾に防がれた。

土は雷を通さなかったが、その速度により発生した衝撃までは防ぎきれない。盾はその役目を終えてまた土に戻るが、厄介な物を残して行ってくれた。

（土埃で視界が塞がったか……）

間違いなくこの瞬間に仕掛けてくる。

それは魔法かそれとも――

ガキンッ！

俺は殺気のした右側に影桜を掲げる。掲げると同時に金属音。

「――今度は接近戦ですか？」

「リーク様すら及ばないというあなたの剣技には退屈かも知れないけど、少しの間は付き合ってもらおうよ？」

リーネさんの武器は長剣。

何時もの姿からは考えられないくらいの力が、俺を襲いかかる。

「ハアッ！」
「フッ！」

魔法による身体能力の強化か。中々の高速戦闘を展開してくる。まだまだ問題はないと言えはなが、それでも緊張は解けない。それを証明にリーネさんが魔法を放つ。

「フレアレイン」！
「ッ！ この距離で無詠唱とはエグいなッ！」

俺は高速で迫り来る炎の矢を斬り払う。
一斬り二斬り三斬りと。刀を振る速度が早すぎて、一時的に残像が残る。

「それを簡単に切り捨てるあなたに言われたくないわねッ！」
効かなかったと見るや否や、またもや接近戦を仕掛けてくる。斬り上げ、刺突、斬り払い。リーネさんの剣戟は一種の舞いのようにも見える。

「流石隊長格を務めるだけはあるッ！」
「お褒め預かり恐悦至極ッ！」

さらに俺達の剣戟は激化する。
俺が斬り上げれば、リーネさんは切り捨てる袈裟斬りで激突。薙ぎ払いを行えば、同じく薙ぎ払い。

「ハアッ！」
「シッ！」

両者ともに譲らない。相手より速く、相手よりも鋭く。その想いを斬撃に乗せて放つ。

一也は自分ではなく、この世界の人々に向けて。リーネは自分の忠誠を誓った主に、そしてその主が信頼した少年に向かって。

「埒が明かないわねッ！」

「俺も残り二人も居るからあまり体力は消費したくないんだがなッ！」

「ならこれでどうかしらッ!?」

風の魔法だろうか。一気にリーネさんとの距離が開けた。

最初に向かいあった時よりも距離は開けている。距離を取ったと言っことは魔法の詠唱か？

どうやら当たりのようだ。朗々と紡がれる詠唱が風に乗って俺の耳に入ってくる。

「焰の精霊神よ さあ焦がせ焦がせ焦がせ 溶けるような業火と劫火で敵を滅ぼせ 消し去るのは眼前の ただ一人のみ! “ボルカニツクレイブ”!」

どうやら最大魔法の類らしい。

先ほどの炎柱とは比べ物にならない程の炎の波が俺を襲う。なら俺も最高に近い技を以て対抗しよう。

「契約に従い 我に従え氷の女王 来たれ とこしえのやみ えい えんのひょうが! “こおるせかい”!」

そして世界は——凍りついた。眼前に迫っていた獄炎の波は俺の魔法を受け凍りつく。

それに伴い、近くの地面なども一気に極寒の世界へと変わり果てた。

「なっ!？」

「——チェックメイト」

そんな光景に咂然としていたリーネさんに首筋に刀を突き付ける。
一度二度と眼を瞬き、降参を告げた。

「——勝者、御薙一也ッ!」

〈side レイラ〉

「まずは一勝ですか……」

「そうですね……」

熾烈を極めた二人の戦いも、やっと決着が着きました。
私では未だに辿り着けない、遥か高みに二人は居るようでした。

「それでもこの後はこれより激しい戦いになるんでしょうね……」
「はい……」

この後続くのは“暴帝”リークさんと、私の魔法の師匠の“魔神”クレウイスさん。

こう言っではリーネさんに悪いですけど、この二人は格が違う。
どちらもこの世界最強クラスの使い手達。

「それでも私達は信じて待つって約束しましたからね……」

私は祈る。

別に一也さんが負けたって構わない。ただ怪我をせずに無事に戻って来て欲しい――

「頑張ってください……！」

（side out）

「――完敗だわ」

勝利宣言を終えて、リーネさんは俺にそう告げた。

「剣術でも魔法でも完全に負けたわね……」

「リーネさんも凄かったぞ。最後の魔法には焦ったしな」

「……そう言ってもらえるとうれしいわ。でも次から注意することね」

去り際にそう告げる。

そして反対側から歩いてくる白髪の老人。

「同じ隊長格と言えど、残りの二人は別格よ？ 間違いなくこの世界最強クラスの実力者達なんだから」

「……わかってるさ」

「そう、それならいいわ。頑張つてね」

「ああ……」

そうしてこの舞台からは一足に降りて行った。

そして次に上つて来た役者がようやく俺の前に辿り着く。

「——この時をどれほど待ったことか。あの戦いの日からずっと待っておったぞ？」

「俺は……どうなんだろうな。闘いたかったのか闘いたくなかったのか」

もう既に闘争準備は完了しているらしい。身の丈ほどの大剣を軽々と掲げ、俺に突き付ける。俺もそれに合わせ影桜を引き抜き、霞みの構えに入る。

「さあもう言葉はいらん。存分に——殺り合おうッ！」

「戦闘狂かよ……」

眼の前から発せられる闘気はリーネさんを超える。その中には殺気までもが存在した。流石にそれには顔を引き攣らしたが、すぐに俺も応戦した。

「けど——悪くないッ！」

今か今かと二人が待ちわびる中、おっさんの声が響いた。

「決別試合第二試合、始めッ！」

そして両者は激突する。

その瞳には爛々とした笑みが浮かんでいた。

16・死闘・前篇（後書き）

今度の投稿は7月に入ってからになりそうです。
出来るだけ早く投稿出来たらなあ……

そっぴいやいつのまにかPV数700,000とユニーク数100,000を超えていました。更新が不定期なこの作品をたくさんの人達に読んで頂いて本当にありがとうございます！
これから頑張っていきますので、応援よろしくお願いします！

17・死闘・中篇（前書き）

久しぶりの休日に時間が取れたので書いてみた。
後数話で学園編に入れそう。このまま勢いで書いてしまいたいが、
もう少しすると試験。なのでやっぱり学園編は7月に入ってからに
なりそう……

17・死闘・中篇

刀の性質は切り裂くこと。

刃筋の立て方を考え、速さを以て相手を切り裂く。それに対し、大剣は押し切るもの。その重量により、無理やり相手を押しつぶす。

「はぁッ！」

「フッ！」

俺とリーク爺さんの武器がぶつかり合う。

身の丈ほどの大剣に刀で対抗するのは流石に難しい。いくら俺が身体を強化しているからと言って、その重量から放たれる斬撃の重さは半端じゃない。

「クククッ、久しぶりの高揚感じゃ！ これほどのものはこの十数年感じたことないッ！」

大剣と刀が交差し、鏖競り合う。リーク爺さんは魔力により身体能力をこれほどまでというくらい強化している。振るわれる筋肉は膨張と収縮を繰り返し、とてつもない運動力を発揮する。

「俺もリーク爺さんみたいなタイプと闘うのは久しぶりだッ！」

「そうかそうかッ！ なら大いに楽しもうッ！」

鏖競り合いが一度離され距離が離れる。

リーク爺さんは大剣を上段に構え、俺は――

「妙技をお見せしよう――天凱流歩法 陽炎」

「ぬっ！？」

俺は独特の歩き方でリーク爺さんを惑わす。

惑わすと言っても、周りからしたら普通にリーク爺さんの周りを歩いているようにしか見えないだろう。しかし、リーク爺さんは違う。

人間の脳と言うのは視覚による情報を得るのが3%ほど、残り97%は脳によるイメージの想像による補佐。これで脳は周りの景色を見る。故にそれを少し弄り、幻惑を見せるのは鍛錬をすれば簡単に出来てしまう。今リーク爺さんは俺の姿が7〜8人くらいに見えるだろう。

「……………では、行くぞ?」「……………」
「愉しませてくるのおツ!」

前後左右から俺の幻影がリーク爺さんを襲う。

俺は未だに周りを歩いて幻惑しているが、リーク爺さんはそれを撃退している。周りから見たら本当におかしく見えるだろう。

「どうしたどうしたツ!? これで終いかツ!?」
「爺さんも十分化け物の一員だな……………」

幻惑されていようとお構いなし。襲いかかる俺の幻影は斬られ、潰され、殺される。たまに俺本体も攻撃を加えるが、それすら防がれる。

「流石はこの世界最強クラス……………」
「一也もやはり強いのおツ! 間違いなく儂が戦った三帝より強いツ!」
「そりゃどうもツ!」

剣戟による舞いは剣戟による嵐に返される。

前方から迫る死の圧力が俺へと襲いかかる。それでも俺は前に進む。反らし、避け、反撃する。

「これならどうじゃッ!？」

「はぁッ!？」

リーク爺さんの大剣に魔力が収縮する。

収縮した魔力は白く輝き、身の丈ほどあった大剣は今では光も加わり5メートルくらいの巨大な斬艦刀のようになっていた。

「防いでみるッ!？」

「チッ!」

繰り出される斬撃。それは最早斬という範疇には収まりきれない。ルール状俺は魔法による防御は不能。それにより俺はこの暴力に身体と刀一本で立ち向かわなければならないということだ。

さて、どうするか。後数秒以内に考え、実行しなくては俺の敗北。俺に出来ることなど高が知れている。ならその中から迎撃出来るものを選べばいい。

何だ、簡単じゃないか――

「天凱流攻式四之型――射塵」

弓を射るかのように身体を極限まで引き抜く。

そして――

「ハァアアアアッ!」

「シッ!」

迫りくる大剣の刃筋に極限にまで高められた速度の刀が突き刺さる。普通の武人なら狙わない、いや狙えないような刃に刀の先を俺は突き刺した。

流石にそれにはリーク爺さんも驚いたようだ。

「これはやりすぎじゃないかのう？」

「これ以外に一点突破であんたの技を打ち破るものがなかったからな」

お互い少しの小休憩。息を整え身体の熱を逃がす。気を少し整え身体に行き渡らせる。

「俺の最強の技と自負していたものがこうもアツサリと防がれると

……何か悔しいのお」

「アツサリって……これでも苦労してんだよ」

「そのような格好で言われても簡単には信じれんよ」

そう言つて大剣を担ぎ直す。俺も影桜をまた構える。青眼の構えよりやや重心を前に倒し、息を止める。段々と高揚する身体を押さえつけ、今か今かと待ちわびる心を自制させる。

風が吹く。それと同時にまた俺とリーク爺さんは動き出す。

疾風と怒涛。それが交わる。辺りには金属が衝突する轟音。気と魔力の波動が辺りに巻き散る。粒子となり地面の砂を吹き飛ばす。

俺が高速の斬撃を放てば、それを高速の圧撃でリーク爺さんは対応する。

速さには力で。力には速さで互いに斬り合う。

「ハハハッ！ 楽しい、楽しいのおツ！」

「俺としてはそろそろ沈んでほしいんだがッ？ まだあんたの後ろ

に控えてる。老人の相手もしなくちゃならないからなッ！」

薙ぎ払い、身体を反転させての斬り上げ。一撃一撃が必殺でありながら、全てが次の行動への布石。流麗にして激烈。剣舞にして剣武。それが互いを食い散らしていく。

「そう言っなッ！ 主にはもっと付き合って貰わんとなッ！ こんな愉しい闘いを終わらすのはもったいないッ！」

「俺はそろそろ疲れてきたんだがッ！？」

大剣が唸りを上げ、足元からせり上がる。俺はそれを刀で滑らせ反らし、身体を回転させ、その遠心力を以て薙ぎ払う。それすらもリーク爺さんは読んでいたようで、反らされた後すぐに大剣を横に立て、俺の斬撃を防ぐ。金属の衝突音はするが、その身体はまったくいってもいいほど揺るがない。

俺は奇策として盾のように扱っていた大剣に手を添える。リーク爺さんは疑問顔をし、そして呻き声を上げる。

「天凱流無手 徹華」

「グッ……！」

俺は一度離れて様子を見る。

徹華は零距离の状態から手を添え、相手の内部にダメージを与える技だ。もちろん手に持っている状態の物に放てば、振動などが相手の身体を蝕む。現状リーク爺さんの腕は使いものにならない筈なのだが……

「ダメージは入ったけど戦闘は続行か……」

「これは流石に堪えるぞ、一也よ……」

腕を振りながら俺に話しかける。

正直なんであれ食らって普通なんだ？ 下手すれば骨は砕けてもおかしくないんだけどな。

最強クラスは伊達じゃないないってか？

「ほら、リーク爺さんも良い年なんだからあまり激しい運動は厳禁だろ？」

「クククツ、まだまだ若いもんには負けんよ。さあ、続きと行こうかのぉ？」

「はぁ……」

どうやらダメージも思った程食らわなかったらしい。本当にどういふ身体してるんだ？

「ほれほれッ！ もつと儂を愉しませてみるッ！」

「糞がッ！」

ここにきて斬撃の速度が上がる。それに伴って圧力も相乗効果で上がっている。

俺も気を最大限に使い、身体を強化する。

飛び散る火花が辺りを照らす。砂煙が二人を隠し、そして吹き飛ぶ。繰り出されるのは斬撃。発せられるのは闘気。しかし二人が浮かべるのは――笑み。

闘いというものを純粹に楽しむ、子供のような表情。永らく封じ込めていた闘争心が外に出る大人と、誰かの為に己の剣を振ろうと決めた少年。

「ハアアアアアアッ！」

「アアアアアアアッ！」

交差し、交錯し、交わり合う。鏢迫り合い、互いの力を出し合う。大剣は轟風を作りだし、刀は疾風を作り出す。

暴力による演舞と流麗な演舞。

それが交わり合い、二人を見つめる観客は息を飲み見守る。

少年の無事を見守る二人の女性もまた、二人の武人が作り上げる斬り結ぶ演舞に目を奪われる。しかしその手は強く握りしめられる。少年が無事でいて欲しい。その願いだけを胸に秘めて。

「ほら、遅くなって来たんじゃないか爺さんッ!？」

俺は速度を上げる。高速から光速へ。一段階ギアを上げる。

頭の中は火花が散っている。それすらも無視し、ただ前だけを見据えた。

これで決める——ッ!

今は何故か調子がいい。理由なんぞはわからない。この闘いの雰囲気当てられてアドレナリンが多量分泌しているのか。それでもそれが心地よいと思う。思ってしまう。

けど、俺はそれに終止符を打つ。

俺の無事を祈ってくれている、大切な二人がいる。だからリーク爺さんには悪いが、もう闘いを楽しんでられない。

「天凱流攻式弑之型 烈火——ッ!」

「ぬッ!？ ぬ、又オオオオオオオオッ!？」

俺の斬撃が嵐となり、リーク爺さんを襲う。

上下左右全ての方向から斬撃が襲いかかる。その剣速は最早神速の域に達していた。しだいに捌くことが出来なくなっていく。

「アアアアアアアアアアッ！」
「オオオオオオオオオオオッ！」

絶叫が木霊する。天を突き刺すような咆哮。
刀と大剣はぶつかり合い――

ガシャン――……

「勝者、御薙一也――ッ！」

「流石じゃの……」

大剣を手から落としたリーク爺さんが、大剣を拾い上げ俺の下に歩いてくる。

俺も影桜を納刀し、近づく。

「そっちこそ。正直思っていた以上に強かったよ」

「カッカッカ……。儂より歳も取ってない若造が言いよるッ！」

俺の頭をワシワシと豪快に撫でてくる。俺も苦笑しながらもそれを受け入れた。

「さて……」

撫で終わったのか、頭から手を離す。
そして口を開く。

「負けた僕は素直に観客席に戻ることにする。じゃが次も気を抜くんじゃないぞ？ 何て言っても——」

最後の言葉が俺の耳によく残り、リーク爺さんは舞台から去っていく。

そして入れ替わりで現れる。くすんだ金色の髪を編み込んだ、最後の相手。その身を藍色のローブで身に纏い、眼には愛嬌ある笑みを浮かべている。

「ようやく僕の番じゃ。準備は出来とるか？」

「大分とさっきの闘いで疲れたけど……ま、問題はないさ」

「そうかそうか。なら結構」

そして爺さんと俺の目の前に一つの大きな水晶玉が運ばれてくる。俺でも一抱えするのが困難なくらいの水晶玉で、それは台座に固定されていた。

「これは？」

「僕達のバトルフィールドじゃ」

「はあ？」

「まあ説明するから良く聞いておくんじゃぞ？ これは魔法球と言って、この中入る事が出来る。この中では死ぬほどの傷を受けると強制的に外に戻すという機能がついておって、こっやって決闘などに用いられるんじゃ」

「待て待て。なら何で前から使わなかったんだ？ それを使ったら怪我の心配なんかなかったんじゃ？」

俺が最もな質問を上げる。

「それはのう、この魔法球は物理的なダメージには意味がないんじや。したがってこの中で戦っても、その内容が物理的なダメージなら効かないんじや。魔法ダメージのみに効果がある。だから先二つの戦いでは使わなかった、ということじゃな」

「へえ……」

ならこの中での魔法戦闘は本気の本気。まさしく殺し合いだろうと出来ると。

俺が眼で尋ねると爺さんも頷いて返す。

「ちなみに魔法で創り上げた剣などでダメージを与えると、それはダメージが入るからの」

「なんていうか境界線が曖昧だな……」

「そう言うな。それでも画期的な発明じゃったんじやからな」

「ん？　もしかしてこれ創ったのって爺さん？」

「うむ」

なんと。この魔法球を創り上げるって並大抵のことじゃねえの？
流石は最強の一角だな。

「さて……二人共、そろそろいいか？」

とうとうおっさんから声が掛かった。
俺も爺さんもおっさんに頷いて返す。

「わかった。なら二人とも魔法球の前へ」

おっさんの言葉と共に、俺達は魔法球の前に立つ。
これが最後の戦い。俺の最後の踏ん張りどころ。

「決別試合最終試合——開始ッ！」

その言葉とともに、俺と爺さんは魔法球の中に取り込まれる。
不意に、先ほどりーく爺さんと交わした言葉が頭の中で半濁した。

「——俺の知る限り、間違いなく世界最強と言われてもおかしくない存在じゃ。クレウイスはの。確かに魔力の量は他に劣るが、魔法技術なんかはトップじゃ。だから気を抜くな？ 最初から全力で当たらんとすぐに勝敗を決することになるぞ？」

17・死闘・中篇（後書き）

誰もこんな短い期間に投稿するとはおもわなかっただろう！

……いや、ほんとスイマセン。生言いましたorz

出来れば書きたいけど、ホントまた試験があるとか軽く鬱になる。
てか俺は受験生なのにこんななので本当に大丈夫なんだろう？
滅茶苦茶心配になる、今日この頃。

18・死闘・後篇（前書き）

テスト勉強が予想以上早く終わったので投稿。
いつも以上に長い文となっていますが、ご了承ください。

本当はこれの3/4くらいの長さの予定だったのにどこで狂ったんだろう？

18・死闘・後篇

眼を開けると、そこはどこまでも広がっている荒野と、雲一つない蒼天が見られた。

風が吹き、俺の身体を撫でて行く。どうやらここが魔法球の中のような。外とはまったく違っていいほど地形も変わっている。

「さて、準備はいいかの？」

「いつでも、な」

何時の間にか眼前に現れていた爺さん。

その手にはもう魔力が漂う。手のひらがしだいに発光し、その光も大きくなっていく。

「ならこれが開戦の合図じゃ。簡単に沈むでないぞ？ “エアロス

トーム”！」

「早速無詠唱かよッ！？ “煉獄の嵐”！」

暴風と炎の嵐が互いを食い散らす。だが、炎は風の力を受け、より一層とその力を増して爺さんに襲いかかった。しかし爺さんはそれも予想していたようで、詠唱を済ませて発動した。

「火に対するは水じゃの。 “アクアウェーブ”！」

範囲を増した炎の嵐は大波に飲み込まれる。それを俺は魔力障壁を立てやり過ごす。

今までの戦闘をして確信する。間違いなく今まで闘ってきた三人より強い。

もし爺さんが戦争などで戦線のトップに立てば、一人で相手の戦

線を崩すことも簡単にやつてのけるだろう。

「大した腕だな……。流石は“魔神”」

「一也もようやるのう。さつきから使ってる魔法全て無詠唱で尚且つオリジナルじゃろ？」

「ああ。てか俺はこの世界の魔法を使うことが出来ないから、仕方なくこうなった訳だが」

そう言い合いながらも簡単な魔法の応酬。

大小様々な魔法を矢のように打ち出し合い、相殺し合う。火の矢が飛んできたのなら火の矢で、雷の矢が飛んできたのなら雷の矢で相殺。見た限り爺さんも上級と精霊以外の魔法は全て扱えるようだ。

「ここらで一発大技を行くぞ？ その胸に怒りあるなら 地に眠る者達 大地の激震となれ 穿て巨石よ 全てを潰せ！ “アースクエイク”！」

その瞬間、大地が震えた。

その震えはしだいに増し、大地震へと発展する。それにつれ大地に亀裂が走り、それが意思を持っているかのように俺に襲いかかる。

「チイツ！ “光翅の翼”！」

俺は背中に光の翼を出現させ、空中に逃れた。

あまり空中で闘うは慣れていないので、少しだけ不安に思うが、今更そんなことを言っている暇はない。

「ほれ。休んだる暇はないぞ？」

「なっ！？」

空中に逃れれば安心と思っていたが、それは大きな間違いだった。いつのまにか大地で崩れた巨石が、宙へ浮かびあがり俺を取り囲む。

「糞ッ！」

それが一斉に俺に襲いかかる。

上下左右様々な方向から、俺を押し潰そうと迫る。俺は逃れようとしたがその考えを即座に廃棄。時間が足りなさすぎる。だから俺が取る行動は一つ。迎撃。

「“塵芥の竜巻”！」

俺の周囲に風を纏う。纏うと言ってもそれは鋭利な風。迫ってくる岩石を瞬間的に砂へと変える。これで安心かと思っただが、まだまだ守勢は続く。

「台風かの？　ならそこに攻撃はどうじゃ？　“プロミネンス”！」
「マジかよッ！？」

台風の中に居る人物を攻撃するにはどうすればいい？

そんなのは簡単で、台風の眼である上空から直接その場所に叩きこむ。これでいい。

だが、それをやられた方はたまったもんじゃない。風により強化された炎竜が俺を飲みこもうと迫りくる。まあそれでも冷静さは見失わない。

「ならこれだな。　“八岐大蛇”！」

日本の有名な八つの首を持つ大蛇を模して、水の大蛇を作りだす。そのまま二頭の竜と蛇が互いに衝突しあう。拮抗し、蒸発。俺も風

を止め、下の大地を見下ろす。爺さんは笑いながら声を上げた。

「強いのお……。こうまで魔法を魔法で返されるのは久しぶりじゃよ」

「俺は純粹な魔法戦闘はこれが初めてだからな」

「初めてでここまで出来るのは流石じゃのう」

爺さんの手がまた輝き、俺へと翳す。

俺もまた魔法の準備をする。想像し構築する。それが俺の魔法。異色でありながら、絶大。

「そろそろ俺も本気を出していくぞ？ 属性合成！“フロストフレーム”！」

爺さんの手から繰り出されたのは凍える炎。

間違いなく炎属性の魔法と氷属性の魔法を合成した魔法だろう。

「メドロアかよッ！？ 仕方ねえなッ！ “神の鉄槌”！」

色王相手に繰り出した魔法で応戦する。

属性が二属性あるため弱点属性で攻めることも出来ない。なら単純に威力で上回るしか方法はなくなる。土の塊で出来た大きな鎚が凍える炎と衝突しあう。

しかし土は凍りながら燃え尽き、拮抗することもなく容赦なく俺へと襲いかかって来た。

「おいおいおいッ！？」

明らかに威力は上回っていた俺の魔法があっさりと敗れる。

流石にそれには肝を冷やしたが、即座に第二派を放つ。二波目で

ようやく相殺出来たが、俺の予測を大きく上回られた。

「どういうことだ？ 俺の間違い？ いや、それはない筈……」

俺自身、自分の感覚には自信がある。魔力だろうが気だろうが、測り間違いない筈がない。それなのに……

俺は訝しみながら、爺さんを睨みつける。

そこにあるのは何時も通りの飄々とした笑み。中々にイラツとさせてくれるじゃないか。

「間一髪じゃったのう」

「あれぐらい何ともねえよ」

「ククツ、強がりおって……」

なら試してみるか？

「それが本当かどうかは自分の心に聞くんだな——“氷柱時雨”」

大小様々な氷柱が爺さんへと降り注ぐ。爺さんはあるものは避け、あるものは相殺し、受けきれない分は防御魔法で防ぐ。それにより一時的に砂塵で前が見えなくなっただろう。俺はそこに追撃を仕掛ける。

「水分よ集まれ——」

粉塵が纏っている場所の水分を俺の手に集中させる。これだけには大した意味もない。

俺は手に集まる水分は必要ないので、すぐさま霧散させ、次の行動に移行する。

「はびこれ……」

相手は未だ仕掛けてこない。俺を警戒しているのだろうか。それならこちらも好都合というもの。気付かれないよう、少しの風を發し続け砂煙を維持。その中に可燃性である石炭の粉塵を土属性の魔法で創り上げる。そしてそれを砂煙と一緒に散布。

「余裕をかますのもいいが……今日は乾燥注意報が出てるんだぜ？」

俺は満遍なく行き渡った粉塵に小さい火花を打ち出した。

「爆発には注意しましょう——てな」

重度に乾燥した場所に加え、可燃性である石炭の粉塵が大量にばら撒かれているその場所は瞬時に轟音を立てて爆発していく。風による俺の制御で、酸素不足に陥る事もなく連続で爆発する。

「決まったか……？」

俺は外の世界に繋がる鏡を見る。

そこには未だ爺さんの姿はない。どうやらあの攻撃を凌いだようだ。存外しぶとい。

「ケホケホ……」

煙の中から姿を現す魔導師。観客からは歓声。

姿を見やるが、汚れはしているものの負傷の様子は無い。隠しているという線も考えられるが血の匂いはしない。まあこの世界で血が流れ、それをちゃんと確認出来るのかどうかは知らないが。

「まさかあのような攻撃を仕掛けてくるとはの」

「粉塵爆発くらいこつちの世界にもあるだろ？」

「まあ」

「ならそれをちゃんと予測しろよな」

俺はこういうが、正直あの瞬間瞬間で予測出来るヤツなんて滅多にいないだろう。

てか居たら焦る。ソイツはどれだけ観察力と危機察知力があるんだ。

「さてまあ……仕切り直しじゃな？」

「この勝負は終わるのか……？」

再度魔法を撃ちあう。

互いの力を極限まで出し切る。それは一つの極致であり、魔を極めんとする者が望む最果ての場所。瞬時に構成、発動。無詠唱に二重詠唱。

この世界の魔導師が一生を掛けても会得出来ないような技術などの大盤振る舞い。

「殲滅せよ——“真実の涙”！」

「駆け上れ白鳴——“ラグナブラスト”！」

豪流と烈風の共演。

水は切り裂かれながれも前へと進み、風は切り裂き続ける。

地は変形し、今では原型を留めない。それほどの戦闘。火が水が風が土が雷が氷が草が互いを侵食し合い、波動を撒き散らす。

観客もその戦闘に目を奪われ、息すらすることを忘れる。

先ほどまで激戦を繰り広げた二人さえも、眼の前で広がる光景には息を飲まずにはいられない。

そして少年を心配する二人は——

「そろそろ疲れてきたのお……」

「ならリタイアしろよ……」

「それは嫌じゃのお」

「ならどうするんだ？」

俺は光速で空を掛けながら耳を傾ける。今も先ほど発動した光の翼を駆使している。

それに対し爺さんは地上で光速に駆け、俺と同じ戦法を取っていた。

だから俺は失念していた。爺さんが“ある形”に動いていたことを。上から見ていたら普通気付く筈なのに、俺に対抗していると勝手に思っていたから。

「——こうするんじゃないよ」

「なッ!？」

俺の動きが急に止められる。それも強制的に。

下を見るとさっきまでは描かれていなかった図形——

「魔法陣——ッ!」

「一也もまだまだ甘いのお」

今では光り輝く巨大な陣。

魔法陣の効果はわからないが、俺を拘束していることから、相手の行動を封じるものなのだろう。実際、俺は身動きも取れず、尚且つ魔法も発動することが出来ない。

「チッ! 魔法封印の陣かッ!？」

「これで終わりじゃないの?」

爺さんは声高に魔法の詠唱をしていく。その足元には新たな魔法陣。魔法陣を二つ同時展開をすることもさながら、上位——いや、古代クラスの魔法を発動するつもりだろう。

「ま、今回は僕の勝ちじゃの——ッ！」

俺はこのまま何も出来ずに負けるのか……？

「宇宙の生誕よ それは遙か昔の話——」

絶対に負けないと誓った筈なのに。
見守る二人に笑いかけたのに。

「神が創り上げた無の世界——」

確かにここで負けても問題はない。
だけど——

「それは遙か昔の話——」

——也さんッ！
——也様ッ！

「ただ一つの衝撃により生まれた世界——」

そっだよな。

俺には待つてくれる人がいる。今でも泣きそうな顔で俺の無事を、俺が勝つことを信じてくれている人達がいる。

それなのに——

「一つの爆発により生まれ落ちた世界——」

——こんな無様な姿なんか見せられるかッ！

俺は全神経を集中させ、拘束している魔法陣を粉碎する。

普通なら手順を踏んで解除をしなくてはいけないのだろうが、俺には関係ない。力技で強引に解除する。

「ぬッ！？ 魔法陣を解除したか。だがもう遅いッ！——“ビッ
グバン”！」

魔法球が壊れるかのような光と轟音がその世界を襲った。

side アイリ

「一也さんっ！？」

壮大な闘いに、とうとう終止符が打たれようとしています。

我が主——一也様が、クレウイス様の魔法陣に捕まり拘束される。必死でもがき、その魔法陣から逃れようとするが、クレウイス様がそんなヘマをする筈もない。

「一也様……ッ！」

思わず叫ぶ。

いつも自信に溢れていた一也様が、あんな顔をするとは思わなか

ったから。悔しさと諦めを含んだその表情。
私はそんな一也様を見たくはなかった。

「諦めないでください——」

あなたは私の太陽。いつも私を照らし出してくれる希望の象徴。
それがこんなところで曇ってほしくない。

だから私は心を込めて、あの人がいる場所に届くように声を上げる。

「——一也様ッ！」

side out

side レイラ

「一也さんっ!？」

思わず声を上げてしまった。

今まで対等に闘ってきたのに、ここにきての痛恨のミス。いや、ミスではないだろう。あの一也さんがそんな些細なミスを犯す筈がない。今回は師匠に知恵比べの軍配が上がったのだ。

「あの詠唱はッ!？」

間違いなく師匠が創り出したオリジナル魔法。しかもその中でも最強の位置にある無属性の殲滅魔法。あれをまともに食らえば、間違いなく敗北するだろう。

「ッ!？」

あんな顔の一也さんを初めて見た。悔しさと諦め。それは一也さんから一番遠く離れたものだ。私は勝手に思っていた。

私が自分都合で人生を無茶苦茶にしまった人。それなのに私を優しく諭してくれた人。

そして――

「私が初めて愛を感じた人……」

あなたはいつも私の横で微笑んでくれていました。

例えるなら月。優しく微笑み私に安らぎを与え、どんな時でも傍にいてくれ安心感を与えてくれる。そんな人がこんなところで雲に隠れて欲しくない。

だから私は心を込めて叫ぼう。あの人が目指す場所に一緒に辿り着く為に。

「――一也さんッ!」

side out

side クレウイス

「勝負あり……じゃな」

間違いなく決まった。それを確信する。

儂が放ったのはこの世界に元から存在していなかった、10個目の属性。下位属性を全て一緒に発動し、互いに相反させ力を取りだす——無属性。

儂が創りだした至高の術式。その中でも一番威力が高いであろう魔法を放った。人間なら100回肉片に変えてもお釣りが来るくらいの威力を持っている。それを直撃したのだから儂の勝ちで間違いない。

それだというのに……

「一也の姿が見えない……？」

魔法球と外の世界を繋ぐ鏡を見る。

その場所には居なくてはならない、いや居なくてはおかしい一也の姿はいなかった。

「まさか……ッ!？」

ようやく先ほどの魔法で浮かび上がっていた砂塵も薄れて行く。そしてその中に佇む一人のシルエット。

周りに完全に焼け野原、いやそんな生易しいものではない。完全に地面は抉れ、広範囲に渡って亀裂が走っている。

「クククッ……ハハハハハッ! まさかあの魔法を防ぎきるとはのッ!」

とうとう姿を現した来度の英雄。

その姿に傷一つついてはいなかった。

side out

「一つの爆発により生まれ落ちた世界——」

間に合うかッ！？ いや、そうじゃないッ！

魔力の収縮が半端じゃなく、今まで放ってきた魔法などとは比べ物にはならない。だが、それでも俺は防ぎきってみせるッ！

「我が右手に有りし星の杯よ 天より授かりし輝きをもって 我らが盾となれ——」

「ぬッ！？ 魔法陣を解除したか。だがもう遅いッ！」

糞ッ！ ギリギリかッ！？
間に合えッ！

「——“ビッグバン”！」
「——“グラールスファイア”！」

瞬時に俺の足元に白く輝く魔法陣が展開される。

その光は俺を包み、一つの膜を形成した。防御魔法をギリギリ展開した直後、俺の視界は白に染まった。轟音により音も消え、俺の感覚は一時的に消える。衝撃は防御魔法が吸収してくれたようであるともないが、視覚や聴覚が消えている為に、自分が立っているのか倒れているのか今一つわからない。

馬鹿げた威力だな……

そんな感想を漏らし、俺は感覚が戻るのを待つ。どうせあちらもこの砂塵が消え去るまで行動はしないだろう。

ようやくか……

やっと視覚や聴覚が治って来た。だが未だに砂塵は消え去らない。そろそろ消えてもおかしくないんだが……

やっとのことで砂塵は消え去る。
俺の眼に入る爺さんは肩で息をしていた。どうやらあの魔法は爺さんでも簡単には扱える魔法ではなかったようだ。

「クククツ……ハハハハハッ！　まさかあの魔法を防ぎきるとはのッ！」

肩で息をしながらも、大声で笑う。

その顔には嘲りなどはなく、正真正銘の畏敬が存在した。

「流石に負けたかと思ったけどな……」

「カカカツ！　僕は間違いなく勝ったと思ったがの！」

「ま、俺もそう簡単には負けられないってことだな」

俺は鏡を見る。

そのところにはちょうど俺が思い浮かべた二人。

「なるほどのお……」

「俺も情けない姿を見せて幻滅されたくないからな。だから――」

俺はニヤツと笑いかけた。

「――この勝負、勝たせてもらっぜ？」
「何ッ!？」

俺は瞬時に爺さんを拘束魔法で動きを封じる。簡易的な魔法なので解呪しようとするが俺には問題はない。二重三重に拘束魔法を重ね掛けを行い、ある程度拘束出来たら大がかりな魔法陣を発動。これにより完全にさつきと攻守交代の立ち位置となった。

「まさかやり返されるとはの……」

「解呪はしないで大丈夫なのか？」

「今必死でやっているとこじゃよ」

「なら俺も早く仕上げに向かわせてもらうか！」

俺は即座にある術式を組み上げる。

今の俺では想像だけでは足りないので詠唱を唱える。

「万物の調停者にして古きもの 全てを従えし烈王の王 風の中に座す

偉大なる御名において 万物の調停者のまたものたる 竜胆の我は 勅命によりて魔術を使役する 完成せよ！ “シオネの円環”！」

俺の目の前に出現する小さな円環。

それは少しずつ回転する。それを訝しみながら眺めていた爺さんだが、少し時間が経つと驚愕とした声を上げた。

「ま、まさか……その円環は魔力を吸収しているのか……？」

「お、よくわかったな？」

尚も吸収し、その円環は高速で回転していく。

シオネの円環とは、あらゆる魔力を吸収し、その術者に宿す禁術に位置する魔法。

円環は術者が命令を下すまで愚直に魔力を吸収していく。

「あいにくとこの場には馬鹿みたいに魔力があるからな」

最高位に属する二人の魔導師が戦った場所。その場所には大量な魔力が空中に浮かんでいる。しかも、先ほど使った最上位の魔法も後押しとなっている。

「ハハハハハッ！ これは完敗じゃなッ！」

「ならこれで終幕といこうか」

俺はシオネの円環を停止させる。

シオネの円環によって吸収された魔力は今や俺の身体の中にある。その魔力を以て最強の一撃を放つ。

「光輝背負うもの 秩序と法の神 聖なる峰の頂に座す至高の神――」

俺の天高い頭上に巨大な魔法陣が展開される。

それは白く輝き、太陽よりも辺りを照らしていく。

「世界樹に光を持って請願す 秩序の刃 法の弾 光帯びしもの――」

その光を圧縮する。

圧縮したその光は俺の手のひらに収まるくらい。だが、その魔力は計り知れない。

「願いを捧げ 無限の光により敵を撃つ――！」

「今回は僕の負けのようじゃなッ！ 一也とはまた闘いたいものじやッ――！」

俺はしばらくゴメンだ……—

「——“アイン・ソフ・オウル”！」

俺は手のひらに収まっていた光の弾を爺さんに投げつけた。
その光は爺さんに直撃し、そして——

魔法球を壊し、二人を外に強制的に戻した。

「勝者、御薙一也——ッ！」

18・死闘・後篇（後書き）

テスト前だというのに書いてみた。

今回は何か厨二病全開な感じで、自分で読みなおすと本気で恥ずかしいw

次からは戦闘は休憩になって、レイラとアイリとの話になるかな？

まあ今度こそはテスト明けに投稿だと思います。

最近は時間が何気に取りれてたから投稿出来て良かった。

19・平穩（前書き）

思った以上に時間が経ってしまいました。二週間くらいの予定が一月近くも時間が空き、本当に申し訳ございませんでした。

「魔法球を壊すのはやりすぎじゃよ……」

先ほどまで激闘を繰り広げた爺さんは溜息一つ零す。

今は魔法球も壊れ、現実世界へと戻ってきた。先ほどまでの戦いは魔法球の中だけでのもののなので、俺も爺さんも怪我の一つどころか、汚れ一つすらない。

「いや、俺も流石にあんなに威力があるとは思ってなかったんだよ」

あれは本当に予想外だった。もっと小規模の爆発が、核が爆発したかのような威力と範囲になってしまった。無意識的に想像しすぎたのか、それともシオネの円環で予想以上に魔力を吸収しすぎたのか。

まあ実害はないからそこまで悩まずとも問題はないか。

「ま、これで全戦全勝だな。二人には情けないところを見せずに済んでよかった」

「そうじゃな。さて、俺もそろそろ行くかの」

「どこか行くのか？」

「なに、この場には主役しかいらんじゃろ？ 俺達みたいな脇役はさっさと舞台を降りてしまわんとな」

そう言つて爺さんは魔法で姿を消す。

結局この場に残るのは俺一人。少しするとおっさんが近づいてきた。その後ろにレイラとアイリさんの二人。

「成功……だな」

「ああ。少しはこれで認められたかな？」

これだけは自信が持てない。

強いだけでは意味がない。かと言って力がなければ自分の意見を押し通すことも出来ない。力だけでも意志だけでも足りない。この二つが合わさって初めて意味がある。

「——大丈夫ですよ」

「え？」

優しい声音に俺は茫然とする。その後ろにはアイリさんの優しい笑み。

「あれを見てください」

レイラが指差す方向を見ると――

「良い試合だったぞ――！」

「頑張ってたね――！」

「私達にも出来ることがあった気軽に言ってよ――！」

観客席から飛び交ういくつもの声援。

今まで話したことない人達が声を掛けてくれる。もちろん、その中にも城にいる知り合いなども含まれていた。

「一也さんはあれだけの人の心を動かしたんです。だから誇っていいんですよ」

「そっか」

俺は不覚にも感動して、涙を零しそうになった。それをグツ、と

堪え、こんな俺に声援を掛けてくれている皆に返す。

「皆、少しずつだが、それでも前へ向かって進む。もし俺が進む道を間違えたのなら力で排斥してもらって構わない。だが、それでも俺はおっさん達が目指すその場所へと辿り着くつもりだ。だから、見守っていてほしい——ッ！」

「……「ワアアアアアアアアアッ！」……」

ありったけの声と思いを込め、語りかけた。
それに呼応するように、皆も声を上げる。声は一つとなり、空へと吸い込まれていく。

「大分愛されてるじゃねえか」

「ははっ。予想外すぎて涙が出てくるな」

バレないように涙を拭う。レイラやアイリさんは気付いていたかもしれないが、何も言わないでくれた。

「さて、今からドンチャン騒ぎだな。今日は騒ぎに騒ぐぞ！」

そう言っておっさんもどこかに行く。あの口ぶりからすると、後で今日の祝いでもするのか？

「後数時間後にいつもの場所でドンチャン騒ぎをするそうです」

「私達も後でいきましょう？」

「……そうだな。まあまだ時間はあるだろう？　ならゆっくりしようか」

俺は二人にそう言っただけで地面に寝転がる。体力、精神力ともに大分と使い果たした。横になるだけで疲れは一気にやってきて、睡魔に

襲われる。

「そんなところで横になつては汚れますよ？」

「あ、あ……」

もう……無理。

「一也さん？」

「……………」

side レイラ

地面に横になつて目を閉じた一也さん。

三連戦、それもこの世界でも最強に一番近い人達との激戦を繰り広げて、体力も精神力も極限もすり減らした戦いも終わってホッ、としたんでしょね。

スヤスヤとした呼吸音が静かなこの場所に木霊します。

「一也さん……」

私はそんな安らかな寝顔を浮かべる最愛の人を愛おしげに見詰める。

汚れるのすら構わず私も地面に腰を降ろし、自分の膝に一也さんの頭を乗せる。少しだけ反応があったけど、すぐに気持ちよさそうな顔に戻ります。

アイリさんは私のそんな様子を羨ましそうに見ています。

「こついつのは早い者勝ちですからね」

「今日は譲っておきましょう」

少しだけ不貞腐れたように言うアイリさんは新鮮で、とても綺麗に見えました。

「疲れたんでしょうね」

「そうですね。あれほどの戦いを三連戦で繰り広げましたからね。普通の人なら一戦目で終わっているでしょうし」

「そうですね」

静かな時間が流れて行く。私とアイリさんの会話も一、二言話し、また口を閉ざす。それを繰り返して短い会話を続ける。

風が優しく流れ、私達三人を包み込む。季節はアイヴィーの月。花達が芽吹く生命を司る季節。朗らかでありながら力強い光が辺りを照らす。

「凄いですよね、一也さんは……」

「どうかしましたか？」

ふと呟いた言葉をアイリさんに拾われた。

「いえ、ただ凄いなあ、と改めて思っ……」

「そう……ですね」

「アイリさん？」

「いえ、何でもありません」

たまに、本当にたまにアイリさんが今みたいな、何かを悔やんでいる顔を見かける気がする。それが何なのかはわかりません。本当に悔やんでいるのかすらわかりませんし。でも、私の思い違いじゃ

なかつたら――

「どうかしましたか？」

「あ、いや何でもっ」

変に考えていたのが顔に出たようです。うう、何でこう、考えたことが顔に出るんでしょうか。癖……のようなものですか？　こんな癖は嫌です。

「……………」

「……………」

私達は喋らない。チラ、とアイリさんの方をしてみるけど、先ほどのような悲しそうな、悔やんでいるような顔はしていませんでした。

やはり私の見間違いなんでしょうか。

「……アイリさん」

「何ですか？」

「今、幸せですか？」

「ッ……、はい。幸せです」

「そうですか」

一瞬躊躇ったかのような返答。

やっぱり何かあったんでしょう。しかし、私は問い詰めたりしません。長らく一緒に育ってきたといっても間違いでないアイリさんが話してくれないような内容を、私が土足で踏み込んでいいものとは思えません。それに、本当に辛くなったのなら――

「――私や一也さんはちゃんと待ってますから……」

「ッ！　ありがとうございます……」

私達はアイリさんの味方なんですから。

）side　アイリ）

レイラ様の膝の上で安らかに眠る一也様。本当なら私が膝枕をして差し上げたかったけれど、早い者勝ちということでレイラ様に膝枕をする権利を奪われてしまいました。

その時に恨めしそうな視線を送ったのは内緒です。

最強の名に最も近い三人から勝利をもぎ取った我が主。

最後の最後まで諦めず、自分の力だけでその場所に至った本当の強者。私では到底辿り着けない境地に至っている一也様を見つめる。歳だけなら私より若い、それだというのに……

「凄いですよね、一也さんは……」

「どうかしましたか？」

ふと呟かれたその言葉に思わず私は反応してしまいました。

「いえ、ただ凄いなあ、と改めて思っ……」

「そう……ですね」

私も本当にそう思います。

私では絶対に無理だった、そんな場所にいる一也様……

「アイリさん？」

「いえ、何でもありません」

これはもう終わったこと。それを何時までグジグジと思い悩むなんて私らしくない。

あれはもう過去。それでいいじゃないか。そう思うのにどうしてか、心は言うことを聞かない。溢れだす感情。制御出来ない想い。それらが混ざり合い、形状し難い感情となり私の中で暴れまわる。それをどうにかして無理やり押さえつける。表面上は何時も通りレイラ様や一也様にはこんな醜く、みっともない姿は見せたくない。

「どうかしましたか？」

「あ、いや何でもっ」

それでもやはり長年一緒に居たレイラ様には少しだけ感づかれている様子。内容までは気付かれてはなさそうだが、それでも何かあったとは感ずかれていそうです。

「……………」

「……………」

無言が続く。これで凌ぎきったと思っていたのに、次の言葉で私は大きく心を揺さぶられた。

「………… アイリさん」

「何ですか？」

「今、幸せですか？」

息が詰まりました。そんな質問をされるとは思っていなかったから。

いつもの、平常時ならなんのことはない質問。しかし、今の私の

心でそんな簡単に捉えることが出来ない。

「ッ……、はい。幸せです」

「そうですか」

それでも平常を装って答える。こんなところで躓くなんてことは出来ない。けれど、こんな陳腐な答えではレイラ様を騙すことは出来ないようでした。

「——私や一也さんはちゃんと待ってますから……」

「ッ！ ありがとうございます……」

そう声を掛けられ、思わず泣き出しそうになりました。

私は貴方達と違って薄汚い人間なんですよ？ それでも信じてくれるというのですか？

本当に信じていいのでしょうか……？

side out

「う……ん？」

少し肌寒い風が身体に当たり、俺は眼を開ける。

地面で寝たというのに、柔らかい何かが下にある。俺はぼやけた目の焦点を合わせる。すると、俺の頭上にはレイラの顔が。その横にはアイリさん。どんな状況だ？

「レイラ……？」

「はい？」

「どういう状況？」

「えっと、お気に召しませんでしたか？」

「へ？」

俺は改めて自分の状況を見る。頭上にはレイラ。自分の頭の下には柔らかい何か。レイラは座っている。これらを踏まえて考えると

……

「膝枕？」

「そうです」

「あゝ……」

何か言おうとしたが、止める。別に害がある訳でもないし、悪意があつてやったわけでもないし。それに初めて異性に膝枕なんてことやつてもらつて役徳だし？

「そろそろ宴のお時間ですけど……どうしますか？」

「もうそんな時間？」

「はい。一也様は結構寝ていたので……」

「んじゃ行くか。一応俺が主賓だろうしな」

「畏まりました」

そう言つて立ち上がるアイリさん。俺もそれに続いてレイラの膝の上から離れ立ち上がる。その瞬間、レイラが少し名残惜しそうな顔をしていた気もしたが、見間違いだらうと思ひ気にしない。

「さて、行きますか」

飲んで食べてのドンチャン騒ぎが始まってから数時間。

参加者は俺、レイラ、アイリさん、おっさん、爺さん、リーク爺さん、リーネさん、ハイネさん、キリクさんと王国の主要人物や大臣なんかも参加していた。

初めは今日のお祝いみたいな感じで楽しかったさ。それが狂いだしてきたのは、少し時間が経った頃だろうか。

「一也くうゝん、楽しんでますかあゝ？」

「ハイネさんっ！？」

いきなり寄りかかれ驚く。そしてそれと同時に気づくことが一つ。

「酒臭ツ！　どんだけ飲んだんだよ！」

「お酒なんて飲んでないよおゝ」

「酒飲んで酔っ払ってる奴は皆そう言うんだよ！」

明らかに大量のアルコールを摂取したであろうハイネさんが絡んでくる。

周りの助けを求めてみると――

「――全員眼をそらすなよッ！」

「ほらほら、一也君も飲んでえゝ」

「てか飲んでるじゃねえか！」

無理やり手に持っていた杯に酒をなみなみと注がれる。俺自身、元居た世界で爺さん達によく飲まされていたから平気だが、下戸と

いう程でもない。

「無理やり飲ませるなよ……」

注がれたものはしょうがないので、俺は一気に飲み干す。周りからはおおー、との歓声。

んな歓声はいらないんだが。

「いい飲みっぷりですねえ」

「誰かこの馬鹿を引きとつてくれ」

絡まれるのは面倒なので、ハインさんの上司であるリーネさんに引き取ってもらう。その時に嫌そうな顔をされたがご愁傷様と言うことで。

「タクツ……」

「一也さあゝん」

「ぶっ！」

眼の前から歩いてくるのは完全に出来あがったレイラ。手には酒であろう瓶が握られており、それをラッパ飲みしながら歩いてきた。

「誰だよ、レイラに酒を飲ませた奴は！？」

「楽しんでますかあー？」

俺に抱きつきながら話しかけてくる。その時に柔らかい何か当たるが、無視！

周りを再度見回すが、今度は気付かない振りで誤魔化している。

「テメエら！ 後で覚えておけよッ！」

「一也様」

困った時のアイリさん！

なんて良いタイミングで来てくれるんだ。この人は女神か！

「一也様」

「ん？」

何か様子がおかしくね？

「私のお酒が飲めないんですか？」

「この人も酔ってるよッ！？」

予想外だよ！ てか逆効果じゃねえか！

もうまともな人はいないの！？

「酔ってません」

「酔ってる人ほどそう言うんですよ、アイリさん」

「酔ってません」

「一也さぁーん」

なんというカオス。

俺一人じゃどうすることも出来ない。

「ほら、飲んでください」

「いや、ね？ 俺さっきたくさん飲んだから」

「私のお酒が飲めないとでも？ わかりました。なら口移しで飲ましてあげましょう」

「ぶっ！」

「ああー！ それなら私がやりますうー！」

「落ち着けよ！」

收拾がつかなくなってきた。てかこの壊れ方は異常だろ。ここま
で悪酔いする人初めて見たぞ。

「一也さあん……」

「一也様……」

「二人とも……？」

二人して抱きついていたのが、急に静かになったな。

「ううん……」

「すう……すう……」

「寝ちやつたか」

今日は精神的に来るものが多かったし、それに俺の戦いも気疲れ
の原因になったのかな。

戦い前もおもいつきり心配されてたし。

「ありがとな。二人とも」

「えへへ……」

「ふふっ……」

俺は少しだけ二人の寝顔を独占して、二人を寝室まで運んだ。

その後はおっさん達と一緒に朝まで騒いでいた。キリクさんとり
ーネさんがウワバミだったのには心底驚いた。

19・平穩（後書き）

次で一章の王国編は終了です。やっと学園編に突入出来ますよ。長かった……。

EP・旅立ち（前書き）

一章最終話をお届けします。あれ？　なんかこれだと物語自体が終わる雰囲気みたいじゃ……

これは一章の終わりですからね！。二章もちゃんとありますからね！。

EP・旅立ち

混沌な宴があつてから数日。

今日は俺達三人が学園へ向かう一日前。学園へ持っていく物の準備などを急ピッチで仕上げていく。ここ数日はゆっくりした覚えがまるでない。

「めんどくせえ……」

こつちの世界に来てまだ一月ほど。自分の物など、この間レイラ達と一緒に服を買いにいった物くらいしかなく、楽出来るんじゃないかと思っていたのが四日前。その時に必要そうな物は買ってこいと言ったのがおっさん。

しょうがないから買いに言ったのはいいが、何が必要かまるでわからなかった。まあ、衣食住を基本として、食と住はあっちで手に入れるから、衣を買いに行こうと思ったが俺にはセンスがない。

仕方なくレイラやアイリさん達に着いてきてもらおうと思ったが、二人とも忙しくて断られた。

その話をした時、終始悔しそうな顔をしていたのが気になったが、そのおかげで知り合いを一通り当たってみて、誘えたのがリーネさんとハイネさんだけ。この時点で嫌な予感はしたが、俺一人ではどうしようもなかったので、無理に納得して二人に着いてきてもらった。どんな感じだったかは想像してほしい。

ただ、ハイネさんが暴走していたとだけ言うておこう。

「正直買い過ぎたな……」

当初なら小さな鞆に詰め込むだけ済むくらいの多さだったのに、今では小さな小山を作り上げるほど。服の他に小物や本。よくわか

らないぬいぐるみなんかもある。

「俺も何でこんなものを買ったのか……」

今考えてもわからない。

あの時はそれほど混乱していたんだろう。

「あれ？ 魔法使えばいいじゃね？」

俺もすっかりと忘れていた自分の魔法を思い出す。

収納魔法として創ったのに覚えていなかったら意味がない。

「んじゃ使いますか。 “次元空間”」

眼の前に黒い穴が浮かび上がる。俺はその中に小山を築いているものを全て放り込んでいく。全部放りこめたので穴を閉じる。

「てか中にまだ狼いるな……まあいいか」

中に居たジェネシクウルフの死体は気にせず、俺は持つていく物の整理がやっと終わったことに息をつく。

時刻はちょうど太陽が真上を上った程度。俺は未だ昼食を取っていなかったので、ちょうど良いと思い部屋を出た。

「おっす」

「あ、一也さん」

広間に来ると、ちょうどレイラも昼食を食べていた。俺も厨房に居るコックに料理を頼み、席に着く。

「今日はアイリさんは一緒じゃないのか？」

「はい。今日は他のメイドさん達に教えなくちゃならないことがあるそうです。元メイド長でしたしね」

「そういやそうだったな」

少し話をしているとすぐに昼食が運ばれてくる。話しを一旦中断して一口。うん、やはりおいしい。

「遂に明日ですね……」

「ん？ そうだな」

「……大丈夫ですか？」

「何が？」

「全部、です。救帝者のこととか、学園のこととか全部です」

「そうだな……」

俺は一度食器を置き、眼を閉じる。思い返すのは今までのこと。そして――

「うん、心配なんていない」

「そうなんですか？」

「ああ。俺はもう一人で背負ったりしないからな。レイラも一緒に背負ってくれるんだろ？」

「それはもちろんです」

「なら何も心配なんてないさ」

俺は笑いながらレイラに話しかける。その顔を見て安心したのか、

レイラも同じように笑みを零す。

最後の一口を食べ、食器を下げて貰うよう頼む。

「どっちにしろ、俺は何時も通りに行動するだけだしな」

「そうですか。なら何も心配はいりませんね」

俺が席を立つと同時にレイラも席を立つ。

「んじゃまた後で」

「はい。それでは」

そう言葉を交わし、俺はレイラと別れる。レイラはまた荷造りに戻るのだろう。

俺はどうしようか……

「おっさんと少し話でもしてくるか」

おっさんの場所を城の中に居る人達に聞いてみると、どうやら書斎にいるらしい。

何か探し物でもあるのか？ などと思いながら、俺は書斎がある場所へと足を向けた。数分も歩くと、書斎の扉が眼に入る。

俺はドア越しに声を掛け、おっさんに入ってもいいかどうかを尋ねた。

「おっさん、俺が入ってもいいか？」

「一也か？ 構わんぞ」

何か俺俺詐欺みたいな感じだが、まあ気にはしないでおう。
おっさんの許しも貰ったので、俺は重厚な扉に手を掛け押し開く。
扉は見た目とは違い、案外簡単に開く。

俺は扉を潜り抜け、中へと身体を入れる。

書斎にはおっさんが一人。何故かその近くには積み上げられた本の群れ。それは軽く山を形成している。

「何か探してるのか？」

「ん？ まあ……な」

なんとも齒切れが悪い。俺が聞いては駄目なことを探していたのか？

もしかすると国家運営の情報とかなのかもしれない。間違つて外にそんなことが漏れたら酷いことになる。俺はそう思って、調べている内容にあまり深入りしないことに決めた。

まああまり人の隠していることを暴こうとするのも良くないと思うし。

「何か用か？」

「いや、特になにもないんだけど……」

「なんだそれは……」

呆れられた。

仕方ないじゃないか。俺としてはやること全てを終わらせて何も用事はないし。かといってレイラやアイリさんは未だに忙しい。それ以外に仲の良い人物など俺には限られてくる。

今回はそれがたまたまおっさんだったというだけだ。

「明日……か」

「ん？ そうだな」

探し物を一旦止めたのか、おっさんは手に持っていた本を横に置き呟く。

眼は外に向けられ、そこは紅の夕日が漂っている。

「これから少し、寂しくなるな」

「おっさんはそんな玉なのか？」

俺は笑いながら声を掛ける。しかしその顔にあるものは紛れもない本物の表情。

笑っていた顔も、そのような顔を見てしまつては出来ない。俺も笑うのを止め、まじめな態度で話しかける。

「お前をまだ召喚してから一月ほどしか経っていないというのに、俺には元来の友のような感じがする」

「俺はそうでもないが……それでも友という感じは共感出来る」

「そうか……」

「ああ……」

会話はそれで途切れ静寂が二人を包む。鴉のような漆黒の鳥が、紅い夕暮れの中を飛び回り、鳴き声を鳴らす。それは夕暮れの証。その鳴き声を聞いた商人たちは店じまいの準備を始める。

「お前がこれから行くところはあまり俺達は手を出せない。正真正銘、お前に立ち向かって貰わないといけない」

「わかつてるよ」

「本当なら俺も着いていつてお前を支えたいんだが……それはレイラやアイリに任せる。ただお前は自分の信じた道を進んでほしい」
「当たり前だ」

今までそうして俺は生きてきたんだ。今さら変わる筈もないし、変える気もない。これが俺であり、俺の象徴。誰でさえ覆すことは出来ないし、させない。

「だからおっさんは安心してここで待ってるよ。茶でも飲みながら全てが終わった後のことでも考えて、そっからの政治云々は全てそっち受け持ちなんだからな？ 政治なんぞ俺は一切関わるつもりないし」

「クククツ、わかってるよ」

「そうか。なら……大丈夫だな」

俺は立ち上がり扉に手を掛ける。今はもう日も暮れ、夜の帳が下りている。予想以上におっさんと話を続けていたようだ。

「おっさんなら後のことを任せられるからな。頼むぞ？ 異世界の友」

「ああ、任せておけ。異世界の友」

おっさんも同じように部屋を出る。

二人で次に並んで歩くのは、この世界から“救帝者”の概念がなくなった後のことだろう。今は、まあ最後の晩餐でも楽しんで来よう。

おっさんやレイラ達との晩御飯も済まし、一足早く風呂にも入り、後は寝るだけとなった。時間的にはまだ寝るには少し早いというく

らいか。

寝ようか寝まいか考えていると、扉のところに一つの気配。誰だろうと思っているとすぐに声を掛けられた。

「一也様、アイリです。入ってもよろしいでしょうか？」

「ん？ いいぞ」

俺が了承の旨を伝えると、扉はすぐに開かれた。アイリさんが入ってくると、その手には一つの瓶。

「飲みませんか？ 今日は月が綺麗でおいしいですよ？」

「え。？」

俺はそんな声をあげてしまった。何故ってこの前の惨状が鮮明と思いだされるからだ。あの混沌の情景。意味が分からない酔い方をするレイラとアイリさん。

もうあんな体験はこりごりなんだよ。

「ああ、大丈夫ですよ。この間は間違って強いお酒を飲んでしまつて……」

恥ずかしそうにそう言うが、俺はあんまり安心出来ないんだが……

「それにこのお酒、果実酒ですから大丈夫ですよ」

「それなら……大丈夫か」

「お注ぎします」

「ありがとう」

グラスを手渡されて、その手に持つ血のようなルビー色の果実酒を注がれる。年代などはわからないが、夜空の下で宝石のような光

を發するので、間違いなく上物だろう。

俺だけ飲むのもどうかと思い、一応度数も低いということなのでアイリさんにも注ぐ。

「乾杯」

声を合わせる気はまったくなかったのだが、二人とも同時に言葉を發し、グラスを鳴らし合う。グラスを傾け飲むと、アイリさんの言葉通りきつなくなり、飲みやすい。これなら悪酔いもしないだろう。

「……うまいな」

「ラングル王が出立のお祝いとしてくれたんです」

「おっさんが？」

「はい」

おっさんも酒を飲むのか……

そんなことを思いながらグラスを飲み干す。飲み干せばそれを同じくしてアイリさんが注いでくれる。月夜の下で美女に酌をしてもらっているので、より一層味がおいしく感じられる。

それなのにこの人は……

「……一也「無理はしなくてもいい」ッ!？」

「わざわざ酒なんか持ちだすんだ。何かあると思うのは当然だろう?」

驚いた様子のアイリさんを尻目に見ながら、俺は話し続ける。

「薄々気づいてはいたよ。アイリさんが何か隠している——いや、この表現は正しくない。何か過去を引きずってるっていうのが正しいか」

「一也様……」

「初めは俺の勘違いかと思ったけど、日が経つことに疑問は確信に変わっていったよ」

時折見せるあの表情は流石に見逃せなかったしな。ただ踏み込むことは出来なかった。それが正しいのか間違っているのかわからなかったから。

「確かに俺にその事情を話してくれるのはうれしいよ。信頼されると思っからな。けど、酒を使って無理矢理話したところで意味なんかないだろ？ 話してくれるのなら、酒なんか頼らずアイリさんの意思を持って話して貰いたい。そうじゃないと俺もどんな対応すればわからない」

月は辺りを優しく照らす。その光は誰しも平等に。だからこの不安を抱える女の子を照らしてあげて欲しい。

「だから俺も待つよ」

「何で……何でこんな隠しごとをしている者に優しくしてくれるんですか？」

「誰だって隠しごとの一つや二つはあるだろ？ 俺だってレイラやアイリさんが知らないことは一つや二つ以上にあるぞ？」

「そうですけどッ！」

「ならいいだろ。それにいつかは話そうと思ってくれてるんだろ？ なら俺もレイラも待つてるだけさ」

「……………」

振りかえった先には——涙を流すアイリさん。

「駄目です……。そんなに優しくされると、抑えきれ……ません……」

ッ！」

「泣きたいときは存分に泣くのがいいと思うぞ？」

「あ……ああああああッ！」

俺の胸の中で泣きじゃくる。

ずっと溜めこんできたんだろう。誰にも話せず、誰にも自分の弱さを見せない。それは確かに強いかもしれない。けど、それは悲しいことだった。誰にも寄りかけられず、たった一人で生きているのと同じなんだから。

「アイリさんは俺を支えてくれるんだろ？　なら俺もアイリさんを支えるよ。だから今は無理なんかしないでいいんだ」

支えてくれるのなら俺も支えよう。

だから無理なんかしないでいい。アイリさんを助けてくれる人はたくさんいるんだから。

「すみません。汚してしまって……」

「そんなことは気にしないでいいって」

あれから大分泣き続けて、今はやっと泣きやんだ。長い間溜まっていたものが全て吐き出したんだ。こうもなるだろう。

「もう大丈夫……だな」

「はい。本当にすいません、ご迷惑をおかけしてしまって」

「気にしないでいいって言うてるだろ？　俺もアイリさんにはたく

さん迷惑をかけてるんだからこのくらいはどうってことない」

「ですが……」

「ああもう……。なら今度何か頼むからそれでチャラってことにするな。それでいいだろ？」

「……はい、わかりました」

やっと納得してくれた。

さっきまで泣いていたのが嘘のように強情だった。何気にアイリさんって融通効かないからな。

「どうかしましたか？」

「いや……。それよりそろそろ戻った方がいいだろ。今日は早く寝ないと明日がキツイぞ？」

「そう……。ですね。では今日はこのくらいで部屋に戻りますね？」

「ああ」

そう言ってアイリさんは俺の部屋の扉に手を掛ける。しかしすぐに出て行くと思ったのだが、何故か立ち止まる。そして振り返った。

「……いつかきつとお話します。だからその時まで待っていてください」

「俺もレイラもいつまでも待ってるさ」

「……ありがとうございます。我が敬愛せしご主人様——」

月に照らされた彼女の笑顔は今まで見た笑顔のどれもより綺麗だった。

「久しぶりだな。俺が見惚れるなんて……」

そんなことを思いながらベットに横になり、明日に備えて眠りに

ついた。

春風が吹く。

周りには今まで知りあった城の人達が、俺達の出発を見送ってくれている。

俺、レイラ、アイリさんは荷物を全て馬車に乗せ、後は自分達が乗れば出発という状況。最後に皆と言葉を交わして出発するつもりでいる。

「準備は万全なのか？」

「ああ、特に問題はないだろ」

最後の確認をおっさんがしてくる。まあ途中でないことに気づいても買い足せば間に合うだろう。お金も俺がギルドで稼いだのが残っているし、いざとなったら学園の方にあるギルドで稼ぐこともできる。

「寂しくなるのう」

「おっさんと同じことを言うなよ、爺さん」

「そうじゃったのか？」

「ああ」

結局は皆がその気持ちを持っている。

一カ月程しかこの場所には居なかったが、それでも俺もこの場所が好киになった。これだけの人と仲良くなったのも初めてだったかもしれない。

「あつちでも頑張るんじゃぞ」

「私達を倒したんだから他の学生なんかに負けたら承知しませんよ」
「わかってるよ」

リーク爺さんとリーネさんの激励。

「僕はあまり喋れなかったけど。まあ頑張つてね」

「何かあつたら連絡してねえ。すぐに助けに行つてあげるよお」

キルクさん、ハイネさんの応援。

「じゃあ行つて来い！ レイラ、アイリ。こいつのことを頼むぞ？」

「はい、お父様」

「わかっています、ラングル王」

おっさんがレイラとアイリさんに声を掛ける。

そして――

「じゃあ行つてくる」

「ああ」

そしてレイラ、アイリさんが馬車に乗り込む。俺は一番最後に乗る。

その前にもう一度だけ振りかえり、今までの礼を込めるかのよう
に頭を下げた。荷台へと乗り込み、外を見る。そこではおっさん達
が手を振ってくれている。

「いつまでも見ていると寂しくなりますよ」
「わかってるよ」

アイリさんの言う通り。だから最後にこれだけを送ろう。

「咲き誇れ 花は芽吹いて命を育む——」

「一也さん？」

いきなりのもので驚いている二人だが、俺はそれを笑って外を見ると目線で合図した。

それに伴って外を見る二人。

「—— 出会い別れて 巡り巡りいつかまた出会う “桜吹雪”」

「うわぁ……………」

「綺麗……………」

魔力により擬似的な出会いと別れを象徴する花、桜を大量に創り上げる。それを風の魔法により行き渡らせ幻想的な世界を創り上げた。

「いつかまた戻ってきたら皆で騒ごうなあ——ッ！」

EP・旅立ち（後書き）

次からはようやく学園編。まあプロローグですから、まともに学園編に入るには二、三話語ですけどね。

まあこれからもゆっくりと更新していきます。

そっぴゃあ新作を一本載せようか迷う今日このごろ。なんかこの作品も一章完結でキリがいいし、もう一本行こうかと思いつつも、バカテスそっぴゃあ凍結させてるじゃん俺、とか思うと載せづらいw
バカテスは一度消して、改稿した方がいいような気も最近してるし、まあ余裕が出来たら考えてみることにしようかな。

そう言えば、とうとうお気に入り数が1,000を超えました！本当に皆さま、私の稚拙な文を読んでくださってありがとうございます！す！

これからも精進していきますので、応援よろしくお願いします！

OP・入学式（前書き）

ようやく学園の始動。と言ってもプロローグだからそこまで関係ないかも

OP・入学式

「ここが学園？」

「そうです。ここが今日から私達を通う学園——ルイスフェーレンバルグ学園」

長い旅路の果て、ようやく俺達三人は目的地であるルイス学園へと辿り着いた。

眼前に広がる学園は広く、今まで暮らしていた城などよりも大きい。ここからでは校舎が小さく見え、どれくらい広いのかが窺える。とりあえず馬車を降り、今まで運んでくれた御者にお礼を言う。

御者の人はそれを見て、今来た道を引き返して行った。代金の方は既におっさんが払っていたらしい。

「さ、とりあえず中に入って辿り着いたことを学園関係者に伝えに行きましょう」

「ああ。でもどこに行けばいいんだ？」

「校舎の前に受付の人が居ると思いますので、そこまで行けばいいのではないのでしょうか？」

「そうなのか？　なら行こうか」

目的地も決まったことなので歩き始める。周りにも同じように伝えに行く人達で溢れている。その人達は俺達の姿を見て一度は振りかえる。その中でも男連中は絶対に振りかえりレイラとアイリさんの姿を確認し鼻息を荒くしている。たまに女の子も同じような症状に見舞われている。

そんな光景を眼にしながらも足を休める暇はない。黙々と歩いていく中、懐かしい顔を見つけた。

その少女もこちらを発見し走り出す。

「久しぶりだね、レイラ！」

「久しぶり、フィル！」

どうやら二人は知り合いだったらしい。

てか俺のことには気付かないのか？ それだと流石に寂しいんだが。

そんなことを思っていると、レイラの他にも人が居ることを思い出しフィルはこちらにも顔を向けた。

初めは笑顔で、そしてすぐに驚愕の色に染まった。

「えっ！？もしかして一也さんですかっ！？」

「よっ、久しぶり」

「え、あ、え？なんで一也さんがここに？学園には通ってなかったんじゃ……？」

「今まではな？今日から通うんだよ」

「そうなんですか……」

フィルは未だ茫然とする中、レイラはおもしろくなさそうな顔をこちらに向けていた。

俺は何がそんなおもしろくなさそうなのかわからなかったが、アイリさんも似たような表情をしていたので何も言えなかった。

「どこでフィルと知り合ったんですか？」

「ん？ああ、この間——と言っても前か。初めて俺がギルドに行った日があるだろ？その時にチンピラに襲われてるところを助けたんだよ」

「そうなんです。一也さん、本当にあの時はありがとうございました」

「そうだったんですか」

俺とフィルがどうやって知りあったのかを知ると、レイラの雰囲気もいつも通り柔らかくなった。

そこで俺の後ろに控えていたアイリさんのことも思いだし紹介する。

「こっちに居るのがアイリ・フランスさん。俺専属のメイドさんだ」

「初めましてアイリ・フランスです。以後お見知りおきを」

深ぶかと丁寧にお辞儀をする。

礼儀正しい——この場合は正しすぎるような気もするが。

「こちらこそよろしくお願いします。フィル「知っていますよ?」え?」

自己紹介の途中でアイリさんは口を開いた。

「レイラ様が話していましたから。歳は下ですが仲良い友達が居ると」

「あ、アイリさんっ!？」

「フフフ。レイラ様のことをよろしく願いますね? レイラ様も友達と呼べる存在は少ない方ですから。このような存在は大切なんですよ」

「はい! 任せてください!」

にこやかなフィルに対してレイラは恥ずかしそうに顔を俯かせている。その様子を微笑むアイリさん。俺もアイリさんと同じように微笑んでいた。

「もう……」

「そうむくれるなよ。アイリさんも意地悪で言った訳じゃないんだから」

「わかってますよ……」

「さて、こうやって談笑するのもいいんですが時間もあまりありません。早く受付のところへ向かいましょう」

俺はレイラを宥め、アイリさんが纏め上げる。

アイリさんの言葉には誰も異存はなく、すぐに首を振り受付へと向かった。

「なんか色々しないといけないと思ったけど、そうでもないんだな」
「それはそうでしょう。というより私も普通に受け入れられましたね」

「ああ、それには流石に驚いたな。おっさんが手回ししてくれたのか？」

普通なら問題になりそうなアイリさんの存在も全然問題にならず、それ以上に授業中も俺の傍に控えていていいとまで言われた。大丈夫なのか？

釈然としないままもおっさんの手回しには感謝する。だが、するのなら先に伝えて欲しかった。わざわざ馬車の中でアイリさんの処遇について考えなくても済んだのに。

「多分そうだと思います。そうじゃないところも簡単にいく筈あり

ませんか」

「ま、ありがたいけどな」

もしおっさんが手を回していなかったらアイリさんがここに居てはいけなかつたかもしれない。それを考えると俺の徒労で済むだけでいいのなら安いものだ。ただ愚痴は言っても罰は当たらない。

「そついやこれからどうするんだ？ 日程なんか全然知らないぞ？」

「そう言えば一也さんには言ってますでしたね。今日はこの後に始業式があるんでそれに出ます。その後はクラスに別れてホームルームで解散です」

「なるほどね。これも聞くのを忘れてたけど、泊まる場所とかは？ 寮とかあるのか？」

「学生寮に登録されている筈ですよ。えっとお父様が渡してくれた中に…… あ、ありました。はい、どうぞ」

「サンキュー」

レイラから鍵を受け取る。どうやらこれが寮の鍵らしい。

鍵の番号は666。どこか不吉な数字だ。

「アイリさんは悪いですけど私と同室になるんですけど……」

「構いませんよ」

「そうですか」

とりあえず当面の予定も決まった。

始業式の始まる時刻もそろそろ迫っているらしいので、このまま四人で始業式が行われる体育館へと向かう。

体育館に着くとこの学園の先生に先導され中へと連れられて行く。どうやら思った以上に人数は集まっているようで、四分の三の椅子

は埋まっていた。

あまり目立ちたくもないし、それ以上に前の方に開いている椅子まで行くのは面倒くさいので、一番後ろの席に四人並んで座る。

座って十分も経つと始業式は開始された。

始まりはお決まりの校長による長い話——と思ったのだが、この校長はそんなことはせず話に簡潔に纏めていた。終わった後、礼をした直後にこちらを見た気もしたが。

その後はつらつらと式は進行していき、生徒会長による挨拶が始まった。

おっさんからの聞いた話ではグレイア王国の賢姫らしい。

綺麗な金髪をツインテールで纏め上げていて、動作が入る度にその二つの髪の束がピヨピヨと動いている。その様子を俺は笑いながら見ていた。顔の方も美人というよりは美少女という言葉が大変似合う。

「一也様？」

「なんでもない」

そんなことを考えていたのが顔に出たのか、アイリさんが少し訝しむ。それを何も無いと言い逃れる。

しだいに生徒会長のあいさつは佳境を迎え、ついに終わりを迎えた。

その瞬間に気になったのが、俺の少し前に座る紫の髪をした男子生徒が忌々しい感じで生徒会長のことを睨んでいた。

それからは特に何もなく始業式は終わった。

結局会長を睨んでいる生徒のことは何もわからなかった。

「そう言えばフィルってどのクラスなんだ？」

始業式も終わり、各自は好き勝手にクラスへと足を向けている。そんな中、俺達も自分のクラスに移動しようと思ったが、フィルがどのクラスなのか知らない。まあレイラとこんなに仲がいいということは同じクラスなのだろう。

「レイラと同じSクラスですよ。一也さんはどうなんですか？」

「俺はおっさんの権力をフルに使った結果、レイラと同じクラスらしい。ということでフィルと同じクラスな訳だ」

「そうなんですか」

ほわゝゝ、とした感じで俺を眺めるフィルは本当に小動物みたいだ。

レイラやアイリさんとはまた違った可愛さがある。まあアイリさんは可愛いというより綺麗というのが適しているか。

「ならさっさとクラスに移動するか。皆同じクラスのようにだし」

「はい！」

「そうですね」

「参りましょうか」

先導していくのはアイリさん。

それにしても何でアイリさんは学生でもないのにこの学園の地理を知っているのだろうか？

クラスに着くと生徒達は皆各々好きな席に着き、クラスメイトと談笑していた。

どうやら席は勝手に決めてよさそうなので、俺は窓側の一番後ろの席に座る。元居た世界でずっと座っていた場所であるため物凄く落ち着く。

俺の前の席にはフィル、横の席にはレイラが座り、俺の後ろ――部屋の隅でアイリさんは待機している。これならアイリさんが俺に仕えているのではなく、王族のレイラに仕えているように見えて、特に違和感はないだろう。

それでも部屋の中に特級の美女のメイドがいることは物珍しいことに変わりなく、その視線の大半を集めていた。

「お前らさつさと座れえ」

急にドアが開き、やる気のない声が響いてくる。

その人物が姿を現し、教卓の前に陣取る。

「今日からこのクラスを受け持つゼクス・アウセウス・ビーチエルだ」

どうやらあのやる気のない男性はこのクラスの担任らしい。

やる気のないことに目を奪われがちだが、あの担任には隙というものが存在しなかった。どうやらかなりのやり手らしい。

「今日はざっと今学期中にあることを説明するぞ。まず最初にあるのが明日の魔力測定だ。まあこれは受けた奴だけ受けて、受けたくない奴は別に受けなくていいぞ。どうせこの教室でやるしな」

別に受けなくても問題はないのか。

俺の魔力は馬鹿げてるし、器具も壊してしまうだろうから受けなくていいだろう。あまり目立つのもどうかと思うし。

「次は二週間後にある魔法大会の受付だ。これは別に説明はいらないな」

「魔法大会？」

「一也さんは知りませんでしたね。この学園では毎年魔法を使った大会があるんです。内容は毎年変わるんでわかりませんでした、去年は魔法を使った宝物探しでした」

「中々おもしろそうだな」

「ただ、その探している最中の妨害もありでしたので、混沌とした大会でしたが……」

「そ、そうか……」

予想以上のものを計画してるんだな、この学園……

「今年の大会内容は一対一による魔法戦闘だ。戦いも魔法球の中で行われるから本気の戦いになるぞ」

「へえ……」

特に出る気はないけど、見る分にはおもしろそうだな。

「肝心の魔法大会はいつやるんだ？」

「夏休み明けですね。他の学園では体育大会とかしている季節です。まあその時は魔法大会だけでなく色々な催しも行われるので、一種のお祭り騒ぎになります」

「んで最後に二カ月後にあるのが試験だから、ちゃんと勉強しておくようにな」

「マジかよ……」

この世界に来てまだ一カ月と少しの俺にとって勉強は鬼門だ。今日から頑張って勉強するしかないか。

レイラやアイリさんに教えて貰えば、二か月あれば欠点を取るということはなくなる筈だしな。

「今学期はそんなもんだな。今日は特に連絡もないし、これで終わりだ。んじゃ解散」

そう言っ て部屋を出て行く担任。

本当にやり手なのか疑わしくなってきたな。

「んじゃ寮を確認しにいくか」

「そうですね。私は前と同じなので問題はないですけど、一也さんはそうはいきませんし」

「じゃあ私は今日用事があるから先に帰るね？」

そう言っ て手に荷物を持つフィル。

「そっか。んじゃまた明日な」

「はい、また明日。レイラとアイリさんもまた明日」

「また明日」

「気を付けて」

そう言い残しフィルは足早に帰って行った。

フィルが居なくなり最初の三人に戻る。ここに居ても仕方がないのでさっさと寮の場所を確認しにいく。

寮は校舎から近い場所にあるようで、十分もするうちに辿り着いた。

「ここが男子寮になります。この向かいにあるのが女子寮ですので、

何かあったら管理人、または呼び鈴を鳴らして下さい」

「わかった。明日はどうする？　一緒に行くか？」

「そうですね。なら朝の8時15分にここで待ち合わせということ
で」

「OK。んじゃまた明日」

「はい。また明日」

「また明日」

俺はレイラとアイリさんと別れ、自分の部屋へと向かう。
鍵を開け中に入ると、一人では広すぎる部屋が眼に入る。またこ
のパターンかと思い、おっさんの気のきかせ方に苦笑する。
折角用意してくれた部屋なんだ。精々ゆっくりさせてもらうこと
にしよう。

そっぴや今日の晩飯ってどうするんだろっか？

OP・入学式（後書き）

これでやっと学園編に入ることが出来ました。
本当に長かったなあ……

少し前にとうとう大台の1,000,000アクセスに乗りました！
皆様方、本当にこのような稚拙な文を読んで頂いてありがとうございます。
これからも精進していくので、どうぞよろしくお願いします。
す。

1・魔力値測定（前書き）

とりあえず一週間単位で投稿してきたけど、それも今回で終わりを迎えそう。理由は活動報告を見て貰えばわかるかと。

1・魔力値測定

結局晩飯の件はアイリさんが呼びに来てくれるという結果となった。

まあアイリさんが呼びに来てくれなければ晩飯を抜く羽目になりそうだった。だって食べる場所とか知らないし。

晩飯と一緒に取った後は寮へと帰宅。

部屋には授業で使われる教材やらなんやらがちゃんと準備されていた。

されていたのはいいんだが、明日に何の授業があるかなど、さっぱりわからない俺にとっては非常に困り、最終的には“次元空間”に全て放り込む結果になった。

それにしてもこの魔法は便利だ。困ったらとりあえず使えるという有用さ。非常に重宝する。

まあそんなこんながあつて、現在は翌日の待ち合わせ時間より少し前。

身支度などは基本的に時間が掛からない俺は二人を待つ為に少し早い時間から外へと出向く。朝食はレイラに教えて貰って——というよりも昨日晩飯を食べたところだが——一人で食べた。二人を誘ってもよかつたのだが、思った以上に早くに目が覚め食べに行つたので遠慮した結果となつた。

「あ、一也さん」

「ん？ お、フィルか。おはよう」

「おはようございます！」

二人を待っていると寮からフィルが出てくる。

どうやら二人よりも早起らしい。イメージ的には朝に弱い感じ

がしたのだが、そうでもないのだろう。
駆け足で傍まで近寄り、二人が来るまで暇なのでフィルと会話する。

「フィルって朝は強いのか？」

「そうですね。まあ一般的というくらいじゃないでしょうか。それでもレイラよりマシなのは自負してますけど」

「あゝ、レイラは朝が壊滅的に弱いからな。一人だと起きれないんじゃないのか？ アイリさんが居るからどうにでもなると思うけど」

「あ、あの美人なメイドさんですね」

「そうそう。あの人本当に有能な人だからな。身の回りのことかなら殆どやってくれてる筈だ」

数分くらい笑いを交えながら談笑していると、やっとお目当ての二人が外へと出てくる。二人は俺の姿を確認すると手を振りながら歩いてきた。

「「おはようございます、一也様」^{さん}」

「おはよう、二人とも」

「フィルもおはよう」

「おはよう」

朝の挨拶を交わした四人は、もうこの場に留まる事はないということまで学園を目指して歩いていく。

道中も特に問題はなく、教室に辿り着いた。ただ、やはり視線は昨日と同じく集めまくってはいたが。

「全員集まってるか」

教室に着いてからもレイラ達三人と会話を続け、HR始まりのチャイムが鳴り響くと担任のゼクスはやってきた。相も変わらずやる気のない声だけが教室ないに木霊する。

「今日はHRと一限目の時間を使って魔力値の測定をするって言うたよな？」

ゼクスの問いに幾人かの生徒が是と答えた。

その様子にうんうんと頷くゼクス。本当に大丈夫なんだろうか。

「んじゃとりあえず始めるとして……まずやらない奴は拳手しろ」

そう言われたので俺は真っ先に手を上げる。

俺としては全員が調べるのだろうと思っていたが、その考えは容易に覆された。

周りを見渡してみると自分の他にも一人だけ手を上げている人物が居る。深い青を髪に宿し、鋭利な瞳を持ち、それを隠すかのように眼鏡を掛けている少女。

ゼクスはそれを確認し、他にもいないかどうかをもう一度だけ確認する。

やはり受けないのは俺ともう一人の少女だけであった。

「んじゃ名前——は面倒だな。席の廊下側から順番に測りに来い」

ゼクスはそう言い計測器を教卓の上へと載せる。

それを見た生徒達は、ゼクスに言われた通りの順に魔力を測りに行く。

測った生徒が見せる顔はそれぞれで、一番多いのは去年より魔力値が増え、それに歓喜を表す表情で、あまり翳りを見せる生徒はいない。それでも時たま、あまり去年より伸びていなかった生徒達も存在した。

その様子を冷ややかに見つめる青の髪を持つ少女。

「クレア・ルドラフ・リユクセンス。去年から私と同じSクラスに所属していますが、その実力などは未知数。Sクラスに所属しているから能力は高い筈なんですけど、一人で居るのを好んでいるのか、話している姿を見たことは一度もありません」

「レイラ？」

「いえ、一也さんが興味深そうに見ていたので」

レイラの話にはあまり役に立つ情報はなかったが、名前だけはわかった。

「何であんなに冷めた表情をしてるんだろうな」

「さあ……。ただ――」

「ただ？」

「いえ、やっぱり何でもありません」

「そっか」

そうして会話は途切れる。

フィルも俺と同じような顔をし、アイリさんは無表情。特に興味もないのだろう。

俺はもう一度だけ彼女の方を見る。

すると彼女も同じようにこちらを見つめており、眼が合う。眼が会ったのは刹那で、すぐに反らされた。

「あ、次は私の番ですね」

そう言っ て教卓に近づくレイラ。

俺はその言葉で先ほどの視線のことを忘れてしまう。

「それじゃこれを付けろ」

「はい」

前に俺が調べた器具と似たような器具を扱う。あれの同種、でもあれは確か最新式とか言っていた覚えがあるから、今レイラが使っているのは旧式なんだろう。

少しの空白時間の後、担任のゼクスは少し驚いた後に結果を伝えた。

「凄いなクライトリヒ。結果は103万だ」

「大分と成長しましたね」

周りの生徒はすげえ、と感心や妬みを含んだを声を上げた。

俺も普通に凄いと思う。初めて会った時は確か80万と言っていたのだから、実に20万もの上昇を見せている。

その様子にレイラは照れながら席へと戻って来た。

「思いつきり成長したな」

「自分でもこれほど伸びているとは思ってませんでした」

「凄いね！ 私はどうなんだろ……。流石に100万までとは言わないから去年より伸びてたらしいけど」

レイラが嬉しそうな半面、フィルは不安そうだった。

親しい友達がこれだけ成長しているのだから、自分も成長していい欲しいと思う気持ちは当然のものだと思う。

それを察してかレイラもフィルを励まし、その順番も回って来た。

「それじゃ頑張つてこい」
「はい！」

最終的には笑顔で測定へと向かった。

「んじゃこれね」

本当にやる気のない声が響き、フィルは差し出される器具を付ける。

レイラと同じく少しの間があり、そして発表された。

「おつ、クライトリヒ程じゃないがそれでも凄いな。91万だ」
「やった！」

満面の喜びを顔に表してフィルは戻って来た。

「やりましたよー也さん！」
「そうだな。にしても去年はどれくらいだったんだ？」
「去年は70万でした」
「んじゃフィルもレイラと同じくらいの伸び率だな」
「はい！」

この年齢はそんなに伸びるものなんだろうか。
爺さんは2、30歳くらいが一番伸びるとは言っていたけど、それでもないのか？

「よし全員終わったな？ とりあえず一限目はこれで終了にするから休憩に入ってもいいぞ」。ただ外にはチャイムが鳴ってから出ること。んじゃな」

そう言ってゼクスは担任という仕事を放り出したかのように教室から姿を消した。

しかし周りもそんなことに慣れているのか、特に不満なども出ることなく、各自休憩時間へと入っていた。

俺もいつまでもそんなことに拘る必要もないかと思い、周りと同じようにレイラ達と会話を楽しんだ。

時刻は昼を過ぎ、現在はレイラ達と共に昼食も取り終えた。

四時限目までの授業は全て座学で、やったのは選択科目の魔法理論と、必修科目の数学と歴史。俺は選択科目を選んだ覚えはないのだが、どうせレイラと合わせるようにおっさんが決めたんだろう。まあ俺も別にどんな授業でも受ける気ではあったので問題はないが。

それだと思ったのは、どうやらSクラスからEクラスまであるのだが、どうやらクラスはあまり関係はないらしい。あるとすれば、上位クラスにはそれ相応の身分の者が、下位クラスには平民出身の者などが集まり、それをクラス単位で分けているらしい。

だからクラスが上位だから優秀というわけではないということだ。

そんなことを聞きながら授業を受けてみた感想は、数学などは元居た世界より簡単なので問題はなく、魔法理論などは受けた事がない科目だが中々に楽しい。まあ俺にとってこの世界の魔法理論は毛ほどの役にも立たないが。

ただやはりと言うべきか、歴史に関してはチンプンカンプンだった。正直後ろでアイリさんが授業の合間合間に解説を挟んでくれな

かったら全くと言っていいほどわからなかった。本当にアイリさんには感謝してもしきれない。

今日から歴史なんかは予習復習は欠かせなさそうだ。

「んで次は魔法の実習と……」

五限と六限は外で魔法実習らしい。

正直面倒だとは思うが、どう足掻いてもやらなくてはいけないだろう。

レイラ達の隙を見てサボろうと思ったのだが、アイリさんはそれを見越して俺が逃げられない位置に陣取っていたので逃げられなかった。そこまでされると仕方がないと諦めて、俺は授業を受けることにする。

「そういえば一也さんってどれくらい魔法を使えるんですか？」

一番聞かれたくなかった質問をとうとう聞かれてしまった。

俺もどうやって答えようか思案していると、レイラは普通にぶつちやける。

「一也さんは世界一の魔導師ですよ。私の師であるクレウイス様を打ち破りましたし」

「えっ！？ あの“魔神”をですかっ！？」

「ええ」

「ふえゝ」

思いつきり尊敬の眼差しを向けられて居心地が悪い。

確かに勝ったのは勝ったけど、正直ほとんど差はなかったと思う。それを証拠に、もう一度戦えば勝てる保証などどこにもなく、勝率にしてみても五分五分だろう。それはきつと爺さんも思っている。

「なあレイラ。そんなにぶっちゃけてよかったのか？」

「フィルなら構わないでしょう。それにフィルは口は堅い方ですし、私達が不利になるようなことにはなりませんよ」

「言ったら何か問題があるんですか？」

「まあ……なあ」

「それじゃ誰にも言いません。私の胸の内に秘めておきます」

「それならいい……のか？」

「いいのではないかと」

「まあアイリさんもそう言ってるし問題もないか。何かあればその時に対応すればいいし」

そんな俺のレイラよりアイリさんを信頼していることにむくれるが、それはしょうがないと思うのは俺だけではない筈だ。

片や少しおつちょこちよいなお姫様で、片や完璧なメイド。信頼するのなら断然メイドの方だろう。

「さて、それではそろそろ授業が行われる練習場へ移動しましょう」「それもそうだな」

最後はやはりと言うべきか、アイリさんが締めくくり俺達四人は練習場へと向かった。

そついや、どのくらいの魔法を使えばいいんだろうな。

1・魔力値測定（後書き）

推薦さえ取れば安全圏なんだが……
ただ成績に少し不安が。一応頑張ってるんだが、それより上の人
に取られるかというくらいに成績なんで（汗

2・模擬戦（前書き）

二か月振りの投稿w

明日から三連休なので少しだけ書いてみた。掛かった時間は二時間と超特急で仕上げたので駄作になっていると思いますが、暇な方は読んでください。

2・模擬戦

辿り着いた練習場は思った以上に広く、様々な器具なども置かれていた。流石に城の錬武場とまではいかないが、数十人が魔法を使ってもなんら問題にならないほどその場所は広がった。

俺はこの授業でどのようなことをするのかレイアに尋ねる。

大体の内容を聞き、そこから自分がどれくらいの実力を出せばあまり問題にならないかを考えていく。クラスの反応からすると、魔法力量だけならレイアが間違いなくこのクラスでトップだろう。いや、一人受けていなかった人間が一人――

「確かクレアって言ったっけ……」

彼女がどれほどのものなのかはわからないが、多分俺の予測ではあるが、彼女も俺と同じであり実力を見せたがっていないんじゃないだろうか。そう考えれば辻褄が合う。まあそれも今は関係ないことと言つことで脇に置いておく。

ということとは、最高でもレイアクラス。目立ちたくはないのでフイルより下というところが安全圏だろうか。

様々なことを思考しながら、平行してレイア達との会話も楽しむ。しばらくすると担当の教師もやって来てその会話も終了することとなった。

「皆集まってるか？」

「この授業って担当が担当かよ……」

まさか担当教師が俺達のクラス担任であるゼクスらしい。

まあ一応中々の使い手ということは理解しているが、それでも普

段のやる気のない声などで本当に大丈夫かと疑ってしまっ

「ゼクスはやる気がなさそうに欠伸をしながら出席生徒の人数を数えあげていく。点呼でもするのかと思えば適当に自分で数えているし。」

「あれでもこの学園一の魔法教師なんですからね」

「そうと思いたくないな……」

「しかし一也様。あの方には隙というものが存在していないのでは？」

アイリさんは思った以上に“眼”がいらしい。

戦闘系統は素人と思ったけど、まさかそれを見抜けるほどとは思ってもいなかった。

「へえ、よくわかったな」

俺は素直に感心しながらアイリさんに顔を向けた。

アイリさんは「恐縮です」と言い、俺に一礼し、そしてまた普段通りに戻る。

「よし、全員集まってるな」

どうやら生徒の人数の確認を終えたらしい。

手に持つ出席簿らしきものを叩きながらゼクスは声を掛ける。

「今日の授業は今学期初めてということ……模擬戦をするぞ」

「「「「「えー!?」「」「」」」」

ゼクスの言葉にクラスの大半は驚いたような声を上げる。

どうしたのかと思いレイアに尋ねようとしたところ、御丁寧なフ

イルが教えてくれた。

「去年までは授業で模擬戦をすることなんてなかったんですよ」

「そうなのか？」

「はい。やつても精々魔法の押し合いというところですよ」

「押し合い？」

「えっと、同じ魔法を互いに使って、それで押し合うんです」

「なるほど……」

つまり力比べと言う訳か。

でもそれだと単純に魔法量が多い方が勝つんじゃないか、って。そう言えば、この世界の魔法は威力がほぼ均一だったな。ということとは制御面などの勝負ということになるのか。

でもそう言えば爺さんの魔法の威力は俺とほど遜色なかった気がするけど。最強クラスにもなるとそうなるもんなのかな？

「あー、五月蠅い五月蠅い。もうこれは決定事項だ、グダグダ抜かすな」

「もう既に面倒臭がつてるのかよ……」

結局グダグダ言っていた生徒達はゼクスの成績下げるとの呟きに屈して模擬戦をすることを無理矢理納得していた。それにしても最終手段がそれとは酷い。

模擬戦の順番は今朝測った魔力量の多さの低い順からペアを組まされるようで、レイアはフィルとするらしい。ちなみに俺は測っていないので、同じく測っていなかった彼女——クレアとするらしい。順番は最後とのこと。

そうになると、彼女がどこまで戦えるのかと考えてしまう。流石に爺さん達と同等ということはあり得ないだろうが、實力を見せたがらない奴は得てしてその人物が持つ實力は高いというもの。雰囲気は冷たく、孤高の一匹狼というところか。予測だが、レイア達に劣らない程の實力は持っていると思う。

そんなことを考えている最中、模擬戦は消化されていく。

現在は半分が終わったところで、やはり俺からすれば少しつまらないというところ。いや、これではレイアやフィルも同じようなものか。この年齢なら十分なのだろうが、爺さん達と戦った俺やそんな人に教えを請うているレイア、それと同格のフィルなどにとっては些か物足りない。

飛び交う魔法も威力制限されていて、担任が創った結界の中では大分と引き下げられているようだ。しかしこの結界、中々応用が効きそうな魔法だ。使い方を変えれば相手の魔法を使用不可まで落とせるかもしれない。

「でもこんな魔法を使うんなら、俺が爺さんとやり合った時みたいに魔法球を使った方が安全じゃないのか？」

「それはそうですね。多分、実戦の空気なんかを知ってほしいんじゃないでしょうか？」

「そういう捉え方もあるのか」

確かに実戦では練習通りに身体が動かないことなんて多々あるかな。それに自分の命が掛かっていると言うのならそれだけ本気で動く事になるだろうし。

しかしあの担任がそこまで考えているとは思えない。ただ魔法球を用意するのが面倒で代用としてこの魔法を使いましたと言った方が納得出来る。

そんなことを思っていると、また一つの組の模擬戦が終了した。この模擬戦のルールは、ある一定以上の魔法を放ち、それを相手に直撃されることで勝ちを得ることが出来る。戦闘時間は無制限。使用魔法も上位までは使用可能で古代クラスは不可。しかしこの年齢で上位はおるか古代を使える人間なんてそうそういないし、今までの試合だとよくて中級クラスまでしか使われていない。中には上級まで使える人材もいるのだろうが、詠唱の関係もあって早々と使えないのだろう。

ここまでの試合を振り返ってみると、一番多かった戦法が風の下位魔法の連発。これで決着がつくことが半分くらいを占めていた。確かに風の魔法は視認が不可能で避け辛いという点もあり、初めて魔法を使って戦闘をする人間には有効な戦法だろう。

しかし風の魔法は殺傷能力が高いのも事実。今この場では結果によってダメージが大分と引き下げられ、大きくても切り傷までだが、もしこれが現実での戦闘ならば、それを使い相手を傷つけるということの意味するところは相手を殺すということ。そこまで理解して風の魔法を使用している人間は本当に数少ないだろう。実際、風の魔法が使用される度に担任のゼクスは顔を顰めている。

「次は——クライトリヒとスカーلزのペアは準備しろよ」

「はい。それでは一也さん、少し行つてきますね」

「ああ、二人とも怪我だけはするなよ」

俺はそう言つて二人を送り出す。

クラスの間も二人の試合には興味津津だ。なんせ二人はクラス内の魔法量ナンバー1とナンバー2だからな。

「どちらが勝つと思いますか？」

「君は――」

俺に話しかけてきたのは、孤高の雰囲気を漂わせていた一人の少女。

「クレア・ルドラフ・リユクセンスです。以後お見知りおきを」

「御丁寧に。俺は一也 御難だ。それにしても、何で態々俺に話しかけてきたんだ？ 今まであれほど他人と関わるのは嫌そうな雰囲気を漂わせていたっていうのに」

少し警戒気味のアイリさんがいるので、俺は大丈夫の意味を込めて気楽に話しかける。

「そう……ですね。端的に言えば、今まではあまり興味を持てる人物がいなかったからでしょうか」

「レイラとかは？」

「確かに彼女には少し興味はありますが、彼女は王族でしょう？ 彼女と関わると何かと面倒事に巻き込まれそうなので」

「ふうん……」

どうやら想像していたような人物ではなかったようだ。

もっと堅苦しい、孤高を貫くようなものと想像していたが、彼女は違う。興味があるものには普通に構う、好き嫌いが激しい子供のよう。

「それ以上にあなたには興味を持っています。王族に関わり、あまつさえその王族と親しげに話す。そんなあなたに」

「……そこまで美少女に興味を持って貰えるのは光栄だが、俺がそこまで興味を持たれる人間じゃないぞ？」

何て言うか、彼女はアイリさんに似ているような気がする。

「それはすぐにわかることです。ま、今は彼女達の試合を見ましようか。二人ともこの学園ではトップクラスの实力保持者ですし、中々興味深いです」

「……そうだな」

「氷の精霊よ——」

「火の精霊よ——」

二人は遠く離れ、同じように詠唱に入る。

片や氷で、片や火。互いに反発する属性を選択する。

「煌く欠片となり渦巻け その力を以て敵を飲み込め！ “ダイヤモンドダスト”！」

「爆発は力なり 力は爆発なり 故に粉碎しろ 彼方までを！ “ナパームブレス”！」

荒れ狂う吹雪と爆発する炎群が両者の中央で激突する。

威力制限をしているとはいえ、あれを直撃貰えばそのまま天国に召されるかもしれないほど、あの魔法には力が込められていた。

二人は互いの魔法が相打ちになることを予想していて、既に次の詠唱に入っていた。

「風の精霊よ その力で我の風と同化させよ！ “シルフィスウィング”！」

レイラがその魔法を唱えた瞬間、急激にその速度は上がる。そうやら速度倍増の魔法らしい。レイラはその魔法を使い一瞬でフィルの胸元まで入り込もうとする。が、フィルは慌てずにそれに対処を入れた。

その行動を読んでいたのか、入り込まれる二歩手前で詠唱は完了し、魔法は発現される。

「アースガード」！」

突如発生する岩の壁にレイラはブチ破る手段は持ち合わせていない。

瞬間に身を捻り、そのまま宙に跳躍してやり過ごす。その間にも詠唱をしているところを見ると流石としか言いようがない。

「流石ですね……。両者とも間違いなく学園トップクラスです」

「……君は」

「クレアで結構ですよ」

「そうか。ならクレアはどれくらい強いんだ？ 俺の予想だとレイアを抜かすまでは言わないが、それでも同格だと思っているけど」

俺はそうクレアに問いながらレイラ達の勝負にも眼をやる。

下位の魔法による手数勝負。

レイラの速度倍増の魔法の効果が切れたのか、今は元の速さしか出ていない。

「それは光栄ですね」

そう言うだけでクレアは何も零さない。

下手すると戦闘面だけに限って言えばレイラ達よりも上かもしれない。

完全に感情を制御出来ている。これほど面倒な相手はこの世界にも少ないだろう。

「リュミエールストライク」！

「ボルカニックレイブ」！

と、ここまで話し込んでいるとレイラとフィルの戦闘にも決着が着いたようだ。

流石に王家専用の光魔法には威力負けするらしい。それに元々魔法量から見ればフィルの方が圧倒的に不利でもあった。

それ以上にレイラ相手にあそこまで戦えるフィルが凄いと俺は思う。

「お疲れ、二人とも」

「ありがとうございます、って？ クレアさん？」

「お疲れさまです、レイラさん、フィルファールさん」

俺の横に居たクレアにレイラは驚いているようだった。そんな行動に目もくれず、クレアは淡々と挨拶を返す。

「さ、次は私達の番のようです」

「んじゃ少し行ってくるかね」

最後にもう一度声を掛け、俺はクレアと一緒に練習場の中央まで足を進める。

ゼクスが声を掛けるまでもなく、二人は所定の位置に着いた。

「タクツ、お前達は少し早いんだよ。俺を休ませるっていう考えはないのか？」

「あんたは少し怠け過ぎなだけだろう？」

「そうですよ。教師なんですからもつとシャキつとしてください」
「あーあー聞こえない聞こえない。んじゃ準備はいいか？」

喚いた後一点、普段とは違い真面目な顔に変化する。
いつもそれくらい真面目なら俺も考え直すと言っのに。

「私はいつでも」

「同じく」

二人は同じ返答を返し、そしてゼクスはその返答に頷いた。
さて、どこまで出来るのか。

あまり手の打ちも晒すのは嫌だが、彼女相手ならそうも言っていられないだろう。既に彼女の周りには魔力の素が集まっている。量的には中位を発動出来るくらいか。

「なら——初めッ！」

声が掛かった瞬間、俺は彼女の魔法に襲われた。

2・模擬戦（後書き）

次の投稿は12月に入ってからくらい。

11月末に公募の試験があるので、それさえ受ければ勝ちなんですよね。

一応センターのテストは七割取れるようになってきたから大分と自信はついて着てるが……私大に通用するのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4597j/>

召喚されたッ！？

2010年12月14日21時54分発行